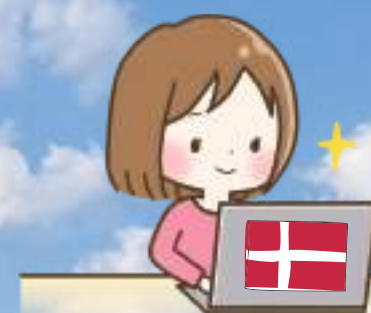


未来の畜産タネ
デンマーク
オンライン畜産研修
育成プロジェクト



日本中央競馬会 令和3年度畜産振興事業 未来の畜産女子育成プロジェクト



公益社団法人 国際農業者交流協会

日本の畜産をもっと元気に!!

私たちが学んだデンマークの畜産業
その中で感じたこと、考えたことが、
日本の畜産をもっと元気にする!

私たち 畜産アンバサダー



目次

1	はじめに	2
2	プロジェクトについて	3
	プロジェクトの目的	3
	未来の畜産女子育成プロジェクトの1年	4
	参加者一覧	6
	研修日程・研修の様子	7
	研修でお世話になった方々	10
3	畜産アンバサダー活動の報告	12
4	参加者への意識調査	18
5	参加者の報告	24
	畜産アンバサダー 19 名	24
	メンター 2 名	62
	受入学校	66
6	未来の畜産業に対するアイデア	68
7	むすび	88





2 プロジェクトについて

プロジェクトの目的

未来の畜産女子育成プロジェクトとは

JRA 日本中央競馬会の令和3年度畜産振興事業により実施されました。この事業では、その時々々の現状課題を踏まえた必要性や緊急性等に応じ、年度ごとの公募テーマと重点的に対応する事項が定められます。公募テーマの中から「担い手の確保」、重点的対応事項の中から「畜産現場における女性の活躍推進」を選び、この公募テーマと重点的対応事項に沿って事業を実施するため、海外研修と啓発活動を組み合わせた事業が「未来の畜産女子育成プロジェクト」です。次世代の農業者につながる人材育成のため、北は宮城から南は沖縄まで、全国から19名の高等学校生徒が参加しました。

新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、令和2年度は本事業を中止しました。令和3年度は引き続きコロナ禍であったことから、オンラインでの研修を中心としたプログラムを実施することとなりました。

舞台はデンマーク

高校生たちに学んでほしい畜産先進国として、デンマークを選びました。デンマークは世界幸福報告書(The World Happiness Report) 2021による幸福度ランキングで第2位(日本は149か国中第56位)という結果の国でした。幸福度の指標は、国民1人当たりの国内総生産(GDP)、社会保障制度などの社会的支援、健康寿命、人生の自由度、他者への寛容さ、国への信頼度などを基にしています。面積は九州ほどの小さな国ながら、ヨーロッパ屈指の畜産国と言われています。酪農では、放牧酪農を主として、ホルスタイン、ジャージーを育成する酪農家が多く、乳固形分量は世界でもトップクラスであり、チーズに適した高品質の牛乳を生産しています。さらに、

養豚産業は多くの農場が繁殖と肥育の一貫経営で、豚肉の輸出額は世界第3位を誇ります。畜産現場での女性の活躍が目覚ましく、輸出産業と位置付けた畜産ビジネス、大規模化による効率化・経営マインドの高さなど、日本のお手本となる部分が多くあります。研修をコーディネートしたのは、デンマーク王国第3の都市オーデンセにある、Dalum農業学校で、デンマークで最も歴史の古い農業学校です。135年前からこの地域の農民に対して冬場の農閑期に教育の機会を提供してきました。今でも、将来農業を目指す若者が多数学んでいる、農業の学校です。オーデンセは、「人魚姫」「マッチ売りの少女」など童話作家で有名なハンス・クリスチャン・アンデルセンの生誕地です。

啓発活動

研修から得た知識と経験を基に日本の現状を比較考察し、得られた結論や意見を身近な人たちに広く啓発する「畜産アンバサダー活動」を実施しました。19名の生徒が所属高等学校内外で広く宣伝・啓発し、若年層への畜産業参入の動機づけや、女性参画機会の促進、畜産業を担う女性人材の重要性について意識改革をはかりました。畜産業界では、女性農業者の能力が十分に発揮される場が限られており、畜産業の担い手となる高校生が、海外の実情を知って感化され、日本国内で広く未来の畜産への提案をしたり、畜産の魅力を広くPRする機会を設けました。

未来の畜産業に対するアイデア

19名の高校生は、本研修後、自身の畜産アンバサダー活動を実施する中で、未来の畜産に対するアイデアを考えました。このアイデアは、研修を通じて得た知識や考えを基に、各自で考えられる我が国の畜産に対する提案や宣言です。68ページから始まる畜産アンバサダーたちのアイデアをご覧ください。

1 はじめに



公益社団法人
国際農業者交流協会
会長 野中和男

公益社団法人国際農業者交流協会は、英語名をThe Japan Agricultural Exchange Council(略称JAEC)と表記し、海外において先進農業技術や経営などを学ぶプログラムを提供する専門機関として昭和63年に設立されました。前身団体からの累積では、これまでに14,990名を超える日本青年が海を渡り、言葉の壁や文化、生活環境の違いを乗り越えて先進農業を学んできました。海外で研鑽を重ねた方々は、培った知識と経験を生かし、我が国における中核農業者として、さらには農業関連諸企業や国際協力分野において活躍されています。

本会では、上記に加えASEAN諸国や欧州諸国からの農業研修生の受入事業、国際化に対応するための課題について勉強を行う研究会やセミナーの実施など、多岐にわたる事業を行っています。これらの事業は、欧米豪及びアジア諸国の政府機関、関係団体との長年に亘る協力と信頼関係によって実現されているもので、その質と研修効果の高さは国内外から高く評価されています。

JRA日本中央競馬会畜産振興事業により平成30年度から行っている、未来の畜産女子育成プロジェクトは、本会が長年手がけてきた事業運営とそのノウハウを生かした内容となっています。本年度については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりオンラインでの開催となりましたが、本会と

長年に亘ってパートナーシップ関係にあるデンマークのDalum農業学校の多大な協力により、充実した学びを得ることができました。また、デンマークの風景や、農業を詳しく知る手段としてVR動画やインタビュー動画など、オンライン学習を充填して質の高い学習を実現できたものと考えています。

プロジェクトに参加した高校生たちは、オンライン研修で得た知識や経験を参加していない人たちと広く共有し、畜産業の魅力を発信していく「畜産アンバサダー」として活動しています。母校での体験発表のみならず、小さな子供にも畜産業に興味を持ってほしいと小学校や中学校を訪ねたアンバサダーがいました。高校生たちの言葉は、聞く人たちの心を強く惹きつけ、畜産業の魅力を元気いっぱいに発信する機会となりました。将来の日本農業を担う人材として、皆さんの今後の活躍を心より祈念申し上げます。

本プロジェクト実施にあたりまして、ご指導・ご支援・ご協力を賜りましたすべての方々に感謝申し上げますとともに、引き続き、本会運営事業へのご理解とご協力を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

未来の畜産女子育成プロジェクトの1年

①推進委員会
(5月7日)

準備

- ②事前調査 (5月中旬)
- ・本研修受入学校の選定
 - ・農畜産概況等の確認

②事前調査
プロジェクトの核となる本研修を実施するため、デンマークのオーデンセ、ホーセンスの調査を行いました。デンマーク在住で、海外農業研修を経験された方に調査をしていただきました。

③プロジェクト参加者募集
(4月26日～5月20日)

- ④プロジェクト参加者選抜
(5月下旬)
- ・書類審査
 - ・オンライン面談

③④プロジェクト参加者募集と選抜
全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場協会、日本学校農業クラブ連盟にプロジェクト周知のご協力を頂き、全国 19 の高等学校から応募がありました。
書類審査、オンライン面談により、プロジェクト参加者を選抜しました。

①推進委員会
(6月17日)

研修

オンライン

- ⑤事前研修 (6月14日～18日)
- ・事前学習
 - ・テーマとキーワード選択
 - ・メンターからの講義
 - ・農林水産省からの講義
 - ・デンマーク大使館からの講義

オンライン

- ⑥本研修 (8月16日～27日)
- ・テーマとキーワードに沿って研修
 - ・VR 動画を使った学習
 - ・Dalum 農業学校の授業
 - ・畜産業従事者へのインタビュー
 - ・デンマーク人学生との交流
 - ・農畜産物の食べ比べ

YouTube Live

- ⑦研修成果報告会 (9月22日)
- ・研修の成果を社会に発信
 - ・畜産アンバサダー活動のキックオフ

①推進委員会
(9月22日)

①推進委員会 ⑧成果評価委員会
プロジェクトを客観的、意欲的、専門的に運営し評価するため、外部の専門家3名及びメンター2名による委員会を開催しました。

⑧成果評価委員会
(3月11日)

畜産アンバサダー活動 (9月～2月28日)



パンフレット、
報告書にまとめ
広く配布

Instagram、Twitter、
TikTok などの SNS、
ホームページにて
広く発信



未来の畜産へのアイデア

学んだことを
ふまえた
自分の意見

畜産業の魅力・女性の活躍促進



若者たちを鼓舞

- ・高校生
- ・畜産を目指す若者
- ・中学生・小学生など

所属高校を中心とした
発表会や農業イベント
で畜産業の魅力を発信

農畜産業界に 広く PR

- ・農家
- ・農畜産関連企業
- ・農畜産団体
- ・メディア



就農者の増加

農畜産業界の活性化



参加者一覧

●畜産アンバサダー（高等学校生徒）

北は宮城県から南は沖縄県まで、全国から 19 名の高校生に参加していただきました。

	姓	名	所属学校	学科	学年
1	佐藤	瑞華	宮城県加美農業高等学校	農業科	2 年
2	高城	瑠菜	宮城県農業高等学校	農業科	2 年
3	大久保	冴華	栃木県立那須拓陽高等学校	農業経営科	3 年
4	伊澤	七星	栃木県立鹿沼南高等学校	食料生産科	2 年
5	木暮	千尋	群馬県立勢多農林高等学校	動物科学科	3 年
6			埼玉県立杉戸農業高等学校		
7	岩倉	綾野	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	2 年
8	内藤	佳澄	新潟県立新発田農業高等学校	生物資源科	3 年
9	松浦	日依梨	富山県立中央農業高等学校	生物生産科	3 年
10	川島	希望	岐阜県立岐阜農林高等学校	動物科学科	3 年
11	清水	七星	静岡県立富岳館高等学校	総合学科	3 年
12	瀧井	麻菜	愛知県立安城農林高等学校	動物科学科	3 年
13	前田	瑛美佳	大阪府立農芸高等学校	資源動物科	2 年
14	江口	歩那	島根県立出雲農林高等学校	動物科学科	3 年
15	庭	ひまわり	広島県立油木高等学校	産業ビジネス科	2 年
16	森岡	亜希	愛媛県立大洲農業高等学校	生産科学科	3 年
17	林	真那	熊本県立菊池農業高等学校	畜産科学科	3 年
18	黒木	樹里	熊本県立南陵高等学校	総合農業科	2 年
19	石嶺	心菜	沖縄県立中部農林高等学校	熱帯資源科	2 年

●推進委員

本事業が目的達成のためにしっかりと正しく運営されているかを評価するため、推進委員として事業運営のアドバイスをいただきました。

高橋 ゆかり 畜産農家
納口 るり子 筑波大学 生命環境系 国際地縁技術開発科学専攻 教授
鈴木 憲治 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程調査官

●メンター

海外農業研修経験を有し、畜産業で活躍する若手女性畜産農家にメンターとして参加していただきました。藤田さんからは酪農、野上さんからは養豚に関してアドバイスをいただきました。また、本研修時に行った畜産物食味試験では、生産されている畜産物をご提供いただきました。

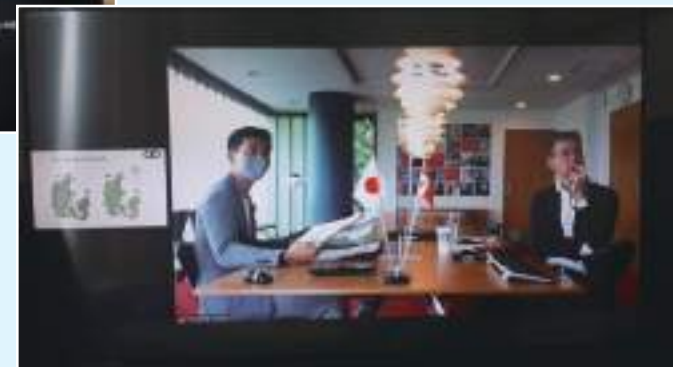
藤田 春恵 左草ブラウンスイス牧場
野上 遥 曾我の屋農興株式会社

研修日程・研修の様子

⑤事前研修 6 月 14 日～ 18 日

効果的な海外研修を実現するため、プロジェクト参加者に対して、プロジェクトの意義と目的、心構えの習得、日本とデンマークの畜産業、本研修時に学ぶテーマとキーワード設定のため、5 日間の研修を夕方 16 時～ 18 時にオンラインで実施しました。

日次	月 日	曜日	内 容
1	6 月 14 日	月	プロジェクト説明 参加者自己紹介 プロジェクトの意義や目的、スケジュールなどを説明しました。 19 名の高校生たちが、元気いっぱいに自己紹介しました。
2	6 月 15 日	火	メンター講義 メンターの藤田さん、野上さんから、これまでのキャリア、そして今取り組まれている畜産業についてお話していただきました。
3	6 月 16 日	水	農林水産省講義 生産局畜産部、経営局就農・女性課の職員の皆さんに、デンマークの畜産概要や農業女子 PJ についてお話していただきました。
4	6 月 17 日	木	研修テーマ別ワークショップ 事業推進委員の高橋先生、納口先生、鈴木先生から応援のメッセージをいただきました。 8 月の本研修に向けてグループを編成し、それぞれのキーワードを決めました。
5	6 月 18 日	金	デンマーク大使館講義 事前研修の振り返り Jesper Vibe-Hansen 参事官よりデンマークの農畜産業についてお話ししていただきました。 今回の学びをとりまとめて、8 月の本研修に向けた意気込みを発表しました。



⑥本研修 8月16日～27日

デンマークのフン島にある Dalum 農業学校にプログラムのコーディネートを依頼し、オンライン研修を実施しました。

Dalum 農業学校の国際事業部講師による講義、畜産農家との意見交換、参加者同士の討論などを行いました。また、週末には畜産を学ぶ同年代の学生たちと英語で交流し、文化の違いに触れました。さらに、畜産物の比較として、デンマーク産と国産の豚肉の食味実験や、畜産加工品の試食も行いました。

さらに学習を深めるため、講義に先駆けて予め作成していた VR 動画教材や、インタビュー動画教材を利用し、講義の中だけでは分からない風景を体験しました。

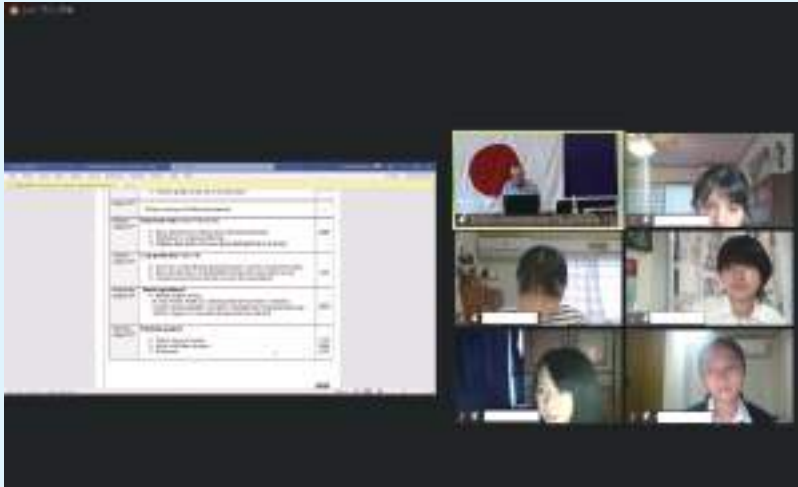
オンラインでの学習は英語でしたが、日本語の通訳が入りました。



本研修日程 16時～19時30分 実際の講義は16時30分～19時の2時間半

日次	月 日	曜日	内 容
1	8月16日	月	プログラムのスタートアップ ・プログラム及び Dalum 農業学校の講師陣紹介 ・参加者の英語プレゼンテーション 最大3分まで ・デンマークの農業教育について
2	8月17日	火	デンマークの農業と歴史について ・小規模農業から工業的農業への発展 ・少数の農家から多国籍企業への協同組合運動 ・農民組織、研究、農業改良普及員、ネットワークグループの紹介 ・農家レベル、国レベルでの獣医サービスの紹介
3	8月18日	水	デンマークの養豚について① ・豚の生産、管理に関する基本的な紹介 ・女性養豚農家 Louise Ipsen さんへのインタビュー
4	8月19日	木	デンマークの養豚について② ・屋内養豚と放牧養豚の違い ・女性有機養豚農家 Kirsten Rasmussen さんへのインタビュー
5	8月20日	金	デンマークの屠畜について ・枝肉支払い方法の基本的な紹介 ・屠畜場の紹介 ホーセンスにある Danish Crown 社を例として ・農場から食卓まで - コールドチェーン、トレーサビリティ、食品の安全性について

6	8月21日	土	Dalum 農業学校で学ぶデンマーク人学生との交流 男子学生3人、女子学生2人が、週末の暮らしぶりについて紹介してくれました。 Zoom のブレイクアウトルーム機能を使い、日本人高校生を5つのルーム分け、それぞれの部屋に1人ずつデンマーク人学生が入り、およそ30分の交流タイムを5回行い、全員が話せる機会を設けました。
7	8月22日	日	研修の中間取りまとめ ・デンマークと日本の畜産物の食味比較 ・研修成果報告会に向けた準備①
8	8月23日	月	デンマークの酪農について ・酪農及び肉牛生産の基本的な紹介 ・伝統的な生産とオーガニック生産の紹介 ・有機酪農家 Christian Bonde さんへのインタビュー
9	8月24日	火	デンマークの農作物生産について ・デンマークの農地がどのような用途に使われているか ・農作物の取り扱い、保管、農場での保存についての基本的な紹介 ・作物の肥料となる家畜排泄物
10	8月25日	水	デンマークの福祉制度について ・社会福祉、医療、高齢者・保育所、教育 ・年間6週間の休暇、産休や育休、農業における休暇など ・職業教育支援や海外渡航支援制度など
11	8月26日	木	本研修全内容のフォローアップ ・全体的な質疑応答
12	8月27日	金	研修の取りまとめ ・研修成果報告会に向けた準備② ・本研修の総括



⑦研修成果報告会 9月22日（水）13時30分 YouTube Live

研修成果を知ってもらうために、YouTubeにて研修成果報告会を配信しました。予め編成したグループごとに動画を作成しておき、ライブ配信ではまずその動画を流しました。そのあと、畜産アンバサダー宣言として、学んだことを参加者一人一人が発表しました。最後に、事業推進委員の鈴木憲治先生に総括して頂きました。

デンマークの畜産を学び、日本の畜産現場が抱える問題点や既存のやり方についての改善点を見出し、若い女性ならではの感性を生かして見聞を広めたことが分かり、さらには、畜産アンバサダー活動の第一歩として自分自身の言葉を発信することができました。

1. ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）
木暮千尋、松浦日依梨、瀧井麻菜、庭ひまわり、埼玉県立杉戸農業高等学校生徒
2. 女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）
高城瑠菜、岩倉綾野、内藤佳澄、前田瑛美佳、黒木樹里
3. 家畜や自然のための畜産（アニマルウェルフェア）
伊澤七星、川島希望、林 真那、石嶺心菜
4. 畜産の担い手（農家を育む政策）
佐藤瑞華、大久保冴華、清水七星、江口歩那、森岡亜希



Dalum 農業学校の学生の皆さん

デンマーク人学生の週末の日常を、ビデオ通話を使って日本の高校生たちに教えてくれました。100馬力を超えるトラクターを運転しながら、あるいは、子牛に哺乳をしながら、素敵な自分の部屋の中から…



CECILIE さん



JEPPE さん



MIKKEL さん



NATACHA さん



NIKOLAJ さん

◆ゲストスピーカー



養豚農家
Ms. Louise Ipsen さん

母豚 400 頭規模の養豚農場のヘッドマネージャー。40歳で子育て真っ最中。「男性と女性で仕事の得手不得手があるのだから、それぞれの得意なことをやったらいい！畜産業は女性に適している！」とのメッセージをいただきました。



有機養豚家
Kirsten Rasmussen さん

母豚 300 頭規模の放牧養豚農場のオーナー。オーガニックによる放牧養豚の取組についてお話していただきました。特に、生産や管理過程をストーリーとして付加価値をつけ販売する、マーケット戦略の話が興味深かったです。



有機酪農家
Christian Bonde さん

103年の歴史を持つ搾乳牛 120 頭、170ha 規模の酪農家。オーガニックによる放牧酪農の取組についてお話していただきました。カーフハッチや放牧場、また家の中なども見せていただきました。

◆動画教材

株式会社 Magic Plus

6月にデンマークを訪問し、VR 動画やインタビュー動画の撮影及び編集されたものを動画教材として制作した他、9月22日の研修成果報告会では YouTube Live 配信にも協力いただきました。

◆畜産物食味試験

中日本フード株式会社

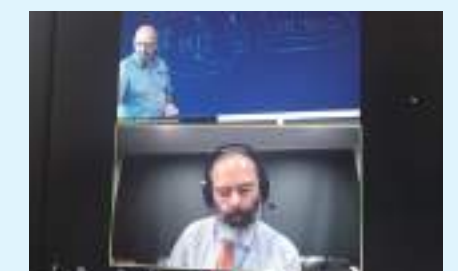
デンマークと日本の畜産物を比較するため、デンマーク産の豚バラ肉をご提供いただきました。また、本研修 5 日目に参加いただき、日本の畜産物流通過程についても説明していただきました。



◆通訳

Mr. Jerry Jewett (JJ さん)

ニュージーランド在住の英語・日本語通訳です。平成 31 年度の本事業現地通訳として同行実績があり、安心できる通訳をしていただきました。



研修でお世話になった方々

◆本研修受入学校（研修コーディネート） Dalum Landbrugsskole

国際事業部講師陣の皆さん



Mr. Carsten Friis Poulsen

国際事業部の部長で、豚の生産管理、リーダーシップのスペシャリストです。本研修の全般的なコーディネート、1、2、4、5 日目を担当していただきました。



Mr. Niels Erik Jespersen

作物、粗飼料及び持続可能な農業のスペシャリストです。本研修の 1、9 日目を担当していただきました。来日経験があり、日本通です。



Ms. Marianne Kyed

豚の生産管理、リーダーシップのスペシャリストです。本研修の 3 日目を担当していただきました。



Mr. Kristoffer Eriksen

牛の専門家です。本研修の 8 日を担当していただきました。



Ms. Maria Frøsig Graff

豚・家禽のスペシャリストです。本研修の 10 日目を担当していただきました。



3 畜産アンバサダー活動の報告

未来の畜産女子育成プロジェクトでは、参加者がこのプロジェクトから得た学びを自分自身の考えにまで昇華し、畜産に対する熱い思いを対外的に示していくことが求められています。畜産の魅力をもっとPRする発表やイベントへの参加等で畜産に対する理解を広める役割を持った彼女たちを「畜産アンバサダー」と称し、そのPR活動を畜産アンバサダー活動として広く推進しています。



デンマークの畜産から学んだことをふまえて、日本の畜産との比較考察を行い、さらに、これからの日本の畜産をより良くしていくためにできることを考えました。そして、畜産の魅力を伝えるために、所属高等学校内での研修報告会、地域のイベント等での発表を通じて、畜産の魅力、担い手の確保、畜産現場における女性の活躍推進をテーマに研修成果の積極的な普及活動を行いました。

校内では、同級生や下級生たちに対して、また学校祭などのイベントでは、新年度入学予定の中学生や、来校した方々に思いを届けました。そのほかにも、保育園や幼稚園、小学校など様々な場所で活動しました。畜産アンバサダー活動では、参集者に対してアンケートをとり、発表を聞いての感想や畜産に対する意識の意識向上を調査しました。

◆畜産アンバサダー実施期間

2021年8月30日～2022年2月28日

◆実施回数

- 学校内（プロジェクト参加者母校での活動、学校の文化祭なども含む） 22回
 - 地域（保育園や小学校、ふれあい動物園など） 4回
 - オンラインコンテンツなどを用いた発信 3回
 - 国際化対応営農研究会 3回
- ※全国を5ブロックに分け各1回実施していますが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により2ブロックは中止となりました。

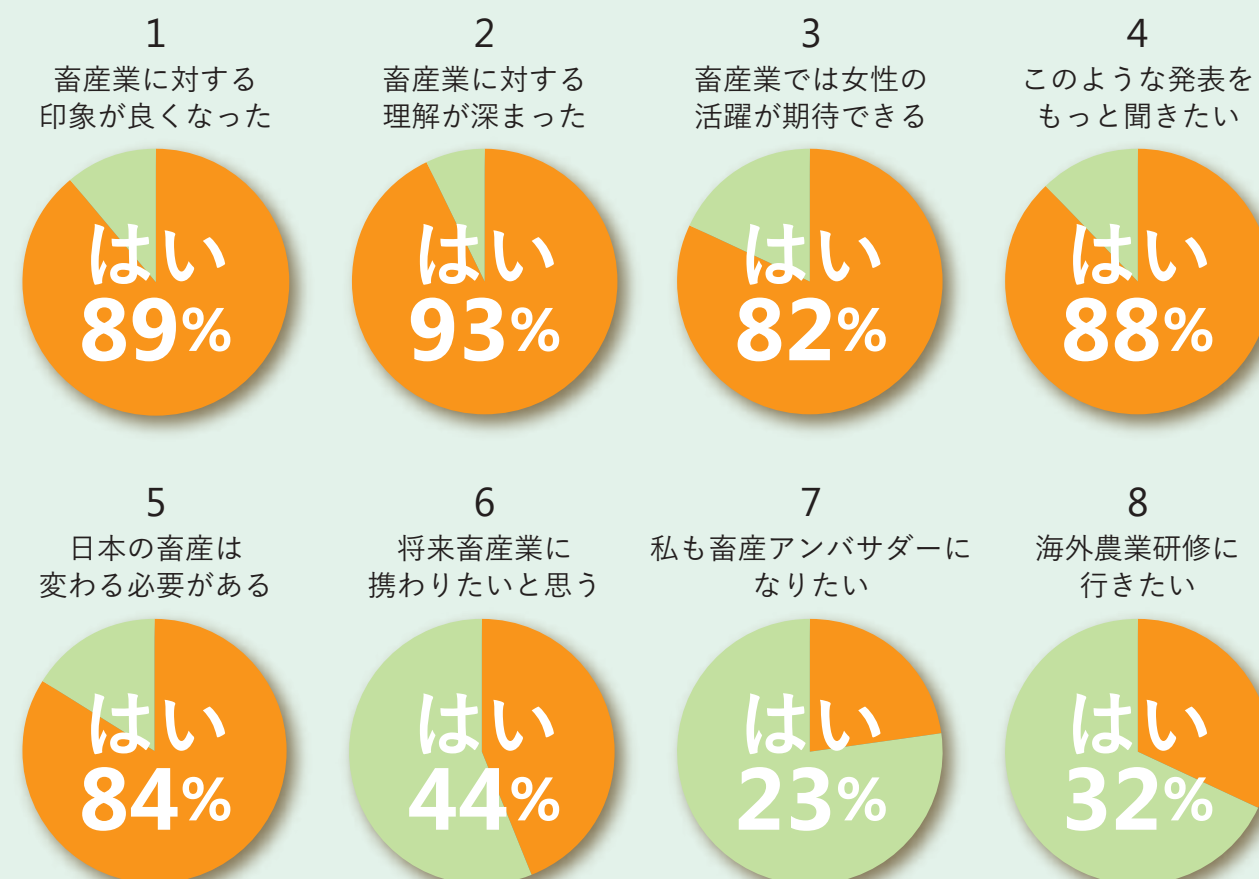
◆アンバサダーの声を届けられた人数（動員数）

総数 2,908人



畜産アンバサダー活動によるアンケート結果

有効回答数：2,448名



畜産アンバサダー活動の事例



学校祭での活動 ①

埼玉県立杉戸農業高等学校の取組

2021年11月15日～19日と5日間にわたり開催された文化祭で活動を行いました。750名を超える方の来校があり、プロジェクトで学んだことを模造紙にまとめ展示しました。所属の学科内だけでなく、他学科や他教科の先生に対しても発表することができ、先生方から質問も受けました。



学校祭での活動 ②

愛媛県立大洲農業高等学校 森岡亜希さん

2021年11月10日～11日と2日間にわたり開催された学校の農業祭で活動を行いました。ブースを設け、活動をまとめた資料を作成し、約100名の来場者にポスターセッションを実施しました。来場者の中には酪農家や地元の方々も多く、勉強になる問いかけやアドバイスをいただきました。



畜産関係者会議内での活動

大阪府立農芸高等学校 前田瑛美佳さん

一般社団法人日本乳業協会の近畿ブロック会議（オンライン）の冒頭で発表しました。質疑応答もあり緊張しましたが、30名の参加者にプログラムで学んだことを発表しました。



地域の児童・幼児向けの活動 ①

宮城県加美農業高等学校 佐藤瑞華さん

同高校が認定をされている酪農教育ファームとして、出前型酪農体験活動「もーもースクール」で、仙台市立幸町南小学生を訪問した際、搾乳体験や子牛のリード体験、牛の飼料に関する説明、バターづくり体験等を行いました。これに加えて、食と命のありがたさや家畜を大事に育てることなど、プロジェクトで学んだアニマルウェルフェアの要素も含めつつ、畜産の面白さを伝える劇を披露しました。



地域の児童・幼児向けの活動 ②

広島県立油木高等学校 庭ひまわりさん

研修で学んだことをパネルにまとめ、地域の小学生に畜産業の魅力や女性がもっと活躍することの必要性についてお話ししました。児童たちは、最初は「動物は触るのが嫌だ」という子もいましたが、発表を聞いて畜産も楽しそうという考えになってくれたようです。家畜は愛玩動物と違うことを知り、ビジネスとしての農業は何かを考える機会になりました。



地域の児童・幼児向けの活動③

新潟県立新発田農業高等学校 内藤佳澄さん
校内の家畜飼育施設に近隣の小学校低学年や
幼稚園・保育園の園児が見学に来た際、案内
役として説明と体験サポートをしました。



国際化対応営農研究会での活動

本会が主催する、全国各地の農業者や農業関係者の国際的な担い手育成をテーマとした勉強会である国際化対応営農研究会で、畜産アンバサダー活動を行いました。今年度は、北から、岩手県、長野県、奈良県、鳥取県、大分県でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、長野大会、大分大会は中止となってしまいました。そのため、岩手大会、奈良大会、鳥取大会の各会場（オンライン）で、「女性が活躍する未来の畜産に向けて」というタイトルで発表しました。

営農研究会の参加者の多くは、農業経営者または農業従事者、農業関係者であり農業を良く知る人が多数いました。岩手大会にはデンマークでの農業研修経験のある現役畜産農家が参加しており、大いに共感して頂きました。



その他普及活動ホームページや特設のページでの情報発信

本会のホームページの中で、活動の様子やオンライン配信した内容についてご紹介しています。



マイナビ農業の特設ページにて平成30年度のプロジェクトを紹介していますが、すでに作成していた記事に加筆をして掲載しました。

https://agri.mynavi.jp/2021_01_20_143962/



高校生向けのフリーマガジン『ch FILES』2022年1月号 関東版に記事を掲載しました。

普及パンフレット 日本の畜産をもっと元気に！

研修成果を広く普及するため、研修のダイジェストとなるパンフレットを作成し、全国の農業高等学校や関連機関及び企業、農畜産業関係者等に配布しました。

畜産の担い手、女性の活躍できる畜産、家畜や自然のための畜産、ビジネスとしての畜産について、それぞれ4コマ漫画と一人ひとりの高校生たちのメッセージでまとめました。





4 参加者への意識調査

畜産業に関する意識調査

参加した高校生 19 名の畜産業に対する意識や考えが、本プロジェクトを通じてどのように変化したかを、アンケートを通じて調査しました。アンケートは以下の通り全部で 3 回実施しました。

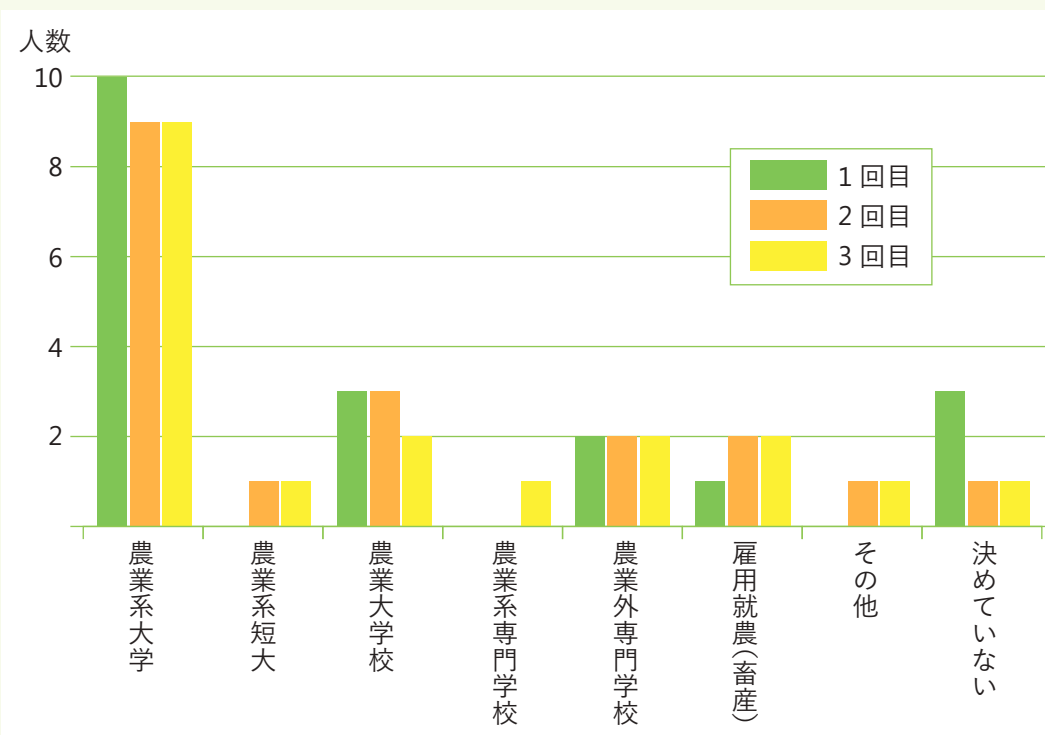
- 1 回目：プロジェクト参加者として選抜された際（6 月上旬）
- 2 回目：本研修を終えた際（8 月下旬）
- 3 回目：本研修の経験を基に行った畜産アンバサダー活動後（3 月上旬）

設問は、当てはまる、やや当てはまる、やや当てはまらない、当てはまらない、わからない、の 5 つです。

1. 研修は自分の進路と向き合う機会となった

高校卒業後の進路に関する統計結果では、農業系大学への進学を考えている人が多数を占めています。具体的には、農学部、生物資源科学部など畜産系の学科がある、酪農学園大学、帯広畜産大学、宮崎大学、鹿児島大学などや、獣医師を目指す学科などです。3 回のアンケートを通じてもその割合に大きな変化はありませんでしたが、アン

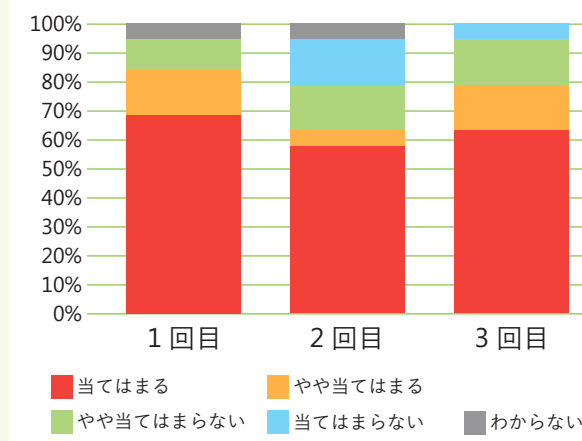
ケート詳細の聞き取りによると、将来畜産業界で活躍するためにさらに知識を身に着けたいという考えや、インタビューを行ったデンマークの畜産農家や、同年代の学生たちが農家になることを強く意識した進路選択をしているのを知ったことは、内面的な変化をもたらし、自分の進路と向き合う良い機会になったと言えます。



2. 現場もいいが、支える仕事も興味深い

【将来は畜産（生産）に携わりたい】という設問では、最初から最後まで【当てはまる】と【やや当てはまる】と回答した人が大多数でした。興味深い点としては、本研修後に一時的に就農意欲が下がっていることです。デンマークと日本の畜産業にあるギャップを目の当たりにしたことが、一つの要因と考えられます。しかし、進路決定後の意識調査では、再び畜産に携わりたいという人が増えました。これは、進路を考える中で、もう一度自分のやりたいことと向き合い、大学や農業大学校で知識や経験を積み、何年か先に就農したいという考えを持ったことを示唆しています。聞き取りでは、進学して家畜人工授精師・受精卵移植師などの資格を取り畜産現場で活躍したいとか、畜産業を支える職業に就きたいなどという考えがありました。

2. 将来は畜産（生産）に携わりたい

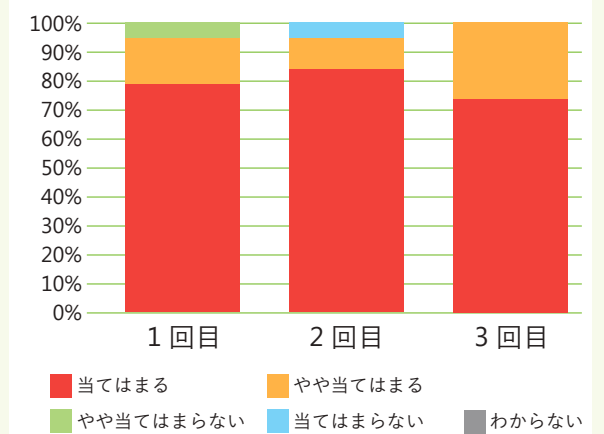


3. “畜産業はカッコいい仕事です。あなたが信じた道を進んでください”

普段から畜産に携わっている高校生なので、【畜産業はカッコいい仕事である】という設問には、【当てはまる】と【やや当てはまる】の回答が 9 割以上を占めました。プロジェ

クトを通じて度々話題にあがったのは、畜産業のネガティブな 3K（キツイ、臭い、きけん）を、ポジティブなイメージに変えていきたいということでした。デンマーク畜産農家の皆さんへのインタビューでは、畜産業は魅力的な仕事であると自信に満ちた言葉があふれていました。特に、女性養豚農家の Louise Ipsen さんからは、「畜産業はカッコいい仕事です。あなたが信じた道を進んでください」という力強いメッセージが贈られました。

3. 畜産業はカッコいい仕事である

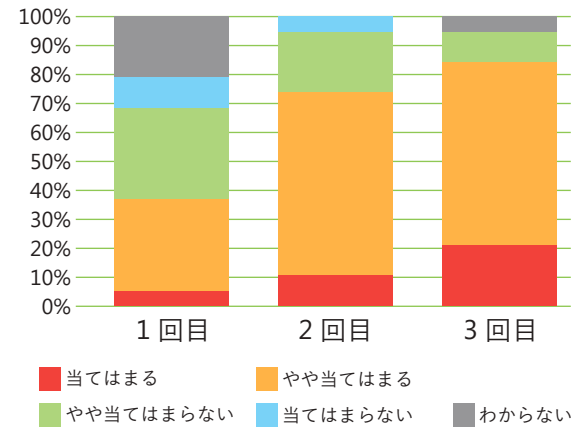


4. 畜産業も工夫次第でマネタライズが可能

【畜産業はもうかる仕事である】という設問では、当初ネガティブな回答が半数以上を占めていました。しかし、本研修でその割合は逆転し、3 回目のアンケートでも【当てはまる】・【やや当てはまる】が 8 割以上となりました。デンマークの農家所得が大きいこと、初任給の高さにも驚かされ、就労意欲の向上につながることが分かり、日本との大きな違いを知ることとなりました。放牧養豚農家の Kirsten Rasmussen さんからは、実施している有機農業の取組において有機畜産とアニマルウェルフェアは、付加価値がつくためもうかりやすい、そして消費者が農産物に思いを馳せるストーリーを

添えて販売することが大切というお話を聞き、畜産業でも工夫によりしっかりとマネタイズできるという考察が生まれました。

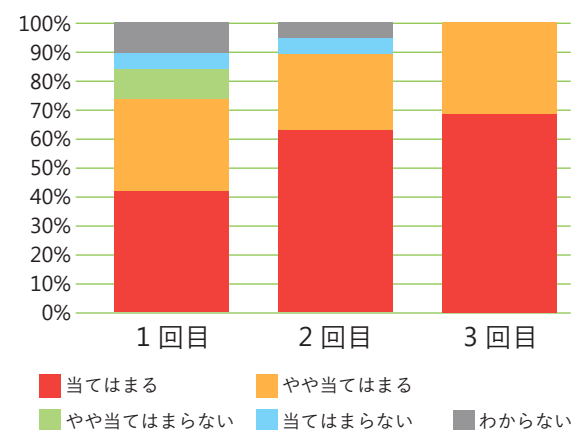
4. 畜産業はもうかる仕事である



5. 畜産業は努力が報われるという強い確信

【畜産業は、努力が報われる仕事である】の設問では、アンケートを重ねるごとに【当てはまる】、【やや当てはまる】の占める割合が上昇しました。動物に愛情を注げば、それに必ず応えてくれるという話を聞いたり、アンバサダー活動では、学んだことを自分の言葉で語るうちに高い向上心が芽生えていったものと推察されます。牛や豚の小さな変化に気を付けて面倒を見るのは大変なことです。最後まで取り組めば絶対に報われるという強い思いを持った人もいました。

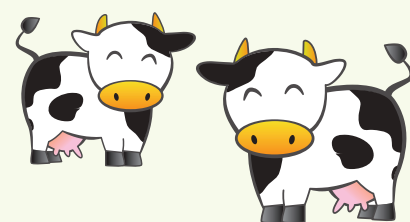
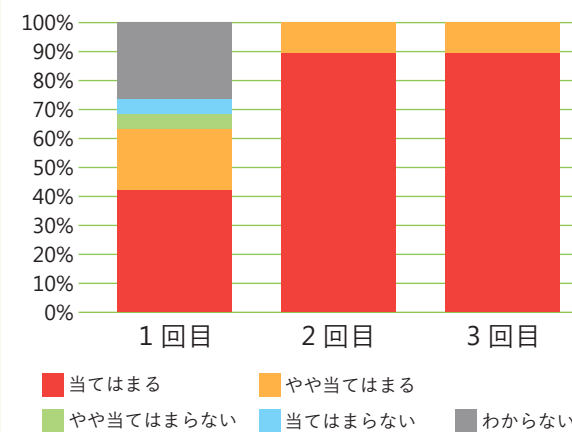
5. 畜産業は努力が報われる仕事である



6. 有機畜産とは何かを知ることができた

2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標SDGsが注目される中、環境問題や持続可能な農業は、畜産を学ぶ高校生たちにとって関心の高いテーマです。【有機農産物は推奨された方が良い】という設問では、最初の意識調査で【分からない】を選ぶ人が多くいました。日本では畜産で有機農業を行うことは珍しいことから、身近ではないテーマだったと言えます。しかし、本研修後は、【当てはまる】、【やや当てはまる】が急増しました。デンマークはアニマルウェルフェアの水準が高く、また有機畜産も注目されています。実際、有機畜産農家から話を聞いたことで刺激を受けたことが良く分かります。

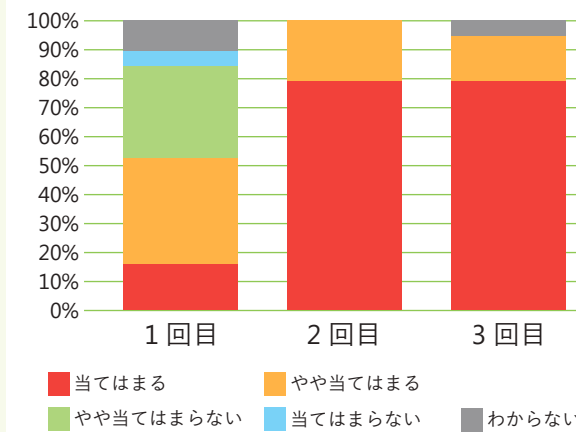
6. 有機農産物は推奨された方が良い



7. 畜産業への女性の適性は高い

【畜産業（生産）は女性に適している】という設問も、大きな変化があった一つです。1回目の意識調査では、【当てはまる】と【やや当てはまる】を合わせて半数程度だったものが、本研修後は100%に増加しました。本研修の授業では女性畜産農家が自信を持って取り組んでいることを知り、また、女性ならではの本能（母性）が家畜の飼育に適しているという考えに強く共感したようです。一方で、性別で仕事の役割を変えるのではなく、持っているスキルを活かすことが大切だという言葉にも大きな賛同の声が上がりました。

7. 畜産業（生産）は女性に適している

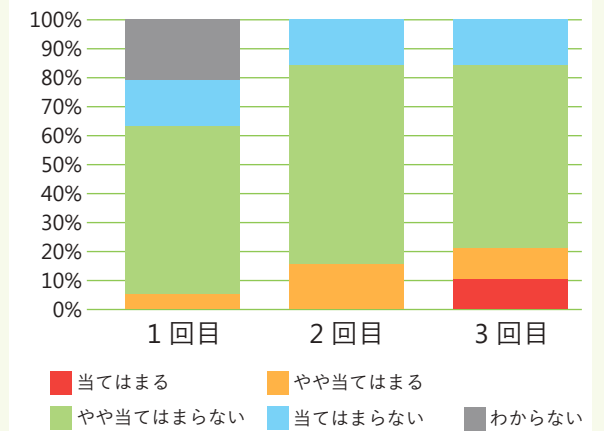


8. やはり女性にチャンスを与えてほしい

先の設問に並び、【日本の畜産業は女性の活躍できる環境が整っている】という設問では、「やや当てはまらない」の割合が多い結果となりました。これは、近年ニュースなどで事あるごとに、日本の女性参画の世界からの遅れが指摘されているのを耳にしていたこともあったのではないのでしょうか。一方、はじめは【わからない】と答えた人もいましたが、事前研修、本研修とデ

ンマークの社会保障制度や福祉制度を学んでいくなかで、デンマークの産休や育児休暇の手厚さ、特に出産や育児期間の働けない期間においても一定の収入が補償されるような仕組みを日本と比較してしまうと、女性が活躍できる環境は整っていないと気付かされた様子でした。

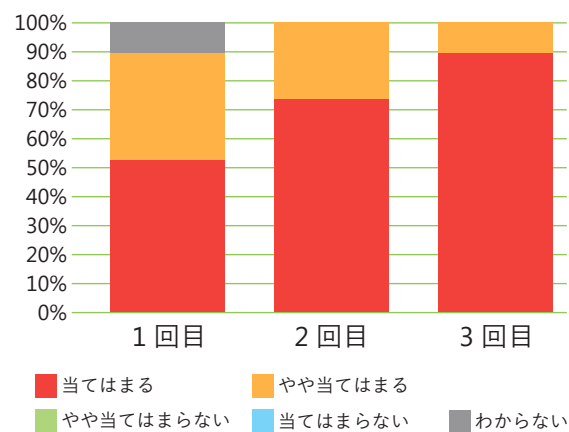
8. 日本の畜産業は女性が活躍できる環境が整っている



9. 畜産業はもはや男女関係なく行える時代

【もっと多くの女性が畜産業に従事した方が良い】という設問では、3回のアンケートを通じて、徐々に【当てはまる】の割合が増えていく結果となりました。事前研修、本研修どちらの学びに加えて、最後のアンケートでは9割に達しました。畜産業の魅力を知り、また、それを自らの言葉で語ったことから、畜産業こそ自分にふさわしい職業だという矜持の萌芽があったのではないかと推察されます。そして、近年は重労働の機械化が進み、女性でも運転しやすい農業機械や、スマート機器の普及が広まっていることもあり、ますますジェンダーギャップがない職業ということが紹介されたことも、全体の印象を押し上げました。

9. もっと多くの女性が畜産業に従事の方が良い

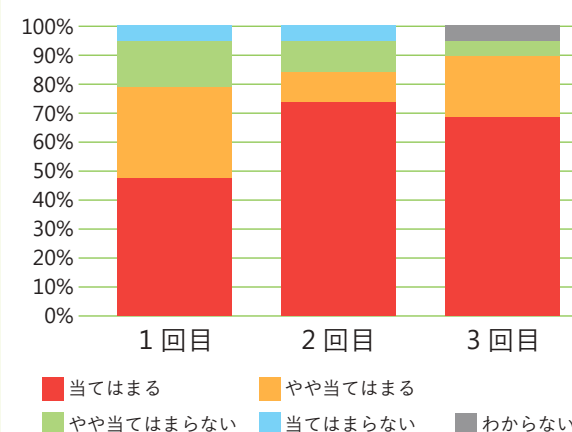


10. 外国に対する興味は広がった

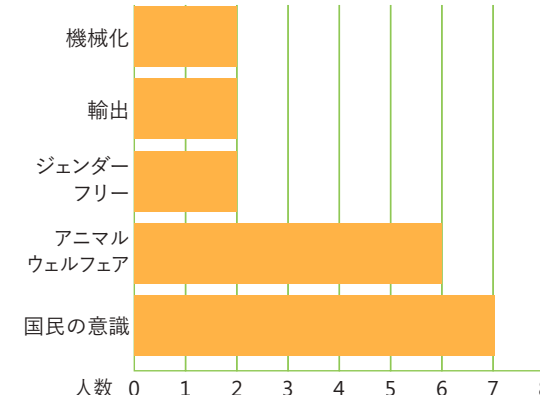
プロジェクトを通じた3回の回答を見ると「当てはまる」が増加していき、最終的には「やや当てはまる」と合わせて9割に達します。本研修では、通訳は入りましたが、英語で授業を受け、また、英語で質問をしま

した。デンマークの学生たちと英語で言葉を交わす機会もあり、自信につながりました。こうした経験や、外国人とコミュニケーションを取った経験が、外国人材をポジティブに考える下地になったと推察されます。コロナ禍で海外に行くことが難しい状況ですが、いつかこのプロジェクトがきっかけとなり、19名の中から海外に挑戦する人がいましたら幸いです。

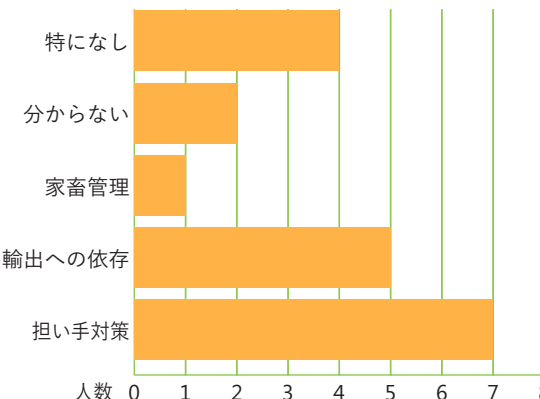
10. 外国人と一緒に仕事をしてみたい



11. デンマーク畜産業の"強み"は何だと思いますか？



デンマークの畜産業の"弱み"は何だと思いますか？

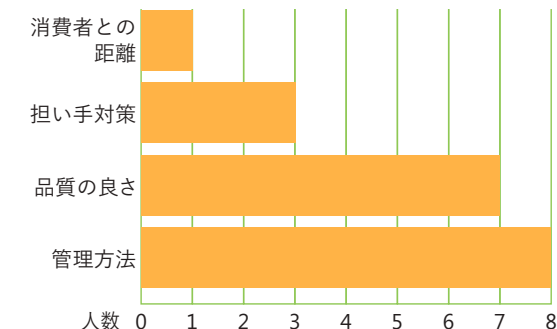


12. 日本の畜産業の強みは、管理方法と品質の良さ

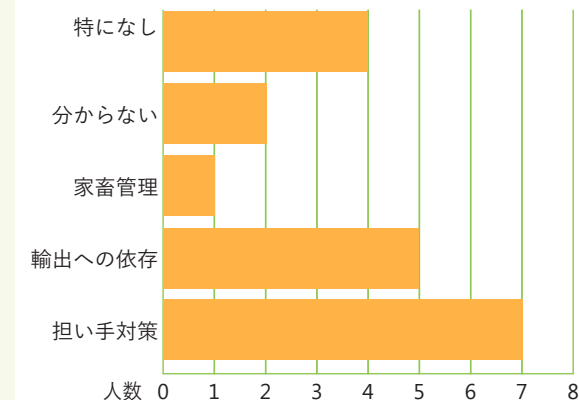
強みについては、個体管理が行き届いているなどの理由により、「管理方法」が一番多くなりました。管理方法は、「品質の良さ」にも関連します。管理が良いから、品質の良さにつながるわけで、畜産業を学ぶ高校生たちはしっかりとそのことを理解していました。その他には、日本人の真面目で几帳面な性格をあげ、そのことが管理方法の良さに繋がっていると考察した人もいました。担い手対策の良さをあげた人もいました。デンマークは家族経営が多く、農家を一から始める人の割合などは低いとされていますが、日本では、非農家出身の方が

農業をやりたいと農業系の学校に進み、農業に携わる人が多いのではないかと考えたためです。日本に限らずどの国でも、担い手対策は喫緊の課題であり、若者の農業の担い手が乏しい今、デンマークのみならず各国の対応に注目が集まります。一方、弱みについては「土地の集約の難しさ」があがりました。日本は、国土の70%以上が森林であり、デンマークと比較すると開けた土地が少ない上、人口が多く生産量を重視する農業形態であるためです。また国民の意識を問題視する意見もあり、なぜ安価な豚肉がスーパーに並ぶのか、デンマークと比較し、アニマルウェルフェアという言葉自体があまり浸透していないと感じている人がいました。

12. 日本の畜産業の"強み"は何だと思いますか？



日本の畜産業の"弱み"は何だと思いますか？



日本とデンマークの畜産業の「強み」と「弱み」について記述式で回答をしてもらい、プロジェクトを通じた最終結果の出る畜産アンバサダー活動後の3回目のアンケートについて参加者たちが考察を行いました。色々な言葉で表現されていましたが、その中の特徴としてよく表れていることを分類し横棒グラフにしました。

11. 輸出が強いことは、デンマーク畜産業の強みでもあるが弱みにもなる

強みは「国民の意識」という回答が一番多くなりました。二番目に多かった「アニマルウェルフェア」とも関連しますが、国民やメディアの畜産や農業に関する意識の高さが強みと考えた人が多くいました。また、法律がしっかりと定められていることで、アニマルウェルフェアが当たり前の生産現場があり、世界中で認められ、それが足腰の強い輸出産業につながります。また、ジェンダーフリーと回答した人もいて、女性だ

から、男性だからと性別を気にせずに、それぞれ個人の能力を活かして作業をしていること、希望により仕事・役割が決まっていくことをあげていました。弱みとしては、強みにもあげられていた輸出があがりました。日本もデンマークから豚肉をたくさん輸入していますが、もし海外からの買い手がいなくなってしまうと、販路がなくなってしまうかもしれません。また、担い手対策についてもキャリアパスが示されているものの、しっかりとした政策があるわけではないので弱みとあげた人が多くいました。



5 参加者の報告



畜産アンバサダー

宮城県加美農業高等学校
農業科2年
佐藤 瑞華

1. テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2. キーワード

国の制度

3. キーワードのつながりと考察

「畜産の担い手」というテーマで、「国の制度」について考えました。

私自身も畜産を目指しているため、将来の担い手です。農業をするのにはかなりの資金が必要であることを、実際に父が畜産を営む姿を見て感じていました。実際に新規で一から農業を始める場合は、土地や機械だけでも膨大な費用がかかります。それを手助けするような制度が日本にはあると考えていました。

一方デンマークでも、新規就農者に対しての制度が充実していると考えていました。初めてこのような制度について触れようとする私は、デンマークの国土や農地の広さ等を詳しく知らなかったこともあり、海外農業のイメージから土地が広く大型機械で行う農業に対しての資金を得られるような制度が、日本よりも充実しているのではないかと考えていました。

デンマークには、日本のような農業を始める人に向けた国からの支援金制度はありませんでした。

しかし、農場からの補助金制度があります。農業教育を受けた後、スキルが身についた農家になるためには、3年8か月がかかるとされ、その期間インターンシップを行います。その際に農場から19万6,707円（日本円換算）を賃金として受け取ることができます。さらに最後に31万3,531円（日本円換算）の補助が農場から出ます。これはただインターンシップで働きながら学ぶより

就労意欲も高まり、より良く仕事に関わろうという考えが生まれ、経営者としての基本を学ぶことができると感じました。

さらにデンマークは、経営者を育てるための支援金制度という考えが強く、日本は農業を始めるうえでの準備金という点に力を入れているのではと認識しました。

デンマークでは年に数回農場を公開して、大人から子供まで農業の現場を知ってもらえるような取り組みをしています。日本ではこのような取り組みはまだ少なく、農業について知ってもらう機会が少ないため、農業のマイナスなイメージが伝わりがちだと思います。自分の経営を充実させるために、我が家の管理を優先することもちろん大事だと思います。

しかし、地域や日本など視野を広げ農業の良さを伝えることが多くの人の利益につながり、やがては自分の経営に帰ってくるのではないかと考えます。このような懐の深い考えの基、畜産をすることが重要であるという考えに転換していく必要があると考えます。



4. デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークでは、アニマルウェルフェアを重視していることが分かりました。

日本は、アニマルウェルフェアがあまり知られていません。飼育面積が狭いことや、屠殺の時など動物がストレスを感じているところがあると思います。生産効率を高めることも大切ですが、動物がストレスを感じない環境を作ることも大切です。このようなことを日本でも広めていくべきだと思いました。動物たちのストレスも少なくなれば、もっと畜産の経営がうまくいくと思います。

その他にも、デンマークでは生まれてから死ぬまで医療費や教育費が無料でした。

これは素晴らしいと思いました。さらには、産休の制度も整っていました。日本は、産休がある会社もあれば、産休があっても会社が100%収入を出してくれないところがあります。ただし、デンマークでは収入所得

の50%を税金として払っていますが、それはデンマーク自体の幸福に対する考えは、皆が健康で学業にも望める環境があるからだと思います。もし、私が畜産経営者として働くようになったら、女性でも働きやすい環境をつくっていきたいと思いました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

畜産業は女性でもできるということを広めていきたいと思っています。

日本は、女性には畜産業が難しいというイメージが持たれています。さらに、長男が継ぐべきという考え方が根強く残っています。そのようなことから、日本では男性の方が畜産をしている場合が多いと思います。

そこで、自分が畜産をしている姿をたくさんの人に見てもらいたいと思います。市場で牛を引っ張っている姿や、共進会などのイベントで活躍することで、女性でもできるというイメージを広げていきたいと考えています。そうすることで、これからの畜産の担い手自体も増えると思います。その他にも女性が心配することは、畜産は重労働のため働けないということです。しかし、昔に比べ機械化が進んできています。女性でも資格を取れば、機械を使って畜産業に就くことができます。農場でトラクターの体験会をすることで、もっと女性が畜産で活躍できるイメージを持ってもらうことも考えています。

私が思う理想の畜産業は、これまで男性の仕事として見られがちなイメージを払拭するだけでなく、女性の特徴を活かせる畜産です。女性は母性本能があり、分娩時から男性よりも子牛や子豚などに気遣って飼育管理や細かい部分の清掃管理まで行うことができます。家畜の小さな変化にもよく気がつき、すぐに対応することもできると思います。このように女性の優れているところを活かし、生き生きと仕事ができる畜産が理想です。そして畜産に多くの女性が就くようになれば、社会の他の部分でも男女差がなくなるのではないかと考えています。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、人工授精師や受精卵移植



師になることです。

そのために、大学に行き資格を取りたいと考えています。人工授精師や受精卵移植師は、大切な命を増やす仕事なので、しっかり技術を身につけて、畜産農家の方々に信頼される人工授精師や受精卵移植師になりたいです。

また、自宅では和牛繁殖農家を営んでおり、それを継ごうと考えています。大学では飼養学や繁殖学などを特に学びたいと考えており、卒業後は先進地での実践的な研修を行い、技術を身につけたいと考えています。人工授精師としてだけでなく、和牛繁殖農家としても女性としての活躍を知らしめ、畜産に対するイメージを良くし、女性の担い手を増やして行きたいと思っています。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

農業は大変だというイメージがありますが、農業は自分が行った分の成果が出る仕事だと私は考えています。一生懸命取り組んだことが、家畜の成長や健康、生産物の良さ、そして収益につながると考えます。

さらに、家畜たちは経済動物でありながらも私たちの心を癒やしてくれます。収益を上げることも畜産をやる目的かもしれませんが、私たちが関わっていくことで、ライフワークとしての素晴らしい畜産を広げていきましょう！





畜産アンバサダー

宮城県農業高等学校
農業科2年
高城瑠菜

1. テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2. キーワード

女性のマインド

3. キーワードのつながりと考察

「女性の活躍できる畜産」というテーマで、「女性のマインド」について考えたとき、初めは女性自身が意思を強く持つことが大切でデンマークにはそうした女性が多いから、農業での女性の経営者などが多いのではないかと考えていました。

実際に研修していると、やはりやりたいことが明確で意思をしっかりと持っている女性が多かったです。

しかし、それだけがデンマークで女性が活躍している理由ではないと感じました。周りの男性に限らず社会全体で「性別ではなくその人の能力が大切」という考え方が、浸透している結果だと思いました。

日本全体で今の考え方を变えるのは、難しいと思います。

ですが、畜産業に入ってくる若い人たちなら考え方を变えるハードルが下がると思います。個人の能力が大切な畜産だからこそ、それぞれのマインドを柔軟にしていきたいと思います。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

研修を通じて、それぞれの国の農業の違いを近くで知ることができて楽しかったです。その土地や気候によって変わるということを知っていても、実感することが少なかったため、山がないデンマークと山しかない日本の農業の違いを、VR 動画や Dalum 学校の先生のお話でいろいろ見たり聞いたりすることができて良かったです。また、この研修で放牧養豚という言葉を知り、デンマークの養豚について深く学ぶことができました。

オーガニックに関心が高いデンマークの国

民性と、平で広大な土地を有効活用できていて感心しました。



私は、農業高校に通い始めて1年半ほど過ぎましたが、「アニマルウェルフェアをよく考えて実行する機会がほとんどなかったな」とこれまでを振り返ると思いました。家畜に対して過ごしやすいうに工夫するときもありましたが、アニマルウェルフェアのような目的をしっかりとって行動することはありませんでした。高校でもそのような考え方があるなど、いろいろな考え方を伝えると、将来の畜産の可能性が広がるのではないかと感じました。デンマークでのアニマルウェルフェアが当たり前の農業はもちろん大変だとは思いますが、とてもいいことだと思いました。

この研修では、言語も、主な考え方も違う方たちとたくさん意見を交わすことができ、とても貴重な体験になりました。今回感じたことを大切に日々の農業学習に全力で取り組んでいきたいです。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、まず、畜産という職業が将来の仕事の選択肢に入ることを増やせるような活動をしていきたいです。

なぜなら、畜産という仕事を知っていても選択肢に入らなければ、畜産の問題は解決しないし、畜産業を盛り上げようとする活動が積極的に行われている今でないと、今後さらに難しくなると思うからです。そのために、小学生や中学生に畜産の仕事の内容、またしっかり大変なことも伝え、それでもやってみたいと思える魅力を伝えていきたいです。ほかにも幼稚園児や保育園児に家畜と触れ合う機会を作る、簡単に畜産を知ってもらうのも効果的なのではないか

小学生の「将来なりたい職業」ランキングトップ10

2020年度

第14回 男子児童		
順位(前回)	職業	票数
1 (1)	サッカー選手・監督など	78
2 (2)	野球選手・監督など	71
3 (3)	医師	65
4 (3)	会社員・事務員	52
5 (5)	ゲーム制作関連	51
6 (11)	ユーチューバー	39
7 (18)	教師	27
7 (9)	料理人・シェフなど	27
9 (7)	建築士	25
9 (20)	獣医	25

第14回小学生「夢をかなえる」作文コンクール
応募作品数:2,303点(男子児童:1,069点/女子児童1,234点)

第14回 女子児童		
順位(前回)	職業	票数
1 (7)	薬剤師	70
2 (1)	看護師	68
3 (3)	保育士	66
4 (4)	医師	55
4 (2)	獣医	55
6 (6)	パティシエール	46
7 (8)	教師	45
8 (11)	イラストレーター	37
9 (5)	美容師	32
10 (10)	ファッションデザイナー	29

出典：日本 FP 協会

なと思いました。そして、子供たち以外の畜産に興味のある20代、30代、40代の大人の方々が畜産に参加しやすくなるようハードルを下げられること。例えば、畜産は世間が言っているほど難しいものでもない、面白いものだということを伝えていきたいと思っています。これらをすることで、畜産が職業の選択肢の中に当たり前に入るようになり、いろいろな世代の人が畜産に関わることで増えていく、そして最終的に畜産人口が増えることにつながればいいなと考えています。

女性が活躍する畜産業の理想として、私は、女性がたくさんコミュニケーションを取り、作業機械を使いこなして生き生きと働いているのを思い描いています。また、一つの農場に女性がたくさん、男性がたくさんいるのではなく、いろいろな国の人が、違う年齢の人が同じ環境でいい関係を保ちながら働くことが理想だと思います。その中で、それぞれが得意なことを率先的にやったり、やりたいことにチャレンジしたりできるような環境を作る。大変な仕事だからこそ人と人との距離が近く、温かい環境をそれぞれの農家が作れる畜産業になればいいなと思います。コロナ禍で伝えられる人が限られてしまうかもしれませんが、試行錯誤してより多くの人に伝えられるよう努めていきたいです。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は大きく言うと、世界のいろいろなことを知って自分の力を強くしていきたいです。

それを叶えるための一つとして、JICA 海外

協力隊に参加したいと思っています。発展途上国などの人と関わることで、視野を広げ、自分で考えて行動する力をつけることができると思うからです。また、その力で性別や国籍に関係なく、いろいろな人同士と一緒に働ける酪農経営をしていきたいです。畜産や言語を学べる大学に進学するつもりなので、少しでも土台となる部分を蓄えられるような学校生活を送ってきたいです。何かをやるうえで、人との繋がりはとても大切だと思っているので、人と強く繋がりを持てるようにしっかりと自分の芯を見つけていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

高校生ながら畜産というものに興味を持ち勉強をしている私たちは、多くの問題を抱えている畜産界のアベンジャーズだと思います。高校生活で爆発するほどの力を溜めて、これからの畜産を盛り上げていきましょう。また、畜産に興味がある後輩たちは畜産がどれくらい生活を支えていて、その仕事かどのくらいやりがいがあるものなのか考えてみてほしいです。

畜産ほど表と裏のギャップがあるものはない、とても魅力的な仕事です。一緒に畜産を楽しみましょう。





畜産アンバサダー

栃木県立那須拓陽高等学校
農業経営科 3年
大久保 冴華

1. テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2. キーワード

国境を超えて

3. キーワードのつながりと考察

「畜産の担い手」について考えた時、農業や畜産へのイメージがよくないことがきっかけで年々減ってきているのではないかと考えました。

養豚が盛んなデンマークでは担い手についてどんな対策をしているのかが気になりました。研修を通してデンマークとの違いを見つけ、その違いの中で日本の畜産の担い手不足の改善につながることはないのかを考えながら研修に参加しました。

デンマークでは海外労働者や移民を積極的に受け入れており、東ヨーロッパからの海外労働者が多く、農業をする人が増えていると言っていました。さらにデンマークは、農業高校のあり方が日本と全然違いました。学校に通う学生はみんな農業が好きと答えていて、明確な目標もみんな持っていました。こういったことから、デンマークでは畜産業をやることへの抵抗があまりないことが分かりました。



研修で実際に畜産業に携わっている方や、牧場のマネジメントをしている方にお話を聞

きました。デンマークでは、「女性が農業をやると賢くなる、男性は強くなる」という言い伝えがあります。その言い伝えを日本でも広め、デンマークで行っている体験型のイベントを行い、子供たちに農業や畜産について興味を持ってもらうことができます。また普段食べている食べ物がどのようにしてできるのかが分かり、命の大切さをより理解することができます。そして中学生には農業への道もあることを知ってほしいです。



4. デンマークの研修を通じて考えたこと

私がこのデンマーク研修を通じて感じたことは、日本の畜産業とデンマークの畜産業のイメージの違いです。日本では、きつい、汚い、危険、儲からない、畜産ってどんな仕事なんだろう？など、マイナスイメージの方が多いです。

一方、デンマークでは性別関係なく畜産業を行なっていて、畜産へのイメージはとても明るく活気にあふれていました。経済動物を家族のように思っており、慈しみの心を持って接し、快適に過ごさせてあげようと思っています。特にデンマークはアニマルウェルフェアを重視しているため経済動物に対する扱いがとても優しいです。またデンマークの畜産業は女性の活躍している姿が印象に残りました。女性にしかできない仕事を積極的に行っており、例えば、出産後の母牛や母豚の体調管理や出産時の対応など積極的に行っていました。また育休や産休がしっかりしているため家族でやっていたり、パートで働いている人にはとてもいい制度なのではないではないでしょう

か。女性の柔軟で新しい発想や、活躍できる場がしっかりあるからこそ、デンマークの畜産はどんどん発展しているのだと感じました。

日本も女性が活躍できてこそ、畜産業がよい方向へ発展していくと思います。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私が一番伝えたいことは、畜産業の魅力です。

子供達は、普段食べている食べ物はどのように作られ、どのように生産されているか知る必要があります。そのためデンマークで取り組んでいるオープンファームを利用し、多くの子供たちに参加してもらいたいです。何かきっかけを作ることによって畜産の担い手につながると思います。実際に私も、中学2年生までよく理解していませんでした。私の家は非農家で、野菜をつくることから、もちろん牛乳の生産の仕方も分かりませんでした。幼馴染の家が和牛農家で手伝いに行ったことがきっかけで、牛のことが好きになりもっと勉強したいと思うようになり農業を学べる学校に入学しました。高校では牛部という部活に入部し、酪農について学びました。搾乳の仕方も最初は分からず大変でしたが、慣れていくうちにとても楽しいと感じるようになりました。

私たちの食卓に畜産物が並ぶことは、決して当たり前ではありません。生産者がいるからこそ、私たちは畜産物を口にすることができます。生産者や家畜達のためにも「いただきます」「ごちそうさまでした」を、気持ちを込めて、ご飯を食べる前にならず言いましょう。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来、家畜人工授精師になり、農家さんに信頼される立派な人工授精師になりたいです。

この研修を通してもっと勉強したいと思うようになり、大学を卒業したら畜産業にもっともっと関わりたいと思うようになりました。そして技術者として活躍していく中で、酪農を仕事にしていきたい高校生などにアドバイスなどもできる人になりたいです。そして、ゆくゆくは私が育った栃木県の酪農に貢献し、「私が酪農を引っ張っていくんだ」という強い気持ちをもってこれからもずっと牛たちと一緒に暮らしていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

これからは、もっと女性が活躍する時代になっていくと思うので、自分のやりたいことに誇りをもって一生懸命あきらめなければきっと報われます。

なので、自分が思うまま突き進んでいって、一緒に畜産業を盛り上げていきましょう。





畜産アンバサダー
栃木県立鹿沼南高等学校
食料生産科 2年
伊澤 七星

1. テーマ

家畜や自然のための畜産
(アニマルウェルフェア)

2. キーワード

自由

3. キーワードのつながりと考察

動物の「自由」や「ストレス」について考えたとき、日本ではアニマルウェルフェアが浸透してないと感じた。

その理由は、一番身近である学校の牛舎を思い浮かべた。とても狭いスペースで何頭も飼われている牛たちを見ると、自由度は低いと思う。徐ふんも毎日できるわけではない。日本は四季があり夏はとても暑いし、冬は氷点下になることもあるので、外的ストレスも感じると思う。そして一番のストレスは、去勢や徐角といったものだと思う。動物は言葉を発せないのも、嫌なことをされたり痛かったりしても人間が感じ取らなくてはならないので見落とすことがあるだろう。それでは困ると思う。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

Dalum 学校の先生や農家の話を聞いて一番感じたことは、家畜を何よりも1番に考える「家畜ファースト」ということだ。デンマーク特有の山のない広い平地を利用し、家畜たちが畜舎と放牧場を自由に出入りできるようになっていた。さらに、畜舎



が適温でないとアラームが鳴ることや、好奇心旺盛な豚のために木、藁、縄などの噛んで遊べるものが置いてあるなど、とにかく家畜にストレスを感じさせないような飼養管理をしていた。また、アニマルウェルフェアの観点から断尾をしない農家が多いことが分かった。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

この研修から日本でも取り入れられることや、できることを考えてみた。

まず、アニマルウェルフェアの観点から、デンマーク特有の「放牧」というものは広い土地が必要なため、山地が多い日本では難しいが、畜舎の仕切りを減らすことや、家畜たちが少しでも走り回れるような運動場を作ることによってストレス軽減につながると思う。また、家畜との触れあい体験や農作物収穫体験などができるイベントの開催、広報誌や新聞、ポスター、SNSでの農業に関する情報の発信をすることで、非農家の人たちにも農業に対する興味関心を持ってもらい、将来の担い手を増やしていくことができるのではないかと考えた。

この研修を通して学んだことがいくつもある。

まず1つ目は、デンマークでは「男性だから」「女性だから」という考え方ではないということだ。性別関係なく1人の人間として考えてスキルや技術をみて雇用しているそう。また、社会保障もしっかりしていて産休・育休の制度が充実していた。現代社会において、女性は家事・育児、男性は仕事という考えではなく、男性女性関係なく家事育児をするようになってきている。デンマークでは、女性だけが産休や育休をとるのではなく、男性も同じように育休をとる割合が多いが、社会保障がしっかりしているためお金の面で困ることはないことが分かった。さらに、学費や国民全員の医療費が無料であること。そして待機児童がゼロであること。それは国民1人1人、抜け漏れなくさまざまな保障が行き届いているからであると考えられる。これらが国民の幸福度が高い国といわれている理由だと思う。

2つ目は、日本とデンマークでは同じ「農家」という職業でもモチベーションや考え方に差があるということだ。デンマークの農家は何がなんでも家畜を1番に考えていると感じた。また、制限の多い有機農業に対して「ゲームやスポーツにルールがあるよ

うに有機農業も決められたルールを守るだけ」と言っていたのが一番心象に残った。



担い手不足で苦しんでいる日本を支えていくために、畜産アンバサダーとしてできることは、たくさんの人に農業の魅力を伝えていくことだと思う。非農家の友人に農業・農作業にどんなイメージがあるか尋ねてみたところ、「朝早くからの作業が大変そう」「言葉が話せない家畜(動物)、またそれらをたくさん飼養管理するのは絶対大変だし自分にはできない」「家畜たちのふん尿を処理するのは少し抵抗がある」「大変そう」という言葉が多く聞かれた。これらのイメージは農家人口や後継者不足、農業に携わる女性が少ない原因の一つの要因だと考える。私も非農家で、今の高校に入学するまでは、友人と同じように「農業・畜産＝大変」だと思っていた。しかし、学校の授業で農作業や牛の飼養管理を通して考えが変わった。まず、機械化が進んでいるということだ。力がある作業でも機械に頼ることで、力に自信がない女子生徒でも作業効率が上がり、作業がはかどっているように見えた。そして、牛たちは名前を呼ぶとこっちに寄ってきてくれるし、体を洗ったりブラッシングをしてあげたりするととても気持ちよさそうにしてくれる。牛の徐ふんもかわいい牛たちのためなら!と、積極的に作業している生徒の姿が見えた。また自分たちで大切に栽培した野菜や作物を収穫し、家族と一緒に食べたり販売したり、牛を出荷した後、お客さんのもとに届き、口にして、「美味しかった」や「また食べたい」「このクオリティはすごい」などの言葉をいただくと、とてもうれしい気持ちになり頑張ってたかったと思えるし、もっと美味しいものを作ろう、牛たちの世話をこれからも頑張ろうと前向きな気持ちになり、次のモチベーションにつながる。

このように、農業や畜産業は「大変だ」と

感じる以上に嬉しさが勝つ瞬間がたくさんある。また機械化によって女性が働きやすい環境も整い始めているし、女性が活躍できる場が増えてきたと思う。

だからこそ少しでも農業に興味がある人は勇気を出して農業の世界に足を踏み入れてほしい。そして、農業女子はとても魅力的でかっこいい。と伝えたい。



6. 私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、2つある。

1つ目は、動物関係の仕事に就くことだ。具体的に動物園の飼育員か、ドルフィントレーナーになりたいと考えている。これらは言葉の通じない動物を相手にする仕事だ。スムーズに仕事をするには、普段動物たちに接するときに信頼関係を築くことやコミュニケーションを取ることが大切である。また、動物たちが幸せに過ごせるような飼育管理ができる飼育員になりたい。

2つ目は、農業の魅力や素晴らしさをたくさんの人に伝えることだ。この研修を通してたくさんの知識をインプットした。その知識を自分の頭にとどめているだけでなく、世にアウトプットしていきたいと思う。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は家畜の飼養管理をするだけじゃなく、もっとたくさんの仕事があるし、ときには大きな決断や勇気のいる判断が必要な瞬間があると思います。動物相手の仕事って本当に大変だし、疲れるけどそれ以上に家畜たちを見るたびに癒されるし、命の大切さを学べるし、商品になって消費者のもとに届いて感想を聞くとモチベーションになるし一石三鳥の職業だと私は思います。そして畜産女子はかっこいい!!!

これからも、もっと畜産業と一緒に盛り上げていきましょう!



畜産アンバサダー
群馬県立勢多農林高等学校
動物科学科 3年
木暮千尋

1. テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2. キーワード

アニマルウェルフェア

3. キーワードのつながりと考察

最初は、私の高校で JGAP を取得していることもあり、アニマルウェルフェア（以下、AW）をキーワードに深く AW について学ぼうと考えていたのですが、それはビジネスにもつながってくると考えました。よって、「ビジネスとしての畜産」というテーマで、デンマークの AW 制度を考えたとき、養豚が盛んであり、制度がしっかりしていて、なおさら農場の施設や圃場にゆとりがあるため、付加価値をつけることができ儲かると思っていました。デンマークの AW 制度や取り組みについて学び、そこから日本に応用できることがあるのではないかと考え「アニマルウェルフェア」をキーワードにしました。

デンマークの養豚では、AW の考えが法律によって規制されており、農家はその法律を守るかたちで農業を行っていました。特に豚にストレスを与えないようにする政策がしっかりしており、豚房にワラや木などを置く、断尾を行ってはいけない、屠殺方法は二酸化炭素を用いた方法が多い、妊娠豚の固定が4週間以内と決められているなどがありました。妊娠豚は4週間をすぎると少し広い部屋に子豚と一緒に移され過ぎします。分娩時の妊娠ストールは前後の幅が少し広く作られていて、日本よりもストレ



スが少なく構造になっていました。

これらのことから、日本よりも肉質が良い豚肉を生産でき、手間やコストは掛かるが規制や AW の考えをしっかりと取り入れた管理方法を行うことで、高い値段が付き、収入につながると思います。



日本の豚舎は、ウィンドウレス豚舎と開放豚舎に大きく分けられ、ウィンドウレス豚舎のほうが多い傾向にあります。また、一つの豚舎や豚房がデンマークに比べ小さいので、豚にストレスを与えないためにも、少しでも外気に触れられるようにし、母豚や肥育子豚の豚房を広くし、豚が自然に近い行動が取れるようにワラや木などを置き、ストレスが少ない豚の生産を行っていきることがベストだと思います。ワラや木などを置くことで、リラックス効果が生まれるとデンマークの養豚農家さんから学んだので、ストレスが少ないのではないかと思います。

日本では、5段階評価で枝肉の格付けを行い、肉の値段が確定します。これらの取組を行うことによって、少しでも豚の肉質や肉付き、脂肪の付着、色等が改善され、より高い等級で利益を生むことができると思います。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

最初は、外国ということもあり不安が大きかったですが、通訳の JI さんや JAEC の方々のサポートのもと研修を無事終えることができました。自分の興味・関心のあることから、知らなかったことまで、学ぶことが

できてとても充実していました。特に良かったと思う点は、学校の授業で学んだ日本の畜産と研修時に学んだデンマークの畜産を比較できたことです。

日本の畜産だけでなくデンマークの畜産を学ぶことによって、日本の課題を解決する鍵を見つけられたり、日本の畜産に足りないことなどを見つけることができました。例えば、養豚では、AW の意識や感覚が日本とデンマークで大きく異なり、デンマークでは国民やメディアなどから厳しい目で見られているのに対し、日本では AW という考えはおろか、畜産業はどんなことをしているのかも知らない人が多いです。このことから日本人、一人ひとりの畜産への意識が足りないため、養豚場などがもっとオープンに情報を発信し、体験などを行ったほうが良いと考えました。

そして、海外研修に初めて参加し、改めて英語の必要性を痛感しました。日本にずっといるから大丈夫！ではなく、いつ必要になるか分からないので、自分のスキルアップのためにも身につけておくべきだと思います。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、日本の養豚の魅力や今回研修で学んだデンマークの養豚との違いなどを広めていきたいと思います。

自分のペースで仕事とすることができ、養豚をすることで堆肥が生み出され、それを飼料などの圃場に使用すれば循環農業を行うことができ、地球にやさしいこと、手をかければかけるほど豚が応えてくれて収入につながっていきます。また、男女で差があり、男性の方が向いていると思われがちですが、養豚では分娩や育成などの場面で女性が向いていて、母性本能が働き子豚にとって良い効果となるので女性にも向いています。これらのことも知らない人が大部分だと思うので、広めていきたいです。また、やりがいのある仕事だということや養豚の魅力を知らない人や養豚や畜産業、動物に少しでも興味を持っている人に、「楽しい職業だなあ」とか、「少しやってみたいかも」と思ってもらえるようなアンバサダー活動をしていきたいです。

また、日本の養豚農家の方々にもデンマークの AW を重視した管理方法や、家族で、役割を分担し自分たちにあった養豚を行っ

ていることを伝えていきたいです。このような活動を行うことで、性別、年齢問わず多くの日本人の方に養豚の良さや魅力について知ってもらう機会となり、未来の養豚を盛り上げる大きな一歩になると思っています。

さらに、畜産業では、3K が多くの人の負のイメージとしてずっと残っています。「汚い」「きつい」「臭い」この3つです。しかし、皆さんはご存知ですか？

3K は負だけのものではありません。新たな3K は「かっこいい」「感動があり」「稼げる」というものです。日本の養豚の魅力はたくさんあります。養豚により良いイメージを持ってもらえるようになっていけることが一番いいと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、養豚農家になることです。養豚農家になるうえで、もっと豚に関する知識や農場を経営するノウハウを身につける必要があると思います。

高校卒業後は、農業大学校に進学し、豚に関する知識をさらに身に付け、人工授精師の資格や重機の免許を必要最低限取得し、将来色々な場面に適応できるようにしていきたいと考えています。

また、農場の雰囲気や仕事内容、どのようなことが求められるのかなどを学ぶために、農業大学校を卒業したあと一般養豚企業に就職し、そこで学びを深めたいと考えています。自分の中でかなり大きな目標を立てていますが、この目標を叶えるには今の生活も重要になってくるので、高校生の間でもできることをしっかりとやっていきたいと思っています。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

今の畜産業の課題として、皆さんはどんなことを思い浮かべますか？

私は、農業従事者の高齢化やそれに伴う担い手不足が課題だと思います。畜産業をもっと盛り上げていくために、担い手不足はとても深刻な課題です。もし、皆さんが畜産に興味があったり、学びを深めたいと思っているのなら、これからの畜産を変えていけるのは私達です。

畜産の可能性やどうしたら楽しい職業にしていけるか考え、一緒に挑戦していきましょう。そして、畜産業をさらに盛り上げていきましょう。



畜産アンバサダー

埼玉県立杉戸農業高等学校

1. テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの農業）

2. キーワード

輸出について

3. キーワードのつながりと考察

日本が輸出に強くなるためには、なぜデンマークは輸出が多くなったのか、デンマークのやり方は日本で適応できるのだろうか、仮に行うとしたらどうすればよいのだろうかを考える必要があると考えたので、「輸出」について調べました。

デンマークが輸出に強くなれた理由として分かったことを簡易的にまとめると、友好国との貿易がうまくいったことで、市場のシフト転換が早かったことが分かりました。国の市場転換はかなりリスクが高く、不安が大きい中他国を相手に商売をすることにし、時代の流れにおいていかれずに決断できたことが大きいです。ここの市場シフト転換や貿易のうまさ、今デンマークが輸出に強くなった理由の内であると私は思います。

他には、アニマルウェルフェアを行うことで得られる付加価値や、消費者の声をしっかり商品に反映できる力が大きいと言えます。

後は、人口が多すぎることはないので自給自足ができ、食料を輸出に割りふれることができるんだろうと思いました。



これらを踏まえて、日本がデンマークのように輸出国になれるのは難しいのではないかと思います。まず国民が多いため食料が足りない、つまり輸出に割く余裕がないと思われる。また、輸出という面でデンマークは日本よりもっと前から取り組んでいました。日本が鎖国している間に市場を変えたりしていました。追いつくにはかなりの努力が必要です。

しかし、できることもあります。それは付加価値をつけることです。こういうことから着々と前に進むことが大切であると私は思います。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

社会福祉がしっかりしているので、金銭面であまり困ることなく勉学に取り組めるところがいいと思いました。勉学に困ることがあまりなく取り組むことができるということは、新しいジャンルに挑戦しやすいということです。社会福祉によってある程度の安定が保証されていることは、国民にとってとても良いシステムであり、新しいジャンルを気兼ねなく勉強できる、つまり普通科で進学してきた人が農業を学べる機会があるということです。農業を学べる機会があれば少数でも担い手になりたいと思うきっかけが増えます。そうすれば担い手の増加が見込めると思います。なので、こういうデンマークの取組を日本に輸入すれば日本の担い手不足問題も解消されるのではないのでしょうか。

しかし、日本の税金政策ではデンマークのような厚い福祉政策をすることは難しいのが現状です。ですが、本気で担い手を増やしたいのであれば、税金を使うべきところに使って、少しでも農業を学べる機会を増やす、担い手づくりの支援をすべきだなと思いました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして広めたいことは、2つあります。

1つ目は、畜産とはどんなものなのかを広めることです。畜産について農業高校で学んでいる私でも、この海外研修で知らないことが沢山ありました。なので海外研修に参加していない同級生、ましてや他学科の生徒はもっと分からないと思います。分からないと具体的に酪農ってどんなものか想像がつかないため、興味が持てなかったり

します。それくらいどんなものかを知ることが大切なので、まずは畜産とは何かを興味持ってもらうため知ってもらえるよう、アンバサダーとして発表する機会を設けて、「畜産とは何か」を普及していきたいと思っています。

2つ目は、畜産は案外女性に向いているということです。畜産は体力仕事で力が必要などとかで、昔は男性の方がやっており、女性がやるなんてあまり想像がつかなかったように思えます。しかし、現代は機械化が進んでおり、重たい作業も機械がやることによって女性でも畜産を行うことが可能になってきました。このことを知っている人は多くなく、私もその一人で、女性が畜産をやることは難しく向いていないのかもしれないと、畜産関係の進路は諦めかけていました。ですが、今では機械化が進んでいるので女性がやることは可能になってきていることを知れたので、「畜産を目指すこともいいな」と再度思えるようになりました。なので、畜産に興味があるけどできるか分からないで悩んでいる方に、今は可能になってきていることを知ってもらえるよう広めたいです。

これら2つを少しでも多くの方に知ってもらうことで、女性が畜産に興味を持ててもらいたいと思っています。

インターネットが広く使われている時代ですが、やはり農家さん自体が近年減少傾向にあるため、元のソース情報が少ないように感じます。なので、海外研修で学べたことを新たな資料として取り入れることができれば、担い手になってみたいと思えてもらえる人が増える可能性がある、つまりは日本の担い手不足問題を解消できるかもしれないので、アンバサダー活動を頑張りたいと思っています。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来何になって、どんなことをやりたいかはまだ明確にははっきりしていないのですが、何か一つは専門的なことを研究し、突き詰めていきたいと思っているので、大学に進学したいと考えています。あとはどの道に進んだとしても、動物が好きなのは変わらないと思いますので、何かしらのかたちで動物と関われるようにしたいと思っています。

私が農業関係に進まなかったとしても、この海外研修で学べたことは決して無駄になることはないの、周りに農業関係に進み

たいと思っている友達などがいれば、学んだことをもとにアドバイスなどしていけたらいいなと思います。



7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産関係に進むかどうか迷っている方がいるのであれば、一度海外研修などに参加してみることをお勧めします。

なぜなら、教えてくださる方は実際に経営をしているプロの方なので学校以上に専門的に学べるからです。専門的に学べるということは、畜産の楽しいところだけではなく大変なことも知ることができます。知ることができれば、これは本当に自分がやりたいことなのかどうかを決める良い判断材料になるので、迷っている方こそ海外研修などの知らないことをたくさん知れる機会を作ってほしいと思っています。畜産関係の大学や専門学校、就職にするにしろ選びなおすことは可能ですが、金銭面的に難しかったり、過ぎた時間は帰ってこないのが現実です。

なので、私たち高校生は進学や就職の際、すぐ悩んだりするんだと思います。どの選択にするか決める際、情報不足でこんなはずじゃなかったと後悔をしないよう、利用できる海外研修のプロジェクトなど存分に活用してみてください。

私は進路を決める判断材料として海外研修に参加したので、まだ夢は決まっていますが、もし私が畜産関係に進んで、この文を読んでくださっている方も畜産関係に進んだ時には、お互いに頑張りましょう！悔いのないよう将来を！



畜産アンバサダー

東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科2年
岩倉綾野

1. テーマ

女性の活躍できる畜産
(ワークライフバランス)

2. キーワード

女性が働きやすい環境

3. キーワードのつながりと考察

「女性の活躍できる畜産」をテーマとして、「女性の働きやすい環境」について考えた。日本では今でも女子トイレや女子更衣室が設置されてない牧場がある。このように女性が働くのに必要な環境が整っていないことが、日本の女性畜産従事者が少ない原因の一つではないかと考える。そこで、男女平等が進むデンマークの畜産の現場ではどのように女性が働いているのかを学ぶことにより、現在の日本の女性畜産従事者が少ない現状を改善できるきっかけとなるのではないかと考え、「女性の働きやすい環境」をキーワードとして今回の研修に参加した。

実際に研修に参加してみて、キーワードから導かれた考えは、女性畜産従事者を増やすにはまず環境を整えることが大事だということである。デンマークでは保育施設が充実していて、育児に関する政策が豊富で、子育てと仕事を両立できる環境が整っていた。また、日本では育児の仕事は主に女性がするというイメージがまだ残っているが、デンマークでは育児の仕事を家族全体で分担することが多く、男性も育児休暇を取るのが当たり前となっていた。これらのことから、女性の社会進出を進めるには環境を整えることはとても大事だと実感することができた。

日本でも、保育施設を増やすなど、子育てと仕事を両立できる環境を作るための政策がさらに必要だと考えた。また、女性が出産後に安心して仕事復帰ができるよう、日

本でも男性が当たり前のように育児休暇が取れるような環境が必要だと考える。育児の仕事が家族で分担して行うことにより、女性の負担が減り、女性がさらに活躍できる社会につながると考えられる。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

今回の研修を通じて、私が最も印象に残っているのは「アニマルウェルフェア」である。研修中、養豚家のルイーズさんにお話を聞くことができた。ルイーズさんの農場ではわらを敷いたり、木を置いたりして、「掘る」、「齧る」といった豚の本能的な行動ができるように飼育しているとのことであった。ルイーズさんの「豚にストレスを感じさせないことが私の仕事」という言葉がとても印象に残っている。ルイーズさんは、豚にストレスを感じさせないことを当たり前だと考えており、この言葉を聞いて、私は養豚という職業を改めて認識することができた。日本ではまだアニマルウェルフェアが普及できていないが、デンマークではアニマルウェルフェアはとても重視されており、多くの国民がそれを求めている。もちろん、私も家畜はどうせ食べられるからと適当な扱いをしていいとは思っていない。これから日本でもさらにアニマルウェルフェアが普及し、家畜と人間のより良い関係が築ける社会にしていきたい。

そこで、まずは高校で放牧による養豚などに挑戦し、一般の人にも情報を発信して、養豚に対するイメージを変えられるようにしていきたい。



5. これから畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして日本に広めて

いきたいことは、畜産の楽しさと女性は畜産に適しているということである。

私は今、学校で養豚について勉強している。担当の母豚の種付けから出産、生まれた子豚の世話や育成し出荷するまで、様々な管理に自分で取り組んでおり、そこからとてもやりがいを感じている。また、出荷された豚たちが、誰かの食卓にのり、誰かに幸せを与えると考えると、とても達成感を得られる。このように、畜産はとて魅力のある職業だと私は考える。

また、畜産は重労働が多く、女性が働くには適していないと考えられているが、デンマークでは、多くの女性が畜産において活躍しており、養豚においては特に分娩舎で多く採用されていた。その理由は、女性は母性本能から、男性よりも子豚の飼育に適していると考えられているからである。そこから、私は苦手な分野で諦めるのではなく、得意な分野を見つけて、さらに伸ばしていくことが大事だと実感することができた。

畜産の楽しさと女性は畜産に適しているということを伝えることにより、多くの人が畜産に興味を持ってくれるきっかけになり、さらに、女性畜産従事者が増えていけばと考える。現在の日本の畜産は主に男性が行っているイメージがあるが、これから女性畜産従事者が増えていくことで、女性の意見がたくさん取り入れられ、畜産のさらなる進歩につながるのではないかと考える。



そのため、これから多くの人が畜産に興味を持ってくれるよう、アンバサダー活動を通じて、畜産の魅力を伝えることに努めていきたい。

6. 私の夢、これからやりたいこと

現在、日本では畜産における後継者不足問題がとても深刻であると私は考える。

そこで、畜産従事者を増やすためには、まず畜産に興味を持ってもらうことが大事である。そのため、多くの人に畜産とはどのような仕事かを知ってもらうために、これから畜産の魅力を発信していきたい。

そして、将来、私は養豚経営者になることが夢である。女性が働きやすい環境を作るために、機械化の進んだスマート畜産の導入を目指していきたい。そのため、高校卒業後は大学に進学し、さらに養豚について学びたいと考えている。この夢を叶えられるように、まずは残りの高校生活を大切に、たくさんの知識をつけられるよう努めていきたい。

7. 畜産を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

現在、畜産を学んでいる人の中には多くの女性がいますが、実際に畜産に就職する女性の割合は少ないという傾向があるということに気づきました。多くの女性は周囲の多くの人を持つ「女性は畜産に適していない」というイメージや、働きづらい環境により諦めているのだと思います。

でも、これからの畜産はきっといい方向に変わると思います。

これから畜産を目指したいと思っている人は、自分の夢を諦めず、突き進んでください！





畜産アンバサダー

新潟県立新発田農業高等学校
生物資源科3年
内藤佳澄

1. テーマ

女性の活躍できる畜産
(ワークライフバランス)

2. キーワード

機械化

3. キーワードのつながりと考察

「女性の活躍できる畜産」というテーマで、「機械化」について考え最初に感じたことは、力仕事は男性がやり、機械を使う仕事は女性がやるということでした。

実際に研修に参加した時、デンマークでは男女差がなく、一人一人の能力をお互いに尊重し合い、仕事をしていることが分かりました。男性でも女性でもその人に合った作業があるため、デンマークでは男女差を気にしている人はいませんでした。ですが、日本の畜産では男性が働いているイメージがついていて、まだ男女差があるように感じます。

私は今回の研修で学んだことを活かして日本でも男性、女性という言葉にとらわれず、やりたいことをだれでもできる社会にした



と思っています。そのためにまず自分がすることは、養豚農家に就職して、仕事内容など SNS を使って畜産の面白さを伝えていきたいです。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークでは、アニマルウエルフェアを大切にしている、例えば屠畜の方法や有機農業など豚にも人にも優しい環境が整っていて感動しました。デンマークの畜産業から様々なことを学びましたが、私がこの研修で1番印象に残ったことは、自分のテーマでもある女性の活躍できる畜産についてでした。

私も将来養豚農家に就職することを考えていますが、やはり働いている人は男性が多いです。そんな中、女性が働いていくことを考えたら、デンマークの男性と女性についての考え方にはとても感動しました。

本研修で実際のお話を聞かせてもらったとき、豚の分娩には女性が向いているなど、人にはそれぞれ得意、不得意があるので、それをみんなで補っていくことで、性別にとられない考え方をしており、女性でも働けると自信がつき、将来養豚農家に就職にも自信になりました。デンマークの人たちは、女性が働きやすい環境作りや男女の比率などを気にしておらず、それが当たり前だというのが日本との違いだと実感しました。

日本もこれからの畜産業に女性の労働者が増え、男女差のないみんなが働きやすい環境を作っていき、日本の畜産の考え方、イメージが変わるような取り組みをしていきたいと思いました。

5. これから畜産アンバサダーとして、 日本に広めていきたいこと

私がこれから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいことは、畜産業は男性でも女性でも働ける職業だと知ってもらい、多くの人が畜産に興味を持ってもらうことです。



日本の畜産は3K(きつい、汚い、危険)といったイメージもあり、男性中心の職業と思っている方が多くいます。ですが、畜産現場で活躍する女性も多く存在しています。そこで今回の研修で学んだ、デンマークでの畜産に関する考え方を日本にも広めていきたいと考えました。

デンマークでは男女差を気にしていなくて、その人の能力を大事にして働いています。そして、畜産業は女性でも活躍できる職業です。養豚農家では、男性は肥育の管理や力仕事に適しており、女性は豚の分娩介助や、子豚の管理などに適していると思います。決して非力だから力仕事は男性ではなく、あくまで適正で考えています。

また、デンマークには次の言い伝えがあります。「農業をやると女性は頭がよくなり、男性はより強くなる」と言われています。一方日本の養豚業は3K(きつい・汚い・危険)といったイメージがありますが、実際に豚を飼育してみるとやりがいがあります。さらに、今は機械化が進んでいるので少しの力仕事は軽減されているので、女性でも働いていけると思います。そのような考え方が日本でも広まっていけば、多くの同世代の人たちが畜産に興味を持ってもらえるのではないかと思います。多くの人に畜産の楽しさを知ってもらうために私たちがすることは、養豚女子として、SNSで発信、広報活動することによって、見た人の中に

興味を持つ人も増えるのではないのでしょうか。

他にもポスターを作成し商業施設など若者が集まるところに張るなど工夫をしています。養豚業に私は就職します。畜産アンバサダーとして発信することは忘れません。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は、将来、養豚農家に就職したいと考えています。

私は、幼い頃から動物に興味があり、農業高校に入りました。私の高校では8つの専攻に分かれていて、その中で動物専攻に入りました。そこで、豚の担当になり管理をしていました。実習をしていく中で、自分の手で育てた豚が消費者に届くことへのやりがいや、養豚業の楽しさを感じました。そこからさらに養豚業への興味がわいてきました。生き物を相手にしているので、死に直面することもたくさんあります。私は一頭でも多くの命を守り、離乳率100%を目指していきたいです。

また、女性が働きやすい環境を作り、養豚業というより豚に興味を持ってもらいたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちに メッセージ

今回は新型コロナウイルスの蔓延でデンマークに行けず、研修に参加したメンバーとも会えずとても残念でしたが、Zoomを通してデンマークの畜産について学んでいく中で、メンバーとの仲も深まりいい思い出になりました。

自分だけでなく全国に畜産業を目指す女子がたくさんいて心強いです。次は皆さんと直接会いたいです。今の日本の考え方やイメージにとらわれなくて、やりたいことを全力でしてもらいたいです。

大変なことや辛いことがあっても、その先にはやりがいや達成感があります。

将来の畜産を私と盛り上げていきましょう！



畜産アンバサダー

富山県立中央農業高等学校
生物生産科3年
松浦日依梨

1. テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2. キーワード

アニマルウェルフェア

3. キーワードのつながりと考察

「ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）」というテーマで、デンマーク農業について考え始めた時、デンマーク農業について知っていたことは「日本より国土面積が小さい国だが農業先進国であること」と、「アニマルウェルフェアが発展しているということ」のみだったため、アニマルウェルフェアが発展しているのは、生産者のアニマルウェルフェアの意識の高さにあると考えていた。また、アニマルウェルフェアに基づいた飼養管理を積極的に行うことで、高い付加価値がつき、生産者にとって大きな利益につながっていると考えていた。

本研修を通して分かったことは、デンマーク畜産ではアニマルウェルフェアは当たり前に行われ、アニマルウェルフェアに付加価値がつくわけではないことである。デンマークは、養豚を中心とした畜産物の輸出大国であり、農地面積は国土の6割をも占める農業大国だ。そのため、デンマークは他国との激しい競争力の中で選ばれる農作物を生産する必要がある、品質や安全性の高い農業生産を行なっている。中でも、養豚では生産から輸出の段階までの徹底した厳重な規制とチェックにより、安全性が保たれている。それらの畜産物には、安心ポークの証である Danish というロゴマークをつけ輸出をしている。また、EU 全体でアニマルウェルフェアの考え方を推奨し、飼養基準を確立させてい

るため、アニマルウェルフェアは義務なのである。

日本の畜産が有機畜産に取り組み、輸出量を増やせば、デンマークの畜産に近づけるかもしれない。しかし、日本は山や森林が国土の7割を占め、十分な農地の確保が困難である。また、国産の流通価格より関税がかかっている輸入肉の価格が安い現状が、短期間で逆転するとは到底考えられずデンマークのように世界と戦っていけるとは思えない。環境や現状を変えることはできないが、消費者の畜産や環境への意識を高めることはできる。消費者の意識改革ができれば、この先の畜産含め農業は確実に良い方向へと変わっていけると考える。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークの研修を通じて私は、国や消費者の畜産に関する意識が日本よりはるかに高いと感じた。EU 全体で、アニマルウェルフェア規制がなされているが、デンマークは販売先のニーズにより、より強化した規制をかけていた。さらに環境保全にも力を入れていた。デンマークは、国全体で畜産に力を入れていることが分かった。一方、日本の畜産は伝統を守ることに重きを置き、新しい考え方を取り入れることに消極的で、あまり発展していないと感じた。日本をデンマークのように発展させていくためには、国全体で畜産を発展させ、世界と競争できるようにしなければいけない



と考えた。しかし、そうするには生産者や消費者の意識が重要になる。誰かが意識を高めれば、また違う誰かが意識を高める。地道ではあるが、この小さな変化が、いずれ積み重なって、大きな変化となり、国全体として、日本の畜産の発展を目指していくのではないかと考えた。

そして、未来の畜産を担う私たちが日本の畜産を変えていく第一人者にならないといけないと考えた。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は、畜産アンバサダーとして日本にアニマルウェルフェアな考え方を広めていきたい。

今後、グローバル化が進んでいくと、家畜のためにも日本の畜産のためにもアニマルウェルフェアは必要不可欠になると私は考えている。世界の中でも EU を例に挙げると、アニマルウェルフェアの規制をかけ、アニマルウェルフェアが当たり前に行なわれている。また、デンマークでは畜産物の安全性に力を入れ、その安全性を付加価値にして世界で成功している。ゆえに、私はこれからの畜産業界は「家畜の健康」と「畜産物の安全性」がかなり重要になってくると考える。

しかし、今の日本の畜産は、それらに対応できているとは言えない状況である。その要因として、私は生産者と消費者の距離感にあると考える。一般の消費者はどうしても安さ重視になりがちで、その安さには何らかの理由があることを考えようとしていない。また、家畜がどう育ったのかのストーリーを知らないのである。生産者は消費者の要望に応えるべくコスト削減に懸命に取り組んでいる。消費者が畜産物に安全性や家畜の健康・幸福を求めれば、生産者はそのニーズに応えようとし、自然と生産者と消費者の距離は縮まると考える。

消費者の意識をどれだけ高められるのが、日本の畜産がどうなるのかを握っていると考えた。

私が考える女性が活躍する理想の畜産業とは、一人の人間として働ける畜産業だ。「女性だから」「男性だから」と言わず、得意不得意を補い合って、働けることが一番理想的だと考える。そのためには、女性が声をあげなくてはならない。そして、女性は強く賢くならなければならない。

だから私は、一人の人間として認めてもらえるように、勉強し経験を積んでいきたいと考える。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来、酪農家になって、「牛も人も幸せな牧場」を作りたいと考えている。しかし、今の私には経験もなければ、知識も不十分である。だから、私は大学に進学し、まずは知識を増やしたいと考えている。そして、大学卒業後は、酪農ヘルパーの道に進み、多くの酪農家と交流を深めるとともに、経験もつみあげていくつもりである。また、畜産アンバサダーとして、日本の畜産の発展を目指すとともに、畜産の後継者育成にも力を入れていきたい。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は、とっても素晴らしい職業だと思います。

これからの畜産を私たちの手で、より魅力的に、より先進的なものに変えていきましょう！！夢に迷いを感じ、諦めなくなる気持ちもあると思うけど、私たちには同じ道を目指す仲間がいます！！

仲間と一緒に、「畜産沼」にもっともっとハマって、日本の畜産の未来を明るくしていきましょう！！





畜産アンバサダー
岐阜県立岐阜農林高等学校
動物科学科3年
川島 希望

1. テーマ

家畜や自然のための畜産
(アニマルウェルフェア)

2. キーワード

共通（考え方、技術、SDGs）

3. キーワードのつながりと考察

日本とデンマークでは、文化や農業などが地理的にも歴史的に見ても当然異なる点がありますが、考えや思いは「共通」している部分があります。
デンマークでは、「家畜の本能を重視した農業方法」を主体にしており、日本では「生産性を重視した農業」という方針の違いがあると感じました。一例をあげるとデンマークの養豚では、好奇心旺盛な豚は狭いユニットにいとストレスが溜まるため、広いユニットの中に木の棒や縄、藁などを設置し、快適に過ごせるような環境が義務付けられています。しかし、日本では限られた土地のうえ、人手不足のため、効率性が優先されているのが現状です。



畜産業での飼養管理は容易ではありませんが、それぞれの経営者から「畜産に対する情熱が大切」だという言葉は海を越えて同じものでした。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

日本の農業の問題として、後継者不足から若い世代の担い手が不足していることがあげられます。重ねて、高齢化が進み、廃業を余儀なくされ、畜産自体が衰退の一途を辿っています。畜産業は3K労働や労働時間の過多などがあげられ、収入の割にリスクや重労働であることが大きな要因と考えられ、それらが先入観となり若い世代に人気のない職業となり、社会問題となっています。
そのような中、デンマークの農業は機械化が進んでおり、温度管理などを徹底していました。このことから、スマート機器を導入することで重労働の概念を崩し、負担の軽減から、より多くの若い人々が畜産を職業の選択として選んでもらえるのではないかと考えました。
また、「アニマルウェルフェア」については、高齢化と人手不足から、成功事例の周知がされないと酪農家も中々実践に踏み切れないのではないかと考えました。
今回の研修を通し、家畜（動物）にとって守られるべき尊厳だけではなく、快適な環境を作ることによって結果的に上質な肉の生産へとつながり、また乳牛のミルクの増産にもつながるため、「福祉」と「経営」は別のものと考えず、生産性にも関係するものと意識していくことが今後の日本の畜産にとって大切なことだと痛感しました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

畜産アンバサダー活動の1つとして、情報発信と意見交換が大切だと考えています。今回の研修で学んだ内容を一方的に発信していくのではなく、国内外の取り組みや成功事例、現在抱えている問題などを様々な人と情報共有し、気軽に話せるSNSなどの環境があれば、より良い活動ができると考えました。

この活動において、様々な人との繋がりを持つことで以下のようなメリットが考えられます。

- ①まずは身近なところで農業高校や農学生などの若い世代の人たちと繋がる。畜産への情熱が湧き、新しいアイデアと若い担い手につながるのではないかと。
- ②2つ目は食育活動への積極的な参加。私の学校で行った交流活動で感じたことで、子どもたちの中には、売っている牛乳などは、工場や会社、スーパーで作られるといった考えを持っている子もいる。この活動は、商品の流通経路や生産・商品化について学びにつながる。そして何より、畜産業が職業選択の1つになる。私のクラスの友人にも、酪農がしたくてこの学校に入学した人がいる（こんな人が増えとうれしいです。）
- ③主婦の方と繋がる。酪農家の取り組みを知ることで安全・安心につながり、さらには消費者目線のアドバイスがいただけるかもしれない。
- ④日本の畜産農家家との繋がり。アニマルウェルフェアなどの新しい考え方を取り入れてもらう契機になり、逆に経験談から私たちの学びへとつながる。私たち若い世代が何かお手伝いができることにつながりたい。
- ⑤日本に在住する外国人や海外在住の外国人に、日本の畜産を知ってもらうことで就労の機会が生まれ、人手不足問題解決へ貢献できる双方の願いが叶うかたちになります。これは私の考える「SDGs」の「持続可能な農業」へと直結します。



6. 私の夢、これからやりたいこと

私は将来、日本と海外の農業をつなぐ仕事に就きたいと考えています。その理由は、高校では畜産について3年間学び、さらに海外への留学での経験を得て、身につけたことを活かせる仕事に就きたいと思ったからです。
デンマークでの留学経験から、様々な国の友人ができました。文化や歴史が違う異文化の外国人との交流は、一つの事柄でも多角的な意見やアイデアが出され、とても興味深かったです。そして、現在もSNSで繋がっています。これは、畜産アンバサダー活動においても同じように「繋がり」を展開できるのではないかと考えます。
多様性から、アイデアが生まれ、問題解決につながるのではないかと考えています。
この体験から私は、さらなる英語力の向上と大学で専門的な畜産や家畜学を学びたいと思っています。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

今回の研修から、デンマークでは、非農家の人が農家になることも珍しくなく、農業という職業に誇りを持っていました。しかし日本では、残念ながら農業は人気がなく、人々の職業の選択として選ばれることが少ないと感じています。重労働で大変な面はありますが、それ以上に、やればやるほど魅力に溢れ、苦勞を忘れてしまうくらいやりがいのある仕事だと思っています。
皆さんも一緒に未来の日本の畜産を盛り上げていきましょう！！





畜産アンバサダー
静岡県立富岳館高等学校
総合学科3年
清水七星

1. テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2. キーワード

食と農と幸福度

3. キーワードのつながりと考察

私は「畜産の担い手」というテーマを、「食と農と幸福度」というキーワードで考えることにしました。

デンマーク（以下、DK）は、世界屈指の養豚大国です。そして、世界幸福度ランキング2位の国でもあります。以上の点から、食と農業は人々の幸福度につながっているのではないかと考えました。また、DKはほとんどの農家が大規模な農業を営んでいることが多いです。大規模な農業にはたとえ機械化が進んでいるとはいえ、それなりの従業員や担い手が必要だと思います。ですが、DKの大規模な農業は衰退するどころかさらに進化し続けています。このことから、幸福度が高いほど畜産業の担い手になりたいと思う若者の数が多いのではないかと考えました。

実際にDKの農家や農業学校の先生方にお話を聞き、デンマーク人は肉や野菜など自分の口にする食材に対してのこだわりや関心が非常に高く、どのような過程を得てその食材が作られたかを重視していることが分かりました。DKは消費者の食品に対するニーズや意識が高いです。そのため、心身ともに幸福感を多く得ることができるのではないかと考えます。また、DKは様々な制度がある中でも自分のやりたいことを自由にでき、ワークライフバランスがしっかりとしています。日本に比べ環境が良いのは、デンマーク人が畜産に携わろうと思えるきっかけが多いのかもしれませんが。このようなことが、DKの世界幸福度ランキング2位につながっているのではないかと思います。

日本の畜産においては、まず、どのようにしてその食材が作られたのかを知ってもらうことが重要だと思います。普段スーパー

に何気なく並べられている豚肉が飼育され、屠畜され、加工されて食べられる状態になって運ばれてきたことをよく理解してもらうことで、畜産に対する意識や考え方が変わってくると思います。そして、今以上に畜産業への支援やサポートを強化し働きやすい環境を整えることも大切だと思います。畜産には膨大な手間と労力、費用がかかります。このような実態は「3K」へのイメージに結びついてしまいます。ですが、サポートや支援がしっかりとしていればこれから畜産を学んでいく学生や新規就農者も安心することができ、そうでない人も畜産への道の可能性を見出せるのではないかと思います。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

この研修で私が一番衝撃を受けたのは、DKの農業学校に通う学生がしっかりと自分の夢や目標を持っていたことです。彼らは「酪農家になりたい！」「農家になりたい！」という想いをとても強く持っていました。そのため、最初から全員農業を学びに学校に来ていて、授業やインターンに対する姿勢がしっかりとしているのを感じました。日本の農業学校に通っている生徒は、もちろんDKと同様に農家や酪農家になりたいと思って通っている生徒もいます。しかし、別に農家や酪農家にはなろうと思ってはいない人や、行く学校が無かったので仕方なくこの学校にしたという人もいるのではないかと思います。実際に私の周りにも、畜産を学んでいても違う道で働きたいと希望している人は多くいます。また、実際にDKの農業学生と交流をした際、休日にも関わらず牛と触れ合ったり、トラクターに乗ったりしている姿を見ました。DKの農業学生は、どのようにすれば農家や酪農家になれるのかというプロセスもよく理解しており、そのための自分の知識や技術を高める努力も惜しんでいませんでした。同じ農業を学ぶ学生でも、国を超えるところなにも意識の差があることにとても衝撃を受けました。日本の学生はDKの学生の意思や姿勢を見習わなければならないなと感じました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、DKと日本の働き方と支援の違いを広めていきたいです。日本とDKでは、農家として働くことに対し



での考え方やモチベーションが違います。また、農家への政府からのサポートも大きく異なります。これらを日本で広めることによって、昔から日本の畜産にこびり付いた「3K」のイメージを払拭することができ、畜産業の働き方改革につながると考えます。具体的に、日本の農家の場合、当日決められた仕事は残業してでもその日のうちに消化しますが、DKの農家の場合、当日に終わらなくても翌日などに持ち越したりします。それは、デンマーク人が利益だけのためではなく、常に「家族を第一」に考え、自分の気持ちを尊重して働いているからです。このような雰囲気や、DKの働きやすい環境や畜産に対するポジティブな思考を生み出しています。

また、DKでは新規就農者が新しく農場を購入することのできるプランがあります。日本で新規で農業を始める場合、土地を購入して施設を建設するところから始めなければなりません。しかし、DKでは土地はもちろんのこと、豚舎などの施設が整った状態で農場を購入することができます。これにより、新規で農業を始める人もいち早く、そして気軽に農業を始めることができます。これらのことを日本の畜産に取り入れることができれば、「そんなに畜産を堅く考えなくてもいいのかもしれない」と考える人が増え、あと一歩が踏み出せない人や何から始めればいいのか分からない人なども、就農へときちんと導くことができます。スマート畜産や女性の就農の推進が進む現在。“女性だからできない”という仕事は徐々に減り、“女性だからこそできる”仕事が増えています。女性が持ち合わせている母性やしなやかさは畜産の世界でも幅広く役立ちます。その長所を存分に活かし、女性が畜産に率先して従事することが、私の考える女性が活躍する理想の畜産業の姿です。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、ドルフィントレーナーになることです。

畜産業とは少しかけ離れていると思ったかもしれませんが、今回の海外研修で学んだアニマルウェルフェアや女性の活躍できる畜産は、分野の違うドルフィントレーナーという仕事にも活かしていけると考えています。動物が幸せに暮らし、なおかつ、動物と人間が共生することのできる世界を作っていきたいです。

そして、身近な目標として、今回の研修で学んだ畜産の魅力や素晴らしさ、重要性、私が感じたワクワク感をまだ畜産をあまり知らない人に伝え、より多くの人に畜産に興味を持ってもらうことが今の私の目標です。「畜産をやってみようかな」と思う人を増やし、畜産の担い手育成に貢献していきたいと思っています。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私は、今回の研修で今まで知らなかった畜産の知識を知ることができ、また、全国各地の畜産女子高生の考えを聞いて視野が広がりました。畜産を学んでいる人達や、畜産業に携わる全ての人に誇りと尊敬の念を抱きました。畜産は、私達と切っても切り離すことのできない関係にあり、私達の心と体を満たしてくれるものでもあります。そんな畜産の未来を担っているのは、私達若い世代です。恥ずかしがらずに自信と信念を持って、畜産業を目指してほしいです。私達と一緒に畜産に対するマイナスイメージを無くし、盛り上げていきましょう！！



畜産アンバサダー

愛知県立安城農林高等学校
動物科学科3年
瀧井麻菜

1. テーマ

ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2. キーワード

オーガニック畜産

3. キーワードのつながりと考察

「ビジネスとしての畜産」というテーマで、「オーガニック畜産」について最初に思ったことは面白そう！です。事前研修で聞くまで有機農業なんてあまり聞いたことがなかったから、もっと詳しく知りたいと思いました。

実際に研修をしてみて、消費者の有機農業の農産物の認知度は日本より高いと感じ、その背景には、デンマークでは有機農業で作られたものが一般的になりつつあると聞きました。デンマークで実際に有機畜産をしている方のお話を聞いて、養豚も酪農も有機畜産をすることに誇りを持っていて、環境に優しいことやアニマルウェルフェアにもつながることに喜んでいたように感じました。

消費者に「有機農業」という言葉と、どのように生産しているかを知ってもらうことが大切だと思いました。有機農業で育てたものを買ってくれて、有機農業をしている農家が儲ければ、有機農業をしている人が増えるから環境にも動物にも優しい農業が日本でも実現すると思います。



4. デンマークの研修を通じて考えたこと

12日間の海外研修は、毎日内容が濃く充実していました。その中で感じたことは国の違いです。

授業でも、デンマークの高校生や農家の方と話した時も、国が違うと言葉や顔、規模が違うと思いました。言葉や顔は当たり前かもしれないけど、高校生と話した日は日本語がすごい落ち着いたし、顔はデンマークの高校生はすごく大人に見えました。全然同い年ぐらいには見えなかったです。デンマークは国内で売るのはではなく、世界の市場に多く輸出していました。そんな規模の大きさに驚き、消費者のニーズに応えようとする農家の方がすごいと思いました。あと、動物の飼料は、自分の圃場で育てているのもすごいと思いました。日本と比べて、山が無いから平地が多いけど、それにしても農地はとても広くて最初に動画で見た時は驚きました。あんなに広い圃場を持っていながら放牧をする土地もあるから、デンマークの農家はすごいなと思いました。アニマルウェルフェアを大切にしていって、家畜にストレスをかけないように広い空間を取っていたり、温度調節をきちんとしてあげていました。それに、と殺する時も家畜のことを考えていました。こういうことが日本でもできたらいいなと思いました。それにデンマークでは、機械化や福利厚生が整っていて、勉強しやすい、子どもを育てやすい環境が整っていました。研修を通して考えたことは、デンマークではやりたいことができる環境が整っているのと、仕事に対してのモチベーションが高いと思いました。やっている仕事自分がとっても好きなことだから、やる気があり農業が発展していったのかなと思いました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

わたしが思う畜産の魅力は、ペットとも展示動物とも愛玩動物とも違う何とも言えない距離感で接することができることです。家畜じゃない動物は、死んでしまうととても悲しくなります。しばらく立ち直れなくなったり、涙が止まらなくなります。ですが、家畜は可愛いけど食べるために育ててるから、いつか別れる時がくると割り切って接することができます。数か月から数年と短い間しか一緒にいられないけど、その短い間をいかに幸せに生活させてあげられるか考えるのが、アニマルウェルフェアだと思

います。デンマークでは有機農業とアニマルウェルフェアにとっても力を入れていました。1日の放牧の時間が決まっていたり、犬歯や尻尾を切るのは動物にとってストレスだから基本的には切らないなどがあり、他にも法律で決まっていることもたくさんありました。日本では、アニマルウェルフェアについて気にかけている農家もあると思いますが、あまり世間には知られてません。なので、もっと農業をやっていない人にも伝えたいと思いました。そして、有機畜産をやっている農家を増やしたいです。有機畜産をやっている農家を増やせば環境にも動物にも優しい農業ができると思いました。そして、女性が活躍する理想の畜産業は、女性が経営する農場ができることだと思います。今は男性が経営しているところが多いから、女性が考えたことを軸に経営を成り立たせることができると証明できれば、もっと女性の活躍が目立つのではないのかなと思いました。畜産をやっている女性は、その辺の男性よりも力があって頼れると思っています。そんな女性の一面を、農業をやったことがない人に伝えたいと思いました。それと、デンマークでは産休の制度が日本よりもとても整っていました。特に、出産前の4週間と出産後の14週間は休めて、その後の32週間は夫婦で話し合って休む日を決められる制度はすごい！と思いました。「日本でも社会全体で子育てを協力し、見守ることができるような制度が作れたらいいのにな」と思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

わたしの夢は、有機畜産で美味しいと言っ



て貰えるような豚肉を生産することと、畜産の良さをたくさんの人に知ってもらうことです。この研修中に日本とデンマークの豚肉の食べ比べをした時、美味しくて幸せで笑顔になりました。なのでわたしも、食べた人が幸せで笑顔になれるような豚肉を生産したいと思いました。そして、有機畜産で豚にも環境にも優しい、デンマークの方のような生産をしたいです。それと、畜産の良さは動物の可愛さでも、生産した物の味でも伝えられると思います。なので、豚の可愛さをもっとアピールできるように勉強も観察もたくさんして、いいところを伝えたいです。

デンマークのように世界に輸出はできないかもしれないけど、日本の食料自給率をあげることに貢献したいし、海外から輸入したものに負けないような豚肉を生産したいと思いました。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

わたしは高校で豚に会うまで、畜産にあまり興味がありませんでした。ですが、豚の世話をしているうちに好きになっていきました。自分でもこんな風になるなんて思っていなかったから、このプロジェクトに参加できているのも不思議な感じがします。豚を好きになったから経験できたことや出会えた人もいるし、作業も楽しいです。畜産をしている人、畜産や家畜に興味がある人は、一緒に畜産業を盛り上げて行きましょう！そして下の代の人につないでいきたいです。





畜産アンバサダー

大阪府立農芸高等学校
資源動物科2年
前田 瑛美佳

1. テーマ

女性の活躍できる畜産
(ワークライフバランス)

2. キーワード

スマート畜産

3. キーワードのつながりと考察

「女性の活躍できる畜産」というテーマで、畜産業での女性の活躍の仕方について考えた時、最初は、男性よりも活躍することが少ないと考えていました。しかし、デンマークでは子豚や子牛の分娩時に母性本能が働くので女性のほうが雇用されるほうが多いことや、機械の普及率が高く、重労働の仕事も女性が難なくできていることなど、男性よりも女性が有利な場面がたくさんありました。日本でも、女性が畜産業で活躍できるように、スマート機器や機械の普及率をあげたいと思いました。また、デンマークには「男性が農業をすると力が強くなり、女性が農業をすると頭が良くなる」という言い伝えがあることを知り、この言い伝えを日本でも広め、畜産の担い手を増やしたいと思いました。

実際に研修を行い、私のテーマとキーワードから、日本の畜産にはもっと女性が必要だと考えました。

デンマークでは、女性ならではのアイデアや感性が生まれることや、女性の母性本能が働くことなどがあり、女性は畜産に向いていると感じました。さらに、様々な種類のスマート機器や機械の普及率が高いため、女性が男性との力の差を気にせずに仕事ができいていました。デンマークのように女性が活躍できる畜産を日本で実現するためには、女性が働きやすいようにスマート機器や機械をもっと普及させるべきだと思いました。また、日本では女性が育児をするという考え方が一般的ですが、デンマークのように男性も育児をするという考え方を広めることも、女性の畜産への進出向上につながると思いました。

今回の研修成果として、日本の畜産には、

女性がもっと働きやすい環境を作れるように反映すればいいと考えています。そのためには、まず畜産全体のイメージを変えていくが必要だと思います。畜産は力仕事が多くて女性が活躍することが少ないイメージや、きつい、きたないというイメージが強いと考えます。しかし、女性は畜産に向いており、スマート機器や機械が普及してきているおかげで、人への負担が減少されています。このイメージが広がるともっと畜産に興味を持ってもらえると考えます。このような新しい畜産のイメージをもっと広めるためには、今回の研修成果を畜産アンバサダーとしてたくさんの人に伝えたいと思っています。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

授業では学べないようなデンマークの農業の歴史や、デンマークの農業学校、デンマークの農場などについてたくさん知ることができました。

私は酪農を専攻しているので、養豚は少ししか知識はありませんでしたが、デンマークの養豚は驚くことばかりでした。山がたくさんある日本とは違い、平地のデンマークでは農業する土地が63%あるので、放牧豚が主であり、自然に近い飼いでアニマルウェルフェアにもつながることがデンマークの強みだと感じました。また、放牧豚なので運動量が多く、試食したデンマーク産の豚肉はとても赤身が多いことに気付きました。酪農では自動給餌機や自動掃除機などの機械や、遠隔操作ができるスマート機器の活用法を知ることができました。普及させるにはまずはスマート畜産の成功事例を発信し、苦手意識を変えていくことが大切だと考えました。

また、デンマークの学生さんと通訳なしでお話し、初めて海外の方と英語で少しだけコミュニケーションをとることができ、と



ても良い経験になりました。デンマークの畜産を見て、今まで知らなかった有機農業やアニマルウェルフェアについて考えることができました。今回学んだ知識をまずは農芸高校で活用し、いずれは日本の畜産にも影響を与えたいと考えています。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

これから、私は畜産アンバサダーとして、スマート機器の必要性を広めていき、畜産の女性の担い手を増やしていきたいと考えています。ただ、必要性を伝えるだけでなく、機械に苦手意識がある方に、実際に農芸高校でのスマート機器の活用方法や成功事例を伝えて、信頼性を上げたいと思っています。そして、スマート機器を普及させ、畜産のきついというイメージを変え、女性が働きやすい環境を作っていききたいです。また、日本での男女の働くことへの考え方も変えていきたいと考えています。デンマークでは男女関係なく、自分の持っているスキルセットを活かして、ベストを尽くせる仕事を選択していました。

デンマークの農業学校では、他国にインターシップができる機会が多く、実践的な技術を学ぶことができ、農業に就きやすい環境が整っていることや、非農家の子供に興味を持ってもらえるように年に2、3回農場を開放すること、SNSで発信することなども担い手不足を解決する一つだと思いました。日本でも、少しでも動物や農業に興味を持っている人が就農しやすいように、環境を整えるべきだと思いました。今の日本の農業の流れを変えるためには、約3割の女性の数が必要です。女性が農業に参加することで、新たなアイデアや考え方が生まれることや、子豚や子牛の世話ができることなど、活躍できる場面はたくさんあり、農業の流れを変えることができると思います。女性



は育児や家事をしなくてはならないという考え方をなくしていき、男性と協力し合うというデンマークの考え方をもっと広げていきたいと考えています。そして、いずれは畜産の担い手不足を解決していきたいと思っています。



6. 私の夢、これからやりたいこと

この研修に参加する前は、夢がはっきりと決まっていませんでした。ですが、今回参加して「女性の農業従事者を増やしたい」と思うようになりました。そのために、私は将来スマート機器を活用した酪農を実施し、憧れだったチーズをつくる酪農家になりたいと思っています。女性スマート酪農家の事例となることで、女性が働きやすいというイメージを発信し、酪農のイメージを変え、もっとスマート機器を普及させていきたいです。また、スマート畜産やチーズの知識を深めるために、今後は大学に進学したいと考えています。

いずれは今回行くことのできなかった、海外のスマート畜産を直接見て学び、日本の畜産に活かしていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

日本の畜産業の流れを変えるためには、まだまだ農業従事者の数が足りないということを感じました。そのためにも、農業に少しでも興味を持っている人や、動物が好きの人がいたらぜひ積極的に農業を学んでほしいと思っています。

デンマークのように、やりたいことがあったら男女関係なく、自分のベストをつくしてほしいと思います！



畜産アンバサダー
島根県立出雲農林高等学校
動物科学科3年
江口 歩那

1. テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2. キーワード

利益

3. キーワードのつながりと考察

私は、「畜産の担い手」というテーマから研修を受ける前は、デンマークの畜産業や農業は日本と比べて、「畜産業を仕事としたい!」という考えや、日本と同じように親の農場を継ごうとしている若者が多くいると考えていました。

しかし、デンマークでも日本と同じように担い手不足の課題に直面していることが分かりました。そんなデンマークの学生と交流した際には、学生個々が真っ直ぐな将来に向けてのビジョンを広げていたのが、かなり印象に残っています。担い手不足の課題はあるものの、デンマークには畜産を任せられる人材がきちんと育っているという証拠になります。これは、親が子どもの意志を最も尊重しているのが理由だと、デンマークの農家さんの話を聞き知りました。このことから、日本は親が子どもに過干渉であることが、担い手不足の原因の一つとなっているのではと考えるようになりました。このことをもっと広く伝え、昔からの考えを少しずつでも変えていく必要があると感じます。



4. デンマークの研修を通じて考えたこと

私は今回の研修で、様々な面でデンマークの思想や制度を日本に取り入れていくべきだと感じました。まず、性別に関することで男女での差を無くしていくというのがあげられますが、仕事をする上でデンマークでは個人のスキルを重要視しています。ある仕事において、これは男がやるべきだ、女がやるべきだという考えは、新しい発想を妨げてしまい、国全体の魅力向上のチャンスを逃してしまいます。畜産業においても同じであり、デンマークでは女性が主となりながら、自分のスキルを活かし仕事をしていました。最初からできない、やるべきじゃないと考えるのは可能性を狭めるばかりで、広い思考につなげることはできなくなってしまうのです。

男女の差以外にも、セクシャルマイノリティをより認めることも日本に取り入れていくべきだと考えます。デンマークでは同性婚が認められており、家族の在り方も個々それぞれで、とても自由です。畜産の現場においても家族経営が多く、展開して行きやすいということが分かりました。

日本でももっと多様性を認め、日本の可能性を広げることが重要だと感じました。



5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は、畜産業の可能性は無限大なのだとこのことを伝えていきたいと思います。日本人は「食」を通じて幸せを感じるという人が多くいます。私もそのうちの一人であり、美味しいものを食べることで幸せとすることが多いです。ですが食べるだけでなく、

自分が作ったものを「美味しいね」と食べてもらえることでも幸福感を得られます。学校の課題研究でたくさんの人から「美味しい」という声を聞き、この上ないくらいに幸せになりました。

幸せという思いは、生きていく上でなくてはならないものだと思います。幸せは生きる希望であり糧なのです。畜産業という仕事は、そんな食べることで得られる幸せを生み出すことができる、希望にあふれた職業なのだと思います。私は「人の役に立つ仕事に就きたい」という言葉をよく耳にします。その言葉から連想される職業は、目に見えて関わりが分かる医者や看護師、警察官だと、研修をする前の私は考えていました。畜産業や農業は真っ先に浮かぶことはないと思います。ですが、研修を通して、これらの職業の中に畜産や農業というワードが浮かぶようになってほしいと考えるようになりました。

人は、畜産業や農業で生産されるものを食べないと生きていくことができません。さらに、美味しいものを食べることで生きるのに必要な幸福をも作り出すことができます。畜産業というものは「人が生きていくための意味」を生むことができる、とても素晴らしい職業なのです。生きることが嫌になっている人に、生きていくための希望を、幸せを作ってあげることができるかもしれないのです。私は少なからず、畜産は人の役に立ち、人を笑顔にするのにとっても近い職業だと考えています。食事を取ることでも活力も湧いてきます。この活力は新しいものを生み出す思考に役立ち、日本をより発展させることができると信じています。このことから、畜産の可能性は無限大なのだということを伝えていきたいです。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私はこれから畜産業に関わりながら、生産された美味しいお肉や野菜、果物を私の手でより美味しく、食べやすく加工し、地元の良さを伝えていけるようなカフェを経営したいと考えています。

小さい頃から近所の農家さんからもらった

野菜や果物を食べてきましたが、食べるだけで美味しくて幸せを感じていました。農家さんは愛情込めて農産物を生産しておられ、私はそんな農家さんの思いや気持ちをたくさんの人に届けていきたいと思うのです。

私の母は洋菓子店を営んでおり、母は食材の良さを活かして、そのまま食べるのとは違った「美味しい」を作っていました。私は母のようにさらに美味しく加工して、お客様に農家の思いとともに届けていきたいと感じます。その思いは興味を生み、担い手を増やすことにもつながると信じています。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は体力的に厳しかったり、生産が安定しているとは言えません。さらに、これからはアニマルウェルフェアや環境問題にも、より目を向けていかなければならないと思います。ですが、そんな問題に直面したら、海外の仕様など取り入れていくことで解決に向かうことができると考えられます。日本の中だけでなく、世界を見ることが畜産を伸ばしていくことができると思います。それは達成感につながり、生産するものは人々の笑顔につながっていくのです。

そんな希望にあふれた魅力的な畜産を、一緒に盛り上げていきましょう!!





畜産アンバサダー
 広島県立油木高等学校
 産業ビジネス科2年
 庭ひまわり

1. テーマ
 ビジネスとしての畜産（攻めの畜産）

2. キーワード
 機械化

3. キーワードのつながりと考察
 「ビジネスとしての畜産」というテーマで日本の畜産業について考えたとき、私は最初「難しいことを学ぶのだな」と感じていました。現に私は実習がメインの学習スタイルなので、日本の畜産業や海外での畜産業について座学はあまりしてきていません。また繁殖牛のみの学習なので、今回のテーマは養豚であったので、不安で仕方ありませんでした。そして今回の研修で用いた教科書も、初めて自分で注文し、初めて見て学ぶことばかりだったので苦戦しました。研修内容は「もうける畜産」や「攻める畜産」と聞いてはいたものの、実際学ぶとなると感じ方や考え方が人それぞれで違うのだらうなと思っていました。またビジネスという観点も時代によって変容を続けることも多いので、最初は本当に不安で仕方なかったです。



実際に研修をしてみて、まず日本の畜産以外のことが学べ、非常にいい体験になりました。また普段は繁殖牛の飼育しかやっていなかったもので、今回は養豚についての知識も身に付けることができました。私は、広島県の神石高原町の畜産業しか知らなかったもので、国外の畜産業を学べ、大変大きな経験を手に入れました。ビジネスというテーマで活動した本研修、デンマークでは攻める畜産に機械を導入していました。やはり日本の畜産業と違いデンマークは大規模で効率のいい畜産経営を行っていました。

現在日本では、少子高齢化や産業の担い手不足といった課題に直面しています。

そう言った畜産業を持続的に開発していくためには、やはり機械化が必要であると私も感じました。日本の畜産について私は衰退していると考えています。このまま衰退する業種でいいのかと考えたとき、第1次産業である畜産は、衰退させてはいけない産業であると考えています。現在、日本の食料自給率は約40%と他の先進国に比べ低いのが現状であります。日本がこれから先進国と対等にやっていくには、自給率を上げることが非常に重要になってくると思うので、研修で学んだキーワードの「機械化」や有機農業を日本の畜産業に導入していくことが大切です。そのためには、日本の農業に関する法規基盤が拡充することが急務であると考えます。また私にできることとして、現在学校で飼育している繁殖和牛の管理を充実させ、高値で取引させたいと思います。また実習を主にするだけでなく、座学にも力をいれていきたいと思っています。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと
 私は最初この研修に対して不安でいっぱいでした。「他の高校の人とうまく連携していけるのか?」「専門知識が乏しいので研修内容についていけるか?」「英語が苦手なのでうまくコミュニケーションがとれるのか?」などです。実際に研修が進む中で、つらいこともたくさんありましたが、何とか研修を終えることができたのです。特にデンマークの畜産を学べたことは、これからの自身の進路に大きく影響してくると思います。私が今実習をしている環境よりも機械化が進んでおり、先進的な攻めの畜産をしていることは本当に凄かったです。そうした機械を動かすにも、風力発電などのエネルギー利用をしていることは日本も見習うべきだと思います。

また現地の高校生と実際に話をしてみて、自分の英語力のなさを痛感しました。実際に話してみると、英語の授業みたいに優しくなく、ネイティブな英語に圧倒されました。本当に質問してみたいことの2割も発揮できなかった



太陽光を利用して動くカルティベーション機械

たと思います。これからは英語の習得にも力を入れていきたいです。本当に通訳のJさんには感謝しかありません。私は研修で多くの人に支えられていることを改めて感じました。研修のきっかけをくれた学校の先生、プロジェクトを円滑に進めていただいた皆戸さん、石原さん、研修先であるデンマーク農業学校の先生や学生さん、メンターとしてサポートしていただいた、春恵さん、遥さん、そして通訳のJさん皆さんに感謝し、これから私が後輩に畜産の魅力についてPRしていきたいです。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、3つのことを行いたいと思います。1つ目は、地域の小中学校に畜産業の魅力を伝えるために、移動動物園や講習会を開催することです。2つ目は、ICTを活用し多くの畜産業と連携していきたいです。3つ目は、自分自身が興味を持った畜産経営をしている農家さんを視察したいと思います。なぜそういった考えに至ったかというと、日本の畜産は「きたない」「くさい」「苦しい」などネガティブなイメージばかりだと思います。そういった考えは幼いころに定着していると思うので、幼いころに畜産に対するネガティブなイメージをポジティブなイメージに変換する必要があると思うので、そのために移動動物園にあわせて講習会を実施したいです。また畜産農家さんは個人経営という観点が強く、同業者に対するライバル意識が強いのではないかと思います。なのでICTを活用し、気軽に問題共有できる場所が必要だと思います。3つ目は本研修で自分自身の畜産に関する知識が乏しいことを実感したので、先駆的な実例を知るために農家視察を行いたいと思います。そういった行動ができると、まず私自身の気持ちの方が今より、より深いものになると思います。また自分が変わると、自分の取り巻く環境が変わると思います。環境が変わると地域が変わり、地域が変わると地域産業が変わると思うので、このムーブメントを大きく持続的に行っていきたいです。また本研修で、デンマークは本当に女性の活躍が多いことを知りました。畜産は力仕事だから男の仕事という考えが、過疎地域には根付いていると思います。そういった固定概念を打ち払うため、私が変わっていくことが非常に重要だと思います。そうすることで、男性にはない感性から畜産業にアプローチすることができるとい

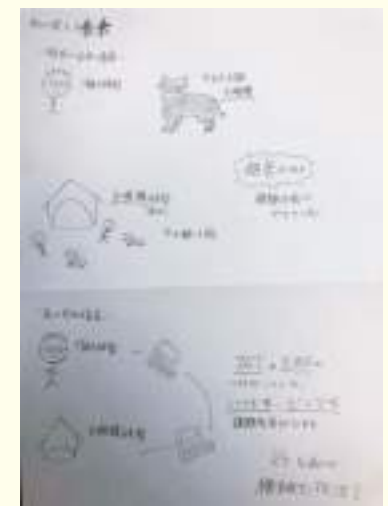
す。新しいことを快く受け入れ実践していくことこそ、産業の持続化につながると考えるので、女性、男性といったボーダーで畜産を行うのではなく、みんなで行う畜産業を目指していきたいです。そうしたことがSDGsなどにも寄与するのではないのでしょうか?

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は、研修に参加する前は、畜産関係の仕事で今住んでいる環境の近くであればどんな仕事でもいいかな?と考えていました。しかし研修に参加し、アニマルウェルフェアやビジネスとしての畜産という考え方を学び、動物園の飼育員になりたいと思いました。私が感じた畜産、動物の魅力を今度はこれからの社会を担う子供たちに伝えていきたいです。残りの高校生活では3つのことを柱に活動したいです。1つ目は学校で飼育している繁殖和牛の管理を徹底し、いい和牛を飼育し、これからの畜産業を私なりに盛り上げていきたいです。2つ目は繁殖和牛だけでなく、ほかの動物に対する知識を習得することです。3つ目は興味のあること以外の学習にも力を入れることです。そうすることにより、自身の進路実現につなげていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業と聞いて、皆さんは最初に何を想像しますか?「きたない」「くさい」「苦しい」などネガティブなイメージばかりではありませんか?しかし実際に畜産をやってみると、牛のかわいい表情や行動、出産の偉大さ、出荷する際の悲しみなど多くの感情があります。知れば知るほど畜産の魅力にハマっていくと思います。あとは少しの勇気を振り絞るだけ!その1歩で未来が変わります。皆さんの畜産の見方が変わるように願って、私も畜産業に従事します!





畜産アンバサダー

愛媛県立大洲農業高等学校
生産科学科3年
森岡 亜希

1. テーマ

畜産の担い手（農家を育む政策）

2. キーワード

農業とかかわりのない人へ

3. キーワードのつながりと考察

「農業とかかわりのない人へ」というキーワードで、「畜産の担い手」について考えてみました。

まず日本では、畜産だけでなく農業全体のイメージとして、3Kという言葉で表現されるように、農業に対する意識は社会全体として低いと感じていました。意識がないから知ろうとしない、かかわらない、理解を深めない、そのため悪いイメージが先行し、結果として従事者の高齢化や担い手不足につながっていると考えていました。対してデンマークでは、農業・畜産業の従事者がとても多いのではないかと考えていました。

実際に研修をしてみると、デンマークでは全体の約3%しか農業従事者がおらず、どの国も担い手不足は変わらないことが分かりました。しかし、デンマークでは消費者が農業や畜産業に対して高い関心を持っています。消費者は買い物をする際、どこの農場で作られたのか、オーガニック製品であるかなどを意識して選んで買っています。また、気軽にいつでも牧場に行くことができ、生産現場を見学することもできます。この結果から、農業従事者の割合は少ないが、農業や畜産業に関心の薄い国民は少なく、全体の意識が高いと感じ、日本においても畜産業界と消費者の壁を壊すことが大切だと考えました。

デンマークの畜産業は政府と密接にかかわっており、支援金など具体的な取組を積極的に学生世代に発信していることが分かりました。日本でも様々な補助制度はありますが、

農業高校生でさえその存在を知らないことが多く、開業資金や経営に不安を感じることから、担い手不足につながっているのではないかと思います。学校教育やSNS等を積極的に活用した情報発信を行い、畜産業に対する政策の普及や、畜産業全体の魅力発信をする必要性を感じます。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマーク農業学校の学生さんとお話させていただいたときに、「農業が好きか？」と質問すると、デンマークの学生さんは皆、「好きだよ！」と言っていました。デンマークの人々は、自分の意見をしっかり持っており、それをしっかり言えることが意識の向上につながっているのだと感じました。さらに、デンマークでは消費者に加えて政府の目も厳しく、年に数回、アニマルウェルフェアを実行できているかの調査を実施しているとのこと。しかし、ある農家は「ゲームにルールがあるようなもの」と言っており、日本とは異なる新しい考え方を知ることができ、日本も政府の関与や支援金などを大々的にアピールしたほうが良いのではと考えました。

女性が活躍できる取組も先進的であり、分娩には女性の方が適していると考えの方が多く、また、男性の育児休暇取得率も高く、デンマークでは仕事における女性と男性の壁が薄くなっているという印象を受けました。機械化も進んでおり、自動でえさを与えたり、除糞をする機械もありました。もし、日本でも女性の担い手増加や機械化ができれば、これまでの畜産業の概念を覆す革新的な経営が多方面に広がるのではないかと考えました。



5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとしての活動を通じて、「畜産は人々の身近にある」ということを広めたいです。私が通っている学校には畜産科がありませんが、今回の研修に参加し、日本だけでなく、海外の畜産についても知ることができました。一般的には、畜産と縁がなく生活をしている人が多く、知識がない分、よく分からないという人が多いと思います。しかし、気づかない・考えないだけで、周りには畜産が身近に溢れているということを広めたいです。普段食べているお肉がどこで作られたのか、畜産動物が食べているものはどのように生産されているのかなど、様々な角度から畜産を見ることができると、いうことを伝えたいです。

私は、小学生や中学生を対象にした畜産アンバサダー活動を進めたいと考えており、まずは、動物と触れ合うこと、成長する様子など、畜産の奥深い面白さを広めていきたいと考えています。これらの活動を通して、若い世代が、より畜産業に対する理解を深めることにつながり、知識を持ったよき消費者になり、次世代へと受け継がれる循環が生まれると考えています。活動に参加してくれた子どもから親世代へも伝わり、家族の会話の中で畜産に触れるところまで目指したいと思います。畜産業に対するよき理解者が増えることで、畜産業を志す若年層世代も増加し、現代の発信力も重なり、畜産業の活性化につながるのではないかと考えています。

女性が活躍する理想の畜産業は、キラキラしていて、表情が明るかったらいいなと思いま



す。女性だからという先入観にとらわれず、自分で選んだ「畜産」という道を通る気持ちを持った人にあふれた畜産業になるとよいと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は数えきれないほどあります。これまでは動物園の飼育員を目指していましたが、今回の研修に参加してさらに夢が広がり、畜産業に従事して産業の活性化に貢献することも視野に入れています。

リモート研修を通して、日本と全く異なる畜産業の在り方や、学生・消費者の意識の違いを感じることができました。しかし、やはり実際にこの目で見てみたいとも強く思いました。新型コロナウイルスが収束したら、世界の農業・畜産業を学びたいと考えています。将来的には、畜産や動物に関わる仕事に従事し、様々な方々に畜産の魅力を伝え続けていきたいと思っています。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私は、今回この研修で出会った全国の高校生と、短い間ですが、オンラインで様々な意見を交わしました。皆さんとても可愛く、心が強く、自分の意見をしっかり言える素敵な方々でした。今回の研修で出会ったすべての皆様、本当にありがとうございました。私の家は非農家で、畜産業には全くかわりのない生活を送ってきましたが、研修を通して新しい発見ばかりで、本当に勉強になりました。世界を見渡し、日本の畜産業との違いを学ぶことはすごく楽しいので、機会があったら目を向けてみてください。



畜産アンバサダー

熊本県立菊池農業高等学校
畜産科学科3年
林 真那

1. テーマ

家畜や自然のための畜産
(アニマルウェルフェア)

2. キーワード

ストレス (治療・暑熱・環境改善)

3. キーワードのつながりと考察

「家畜や自然のための畜産 (アニマルウェルフェア)」というテーマで、「ストレス (治療・暑熱・環境改善)」について考えた時、最初は自分の足元である本校の家畜のことが頭にあった。専攻学習で乳牛のストレスを軽減し、生産性向上を図るため飼養管理を見直すプロジェクト活動を行っていた。日本有数の猛暑地である熊本県の菊池では、その中でも暑熱対策が最大の課題だった。そのため、気候的な面での対策を含めて他地域・他国の飼養管理を学ぶことで、本地域・本国に取り入れられる良い環境改善方法はないか探そうと考えていた。加えて将来携わりたい獣医療の観点も踏まえ、アニマルウェルフェアの基本である5つの自由を念頭に、家畜のストレスをいかに減らすかを探ろうと思った。

アニマルウェルフェアに関する飼養管理での違いは、社会全体的な家畜への考え方だと感じた。デンマークで厳しい規制の下、家畜の自由を尊重する飼養管理がされているのは、ヨーロッパの畜産文化が日本よりも長いため進んでいるからだ。また、ストレスフリーで育った畜産物の質が良く、家畜の幸せが巡り巡って自分たちの幸せにもつながっているこ

との認識が、国全体にあるからだと考える。ニーズがあるからこそ厳しく高水準になる。そしてその実現を支える制度も充実する。オーガニックが多いことや、農家への支援制度が整っていることも、家畜に動物本来の自然な生き方をさせながら効率よく高品質な畜産物を生産することにつながっている。

日本がデンマークと決定的に違うのは、地理的環境である。デンマークは国土全体がほぼ平地であり、その62%が農地であるため、家畜の行動に十分なスペースを確保できる。一方の日本は国土の70%近くが山地であり、狭い土地で集約的農業にならざるを得ず、デンマークのような土地利用型の飼養管理をすぐに実現するのは難しい。そこで、スペース確保以外で、家畜にストレスを与える機会を減らすことを考える。痛みを与える機会 (除角・去勢・切歯・断尾・断嘴など) や、拘束時間などを各農場に合ったかたちで工夫し、家畜を自然体で飼養するよう努める。もちろん生産性とのバランスは考えなければならない。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

「畜産業は奥が深い、そしてまだまだ伸びしろがある」今回の研修で私はそう思った。養豚だけでなく、酪農・作物・流通・環境・社会など幅広く学べたことは、畜産業と農業を広い視野で理解することにつながった。各分野は互いに強いつながりがあり、一つを改善することは他を改善することにつながる。スマート農業といわれるように近年飛躍的に成長している農業だが、その中でも畜産業だけは「汚い・きつい・くさい」の3Kイメージが拭い切れない面がある。しかし、今回日本や世界の畜産業を広く見つめたことで改めて良さや努力、改善点を発見し、人々にも理解を広められる可能性があると考えた。何より、

研修に携わった全員のキラキラした表情が印象に残った。アンバサダー、Dalum 農業学校の先生や学生、農家の方々、メンターのお二人、他……。それぞれが柔軟な考えを持ち、生き生きと自分の意見を述べていた。印象に残ったのは「Farming makes women smart and men strong」という言葉である。それぞれが自分の強みを生かすことが大切なのだ。今後も変化し続ける世の中、畜産業をさらに発展させていくためには、当事者である私たちがその楽しさ、良さを知っていなければならない。そして地域を、国境を越えてネットワークを築き、協力し学んでいかなければならない。これから生きていく上で大切なことを教わった気がする。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

日本はデンマークと地理的条件が大きく異なるため、デンマークの飼養管理方法をそのまま日本に取り入れることは困難である。日本に合ったかたちで少しずつ飼育環境を変えていくために、まずはまだ認知度の低いアニマルウェルフェアの心を広め、人々のマインドセットから始めることが重要だ。デンマークの飼養管理で参考になる部分を情報発信するとともに、家畜のストレス軽減が生産性向上にもつながることを実証しアピールする。プロジェクト活動や広報誌で他農高や農家にも伝えられる。農業関係にとどまらず幅広く発信することで、国民全体の認知・考え方に働きかけていきたい。

アニマルウェルフェアの認知度が高まれば、家畜にとって快適な環境に向けて農家・行政・消費者など社会全体が一丸となって大きく動けるだろうと考えている。個々の努力はもちろん大切だが、それだけでは不足する面を補うために、多方面での相互理解と協力が不可欠である。デンマークが「世界で2番目に幸福な国」と呼ばれているのは、農家・行政・消費者が互いに情報共有や協力・支援をしているからだと考える。そこでは、人間のみならず家畜の幸福も同等だと思う。デンマークのような相互協力体制が整えば、日本の畜産業も、家畜のストレス軽減と生産性向上をどちらも網羅できる環境づくりをすすめられるだろうと考える。

畜産業では生き物が相手だからこそ、細やかな気配りや臨機応変な対応が求められる。古来より出産・育児の主となってきた女性は、子供を健康に育てるためその能力に秀でてい

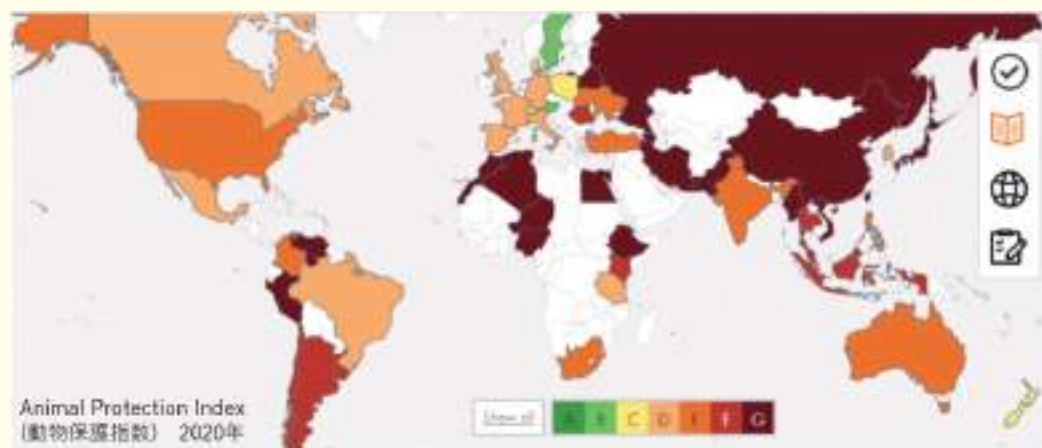
る。これは家畜の飼養管理や経営において普段から家畜を思いやり、些細な異常を見逃さないこと、有事の際はそれを防ぐため冷静で迅速に対応することにつながると思う。デンマークの農家も、家畜の分娩や仔の管理には女性が向いていると話していた。家畜の5つの自由に沿う環境を実現するためには、女性ならではの細やかさや対応力、芯の強さを大いに生かすべきだと考える。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私は産業獣医師を目指している。高校で家畜の一生に携わる中、限られた短い命であってもその命の可能性を最大限に発揮させたいと思うようになった。今回の研修成果を日本の畜産業に反映させ、日本に合ったかたちで、家畜が快適に過ごせる環境を広めていくことが大切だと考える。家畜が心身ともに健康で快適に生活できれば、生産性や質も向上し、経営にもプラスになる。その中で、私は獣医師として家畜の物言わぬ訴えを正確に農家に届け、農家の経営と思いにと寄り添いながら最善の方法を共に探していきたいと思っている。家畜と人間の懸け橋となり、どちらも同じ重さの命であることを念頭に行動していきたい。私の姿が農業高校から獣医師を目指す後輩たちの道標になればと思う。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業の一番の魅力は、私たちが心を込めて接すれば家畜はそれに応えてくれることだと思う。生産面でもそうだが精神的な面でも、かけた愛情の分だけ家畜は返してくれる。裏表のない素直な家畜と真正面に向き合い、癒されながら生きていける畜産業が私は大好きだ。古くから人間の生活を支えてきた畜産業のこの素晴らしい姿を、これからも多くの人々と共に守り発展させていきたい。





畜産アンバサダー

熊本県立南稜高校
総合農業科 2年
黒木 樹里

1. テーマ

女性の活躍できる畜産（ワークライフバランス）

2. キーワード

男女平等

3. キーワードのつながりと考察

「女性の活躍できる畜産」というテーマで、「男女平等」について考えたとき、日本では女性よりも男性の方が農業に携わりたいと考える人が多いというイメージがありました。実際、私が通っている熊本県立南稜高等学校の総合農業科動物コースでは、2・3年生とも男子生徒が9割を占めています。私は、女子生徒が動物コースに進まない理由として、「きつい」、「汚い」、「危険」の「農業の3K」が関係しているのではないかと思います。現在、私は科目「総合実習」「畜産」において、学校附属の農場で乳牛・肉牛の管理に取り組んでいます。特に給餌や搾乳、哺乳、除糞などの基本的な内容は、実習で毎回取り組んでおり、できることが増え、自信を持って行えるようになりました。しかし、飼料や資材、糞などはとても重く、牛も力が強いため、多くの労力を必要とします。こうしたことから、畜産は体力的に有利な男性の方にとってはハードルが低いため取り組みやすく、逆に女性には敬遠されやすいのではないかと考えました。

デンマークの養豚場では、親豚の分娩時に女性従業員が活躍する姿が見られました。「きつい」「汚い」「危険」が伴う養豚業において、親豚を見守り、子豚を無事に育てようとする女性の熱意に心を動かされました。しかし、これは、従業員が「女性だから」できたことではないと考えます。性別で従業員の役割を変えるのではなく、一人ひとりの従業員が自分の持っているスキルを活かして好きな仕事ができていることが、本当の「男女平等」なのだと感じました。これらのことから私は、デンマークのように、日本でも一人ひとりが性別にとらわれず、やりたいことにのびのびと取り組める環境を作っていけたらいいと思

いました。

日本では、飼養戸数が減少する一方で規模拡大が進んでいます。その一方で、小規模な家族経営も現在の日本の食料生産を支えています。こうした日本の特徴を守り生かすことは大切です。しかし、私が今回の研修でデンマークの畜産について初めて学んだように、畜産を志す多くの人が世界の畜産の状況を知り、よいところを取り入れる視点を持つことが必要です。授業や研修の機会を活かし、交流を深めることで日本の農業の課題を発見し、改善していくことができると考えます。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

今回の研修を通して、特に印象に残ったことが2つあります。まず、デンマークの養豚業についてです。性別にとられることなく、自分のスキルを活かして働く姿に憧れを持ちました。日本では、畜産は男性の仕事であるというイメージがいまだに根強く残っています。デンマークで生き生きと活躍する女性農業者の姿は新鮮で、格好よく感じました。一方で、体力的に不利な女性には「きつい」「汚い」「危険」な畜産はハードルが高いのが現状であり、改善が必要です。

次に、デンマークでのアニマルウェルフェアに対する意識の高さです。農業経営者だけでなく、消費者の意識も高く、アニマルウェルフェアに配慮されて生産された畜産物を求める人が多くいました。日本では、アニマルウェルフェアへの意識が高いとはいえない状況だと考えます。様々な取り組みを周知していくことが必要だと思いました。

私はこれまで海外の農業について知る機会がなく、研修で初めて知ることばかりでした。今後は、私が今回学んだり考えたりしたことについて、同級生や後輩、家族、友人に伝えていきたいと思いました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

日本の畜産は、これまで以上にアニマルウェルフェアに配慮して家畜を飼育することが必要だと思いました。なぜなら、デンマークと日本の畜産を比較したとき、一番の大きな違いがアニマルウェルフェアの考え方だと感じたからです。日本では、約8割の養豚場でストール飼育が行われています。種付け後、親豚は妊娠ストールへ移動し、分娩前には分娩



畜産の情報－海外情報－デンマーク・オランダの養豚生産の状況
～アニマルウェルフェア規制強化への対応～ 2013年9月（alic.go.jp）から引用

ストールへ移動します。しかし、このストールはとても狭く方向転換すらもできません。もちろん、生まれたばかりの子豚を保護するためには効果的な設備です。しかし親豚の快適性を考えると、改善すべき点はあるのではないかと感じました。一方、デンマークでは放牧による養豚を経営している農家が多くいます。母豚が一頭ずつ自分の専用エリアを持っているため自由に動きまわることができ、豚の快適性が第一に考えられており、アニマルウェルフェアに対する思いの強さのうかがい知ることができました。日本では、家畜防疫の観点や効率性から、放牧を行っている農家はわずか数戸です。しかし、家畜の快適性を模索することで生産者だけでなく消費者の考え方が少しずつ変わっていくと思います。

また、畜産業の中で女性が活躍するためには、スマート農業化が必要不可欠です。体力や力の強さなど体格面で不利な女性が無理なく働けるということは、畜産業に携わる多くの人が無理なく働けるということだと思います。機械化や自動化により、これまでよりも作業が楽になれば、女性が活躍できる幅が広がると考えます。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、畜産の仕事に就き、多くの人に畜産の魅力を伝えることです。畜産の魅力とは、かわいい牛が、世話をすればするほど懐いてくれたり、生まれてから一生懸命に成長していく姿を見たりできることだと感じています。また、温かい牛乳は命の大切さを感じさせてくれるだけでなく、栄養価も高いため様々な乳製品に加工することもできます。私は動物コースに所属し、主に牛の管理につい

て学習しています。酪農に強い関心を持っているため、高校卒業後は、大学の農学部に進学し、より専門的な知識を身に付けたいと考えています。

今、日本の畜産には様々な課題があります。少子高齢化による担い手不足や、食料自給率の低下、耕作放棄地の拡大など多岐にわたります。この現状を変えていくためにも、研修で学んだことや高校・大学での学びを多くの人に発信し、少しでも畜産の魅力を感じてもらいたいと思います。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

動物は好きですか？牛に触ったことがありますか？畜産には、「きつい」、「汚い」、「危険」などの「農業の3K」のイメージを持つ人が多いと思います。しかし、実際に家畜の世話をすることで、自然と関わりながら命の大切さに気付くことができます。また、コミュニケーションが苦手でも、仲間と共に実習をすることで社会性を身に付けることができます。

ぜひ、これからの畜産業と一緒につくっていきましょう！





畜産アンバサダー

沖縄県立中部農林高等学校
熱帯資源科2年
石嶺心菜

1. テーマ

家畜や自然のための畜産
(アニマルウェルフェア)

2. キーワード

命

3. キーワードのつながりと考察

「家畜や自然のための畜産」というテーマで、アニマルウェルフェアについて考えたとき、最初はアニマルウェルフェアという言葉を自分自身聞いたことがなかったのですが、今回の研修で初めて知ることができました。

アニマルウェルフェアとは、動物を「感受性のある存在」と捉え、家畜にとってストレスや苦痛の少ない飼育環境を目指す考えのことで、主に欧米を中心に広がっていて、動物に対してすごいなと思いました。

日本に多い小規模農家さんでも、牛舎、豚舎の設備を整えたり、家畜が過ごしやすい環境で飼育することは可能ではないかと考えました。動物も、短い大切な命なので、できるだけストレスを少なく健康な生活を送れる方法、対策を考えるということで「命」というキーワードにしました。



日本の畜産には、アニマルウェルフェアを広めて、動物にストレスを少なく、健康な生活を送れる方法を考えていく必要があると思います。

4. デンマークの研修を通じて考えたこと

今回の研修に参加して、自分は元々動物が大好きで、その中でも畜産動物が大好きなのですが、私の学校では畜産動物のことについて学ぶ機会が少なく、デンマーク研修を通してたくさんのことを学ぶことができました。デンマークの Dalum 学校には、どのような学生がいるのか、良い農家になるにはどんなことが必要なのか、デンマークは人口の3%しか農業をやっている人がいないなど、養豚では、国内で屠畜するよりも海外で屠畜する方が高く売れるため、海外で屠畜する人が現在増えてきているなどを知ることができました。また、豚にできるだけストレスを与えないように飼育するにはどのようなことをしたら良いのか、牛にできるだけストレスを与えないように飼育するにはどのようなことをしたら良いのかなどを、考えることができました。

また、デンマークでは有機農業（オーガニック）がお店で多く売られていて、有機農業の法律では人工の殺虫剤を使ってはいけなくて、自然のものは良いなど、体に良いオーガニック食品が多く売られているのは健康のことをしっかり考えていてすごいなと思いました。

5. これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいこと

これから畜産アンバサダーとして、日本に広めていきたいことは、「畜産の仕事は動物と触れ合えて女性も活躍できるととても楽しい仕事」ということを伝えたいです。

今の日本は、女性は男性に比べて力が小さく、体力的にも女性が畜産業に就くことが少ないことや、給料の差があります。その一方で、デンマークでは男女平等で給料の差もなく、デンマークではアニマルウェルフェアを重視



していて、人にも動物にもとても優しい国で、日本はまだまだアニマルウェルフェアという言葉はあまり知られていなく、アニマルウェルフェアの考え方を広めていきたいなと思いました。

それができると、日本の畜産業は、男性も、育児を経験している女性も、力、体力的にも差がなく女性も就きやすい仕事になり、これからは女性も増えていき、日本の畜産業は良くなっていくのではないかと思います。女性が活躍する理想の畜産業は、性別関係なく平等にして意見をきちんと言い、その意見を平等に取り入れることだと思います。多くの女性が畜産業に興味を持ち活躍できればいいなと思います。

6. 私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、獣医師になることです。その中でも、犬や猫などの小動物臨床獣医師ではなく、乳牛をはじめ、肉牛、馬、豚、鶏などの診療と病気の予防、飼養衛生管理などをする家畜動物の産業動物臨床獣医師になることです。

私が獣医師になりたいと思った理由は、中学生の頃から飼っているヤギが亡くなってしまった時に、自分は何もすることができず、将来自分が獣医師になって助けることができたらなと思ったのと、他にも病気や怪我をしたたくさんの動物の命を助けたいと思ったからです。

これからは、将来の夢を叶えるために勉強など頑張っていきたいです。

7. 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

私はこれまで、「女性だから」や「力も無いから」など、周囲からの心配や他の進路選択のアドバイスを提案されたりもしました。しかし、できる、できないではなく動物が好きで将来動物関係の仕事に就きたい一心でここまで進むことができ、この気持ちは以前より強いものとなっています。

周囲からの気遣いやアドバイスも、とても大切です。しかし、動物が好きで、この気持ちを将来の職業にしたいと考えている人がいたら、夢をあきらめず自分の気持ちに正直に突き進んでほしいなと思います。





メンター

左草ブラウンスイス牧場
藤田 春恵

1. はじめに

「人魚姫」で有名なアンデルセンが生まれた国デンマークについて、私は本事業に参加するまで殆ど知識がなく、かろうじて酪農や養豚が盛んだということを認識している程度だった。

本事業にメンターとして参加させていただき、得た情報の中から「デンマークの酪農」「働く女性を支える社会の仕組み」について綴り報告とする。

2. デンマークの酪農

(1) デンマーク畜産の背景

デンマークの国土面積は 431 万 ha（北海道の約半分）、人口は約 550 万人（日本の約 1/20）で、農地面積は 259 万 ha と国土の約 6 割を占め、その殆どが平坦な土地だ。高緯度ながら、暖流の影響で、冬でもそれほど寒くならず、農業に適した気候風土である。家族経営が基本で、農家一戸当たりの平均農地面積は約 70ha、EU の中でも大きい数字だ。恵まれた土地条件を活かして栽培される麦、トウモロコシなどの穀物を家畜の飼料にして畜産業が盛んに行われている。

デンマーク畜産の特徴として厳しいアニマルウェルフェア（AW）基準、オーガニック生産があげられるが、これらは国内における AW 遵守のチェック機関やオーガニックマーケットの充実によって支えられており、農家もまた消費者や政府のニーズに依っている。AW やオーガニックはデンマーク産農畜産物のイメージアップに貢献している。

デンマークで生産される農畜産物と加工品の三分の二は海外に輸出されるが、世界市場が納得する品質を維持しているのは、EU 内でも 1、2 を争う厳しい衛生基準と情報の透明化である。農地面積に限りのあるデンマーク畜産の戦略は、コストを下げて効率良くというよりは、手間ひまかけた生産物に、オーガニックや高品質といった付加価値を乗せる「差別化」であると感じた。

1800 年代、農家は飼料栽培から家畜飼養まで一貫して行っていたが、現在は機械化や耕種農家と畜産農家の分業化が進み、より大規模で生産に特化した経営体が増えている反

面、全体の農家戸数と農業従事者数は著しく減少している。これは日本とも共通の解決しなければならない喫緊の課題である。

(2) デンマーク酪農の特徴

①生産と経営

デンマークは穀物の生産基盤が充実しているが、天気が安定せず粗飼料を乾草で確保することが難しい。そのため、殆どの酪農家はサイレージ給与型の管理である。平均乳量は 10,959kg/年（補正乳量）と世界トップクラスで、このようなスーパーカウ牛群を維持するには高い飼養管理技術やクロスブリーディングの実施、経営ノウハウなどが必要だが、多くの農家は技術や経営について指導してくれる民間のアドバイザーサービスを有料で利用している。

②酪農・乳業組合

デンマーク酪農と言えば組合である。歴史的には 1880 年前半に始まった「一緒にまとめて買えば安くなる」という発想を起点とした小さな農家組合が合併を繰り返しながら拡大し、1970 年にデンマーク最大の酪農・乳業組合「MD フーズ」が誕生した。そして 2000 年、MD フーズは国境を越えてスウェーデン最大手の乳業組合アーラフーズと統合し、現在の「アーラフーズ」は EU7 各国、11,200 戸の酪農家をオーナーとする世界第 7 位の乳業組合である。この存在によってデンマーク酪農は生産から販売までの一体的なビジネスが可能になっている。組合の原則は "One man, one vote"、出荷乳量が 100 kg でも 10,000kg でも全員が 1 人 1 票を持っているという意味で、運営組織の役員や理事、議員などの選出には組合員の意思が反映される。

農家の 75% がアーラフーズに生乳を出荷しており、用途に関わらず全量同じ価格で取り引きされる。オーガニックミルクにはプレミアム価格が支払われ、同メーカーの商品ながら異なるブランドとロゴで差別化して販売される。

③環境と農地

デンマーク畜産は、環境にも非常に配慮している。近年、牛から排出される二酸化炭素やメタンガスが環境に負荷を与えていると話題になっているが、デンマークの酪農家には、農地 1ha あたり乳牛飼養頭数 1.4 頭の制限や糞尿貯蔵施設の整備が義務付けられている。また糞尿を利用したバイオガスプラントから熱や電力を生産、利用する取組も進んでいる。デンマークで農地を取得するためには、「耕

作」と「居住」の義務が課せられており、これが、家族経営が主流の理由である。また、一定規模以上の農家になるためには、専門の学校で経験や知識を積んだ後資格を取得しなければならない等、農地は貴重な資源財産として位置づけられ政府が厳しく管理している。

3. 働く女性を支える社会の仕組み

(1) 女性の社会進出の歴史

今日デンマークが、男女平等を達成できるようになった背景には、1960 年代に始まった女性の労働市場への参画がある。かつてはデンマークも日本に近い、男は外で働き、女は家を守るという考えが主流だったという。しかし戦後の好景気により多くの労働力が必要になると、女性も外へ出て働くようになり、それまで女性の役割とされていた「家を守る」存在が必要になってきた。そこでデンマークは、育児、教育、介護というような福祉的役割を国家が担い、女性にも社会経済を支える「資源＝人材」として活躍してもらおうという方向にシフトしたのである。

(2) 充実した社会保障

デンマークでは、女性の政治参画や企業における上級職の割合が多く、これが女性全体の所得の底上げにつながっているが、他にも労働組合による所得保障や政府からの失業時の金銭的、あるいは再就職に向けての手厚いサポートが充実しているため、男女の所得格差は少ない。誰もが自力で生活基盤を持てることに加え、50% にもなる高い所得税が社会保障として国民に還元されているので、女性も自信を持って仕事と家庭を両立することができている。

出産と子育てについては男女其々に国が定めた産休・育休期間（義務）が設けられており、その間の給与は 100% 会社から支払われ、その後最大 32 週まで取れる育休期間の給与保障は政府が受け持っている。義務期間以降の育休は父母のどちらが取っても良く、夫婦の都合によって振り分けることが可能である。子供への福祉も充実している。デンマークの法律には「生後 6 か月から義務教育開始までのすべての子供は、保育保障を受ける権利がある」というものがあり、また「それが実施されているかを管理するのは自治体の義務」とも謳われている。つまり待機児童がいないということだ。子を持つ女性にとってこのような制度の充実は、安心して働くための重要な要素である。

(3) 畜産業界における女性の存在

畜産分野での女性の役割については、本研修ではオンラインによる農家の女性へのインタビューで知ることができた。動物を相手にする畜産業では、特に分娩や哺育の部分で女性ならではの能力や特性が活かされるという。また、デンマークの古い言い伝えに「農業をすると女性は賢くなり、男性は強くなる」という言葉があるそうだが、男女が同じ仕事をこなすことができるというよりは、求められる場所で一人ひとりが得意な能力を発揮するという、もはや性差を超えた考え方がベースにあると感じた。

年中ほぼ休みのない畜産業だが、仕事や家庭について家族でよく話し合いながら役割分担し、より良い在り方をデザインしようとする姿勢が、独立性を持ちつつ周囲と上手に付き合うデンマークスタイルなのだろう。

4. おわりに

本事業にメンターとして関わらせていただくのも今回で 3 回目となり、今年も優秀な全国の未来の畜産女子に出会うことができた。畜産を志す彼女たちの目に、デンマークという国はどう映っただろうか。おそらく多くの高校生にとって、初めて見聞したりアルな畜産の世界だったと思う。もしかしたら日本の畜産や女性の社会進出は、デンマークに比べて遅れていると感じた人もいるかもしれない。確かにある部分ではそうだし、また違う面では日本が優れている点も沢山ある。

この研修に参加することによって得た彼女たちの最大のスキルは、大きな視野と、比較し、そして考察する力だと私は考える。広い世界を見て多くの気づきを得た彼女たちは、今後日本の畜産について益々興味を持ち、学びを深め、場合によっては現実を見て残念な気持ちになる時もあるかもしれない。しかし、必ず日本の畜産業を照らす明るいアイデアを出してくれるはずだ。

コロナ渦により現地での研修は叶わなかったが、オンラインでも現地研修に全く遜色のない高レベルなプログラムを実現してくれた国際農業者交流協会スタッフの尽力、そして事業推進委員や JRA、JRL 他、多くの事業関係者のご協力により成し得た素晴らしい人材育成事業を今回も無事に終えられたことに感謝しつつ、次世代に日本の畜産をつなぐため、継続して本事業が実施されることを期待したい。



メンター

曾我の屋農興株式会社
野上 遥

1. はじめに

「未来の畜産女子育成プロジェクト」を知ったのは、コロナ禍になる前にメンターへの就任を打診された時だった。

私は高校生の時に、将来の進路選択で畜産業に興味を持ち、大学に進学してから初めて畜産について学んだ。しかし、今回の研修生は、将来の進路について明確な指針を見つけない人が多い中、既に中学生の時に農業分野の道へ進むことを視野に入れ、専門的に学ぼうと農業高校に進んだ高校生が対象だ。さらに、その中でも敢えて対象を女子生徒に限っていて、面白い試みだと思った。

今回の研修先は農業先進国といわれるデンマークだ。社会保障・福祉が充実し、環境保護にも熱心な国であると同時に、高品質な農産物の輸出国である。当初は実際に現地に渡航し、デンマークの気候や社会環境、現地の方々の反応を肌で感じながらの研修となる予定であった。

2. オンライン研修の実施

2019 年末に中国湖北省武漢市で発生が確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が、世界的に感染拡大し、ついには「パンデミック」が宣言された。令和2年度に実施されるはずだった研修事業は見送りとなり、今回1年遅れでオンライン研修とカタチを変えて実施されるに至った。

オンライン研修は、対面での研修とは違う点が多々あった。全員が同じ画面を見ることが、ディスカッションが難しい状況になること、現地に直接行けないこと、研修生が直接顔を合わせる機会がないこと。しかし、全国各地の研修生が、自宅や学校にしながら、日中は普段どおりの生活を送りつつ、夕方からデンマークと直接オンラインで繋ぎ講義を受けた。講義の後に気になった点を、翌日の講義

までに調べることもできた。講義をオンライン上で見返すこともできた。座学中心だったので、様々な知識を学べるように講義の内容も多岐にわたり、深く学べるものが多かった。また、現地の農家の方を招いての講義では、事前に動画でインタビューを聞き、現地の農場の様子を撮影した動画で学習することで、農家の方に直接お話を聞くことができるオンライン研修中には、活発な質疑応答が行われた。また教材として、現地農場のVR動画が作成された。各自がVRゴーグルを着用して目を開けると、まるで実際に畜舎の中に立っているかのようで、360度の景色を天井から自分の気になるところにまで自由に視線を動かしながら見学することができた。現地に渡航できない中行うことのできる研修として、非常に質の高い研修を受けることができたのではないと思う。

3. デンマークの養豚業

養豚業において先進国としてよくあげられるデンマークは、アメリカとはまた違う方向性で非常に進んでいる。

デンマークは、九州とほぼ同じ面積の日本より小さな島国だ。地形はそのほとんどが平地であるため、耕作に適し、国土の62%は農業のために使われている。農家はほとんどが家族経営で、一戸当たり平均70haの規模がある。しかし、農業関係の仕事に従事しているのは、わずか3%にすぎない。また、農家が出資した大規模な農業共同組合を主体としたビジネス形式が構築され、高度に組織化、効率化されている。デンマークの養豚業の特色として、インデックスにデータを共有すること、抗生物質の使用制限、トレーサビリティ（治療記録を5年間保存）、SPF豚など高い健康レベルの家畜、アニマルウェルフェアがあげられる。日本でこれらはまだあまり進んでいないので、それらの仕組みについての講義は興味深かった。

デンマークは1980年代に農業からの汚染で、海に大量の死んだ魚が発生し社会問題となった。デンマークで生産している豚肉のうち

80～90%は輸出用だ。国内で消費する以上に生産しているということだ。デンマークは島国であるが、日本とは違い、島の周りの海の水深が浅く、海洋汚染のリスクが高い。そのため、畜産業においては密集飼育を禁じる厳しい規制がある。また海外の消費者、政府や自国の消費者のニーズに応えるカタチで、アニマルウェルフェアも浸透している。

4. 研修で学んだことを日本の養豚業に活かすには

デンマークの養豚の経営は、「母豚と離乳豚（7kg）まで」、「離乳豚から肥育豚（110kg）まで」あるいは「母豚と保育豚（30kg）まで」、「保育豚から肥育豚（110kg）まで」のように、それぞれの成長ステージで農場経営を独立して行っている場合が多い。日本に多い一貫経営をしている農場はそこまで多くない。なぜなら、環境問題の規制により豚1頭あたりを飼育するためには、一定の圃場を持たなくてはならない。そのため、「1頭の母豚からいかに多くの子豚を生産できるか」という方向で遺伝的品種改良が進められてきた。母豚1頭からいかにたくさんの保育豚を生産し、販売できるかが収入につながるためだ。しかし、一貫経営において重視することは、生まれた子豚が出荷されるまでにどのくらいのエサを消費するか。健康に生まれ、すくすく順調に成長し出荷されることではじめて収入につながる。そのため、1頭から母豚の乳頭数以上に子豚が生まれたとしても、人工保育設備が必要になる上、人工乳の購入をすることにもなるので、一貫経営の農場では、子豚の数が多くても、あまりに小さな大きさで生まれて成長に時間がかかる豚は歓迎されない。養豚農場の運営の上で非常に大切な糞尿処理の方法も、デンマークと日本では異なる。デンマークの一般的な豚舎の構造は、溜めピット方式で、糞尿が一緒の状態から処理して最終的に圃場で肥料として使用している。日本で多いのは、スクレーパー方式で、糞と尿を分離して回収し、糞は堆肥化、尿は浄化槽で処理することが多い。溜めピット方式より、

スクレーパー方式の方がメンテナンスの必要がある。自然災害の多い日本では、建物の耐用年数もデンマークほど長くはない。デンマークの新規就農のように、日本で養豚場を居抜きで購入しても、そのままでは使用できず建て替えが必要になることが多い。

デンマークと日本では同じ養豚業をしても、環境・法律・消費者のニーズ・働く人材の基礎知識の有無・豚の品種・格付けなど様々な違いがある。そのため、デンマークの養豚の良い点を学び、そのまま導入することができなくても、カタチを変えて取り入れていこうと思う。豚たちが健康で安全で快適に、短い人生ならぬ豚生を生きられるよう養豚従事者は精一杯世話をしている気持ちは世界共通だと思っている。

5. 研修を終えて

実際に養豚の現場で仕事をしていると、養豚の専門的な情報に触れる機会は多いが、高校生のように既成概念にとらわれず、可能性を広げ、想像する機会が減っていた。今回の研修で、高校生が興味を持つ内容や、魅力的に感じることを、または忌避感を覚えることを知ることができた。高校生一人ひとりが研修を受け、考え方が変化し、新しい発見をしている様子を間近で見ることができたのは、とても良い勉強になった。

新規で参入することが難しい業種である養豚業だが、その分事業として軌道に乗れば収益力が高く魅力的な業種であることは確かだ。養豚業に興味を持ってくれている若い世代の熱意と情熱があれば、新規の養豚農場を立ち上げることもきっと可能になると思う。

是非、挑戦してもらいたい。

September 2021

Dalum Academy of Agricultural Business / JAEC report

Dalum Academy is a modern Danish agricultural boarding school, founded on a strong folk high school tradition, where young farmers are not only taught technical lessons about crops, husbandry and on-farm economics, but also gains knowledge and personal development towards becoming active participants in the society they are part of. The Academy is today a self-governing institution, supported by the Danish Ministry of Education, and as such belonging under the same legislation as other Danish vocational institutes.

Dalum Academy has existed as Danish educational institute since 1886, and has been working with international relations for more than 30 years. With offspring in the results in Danish agriculture, hands-on knowledge is transferred to various countries and stakeholders all around the world, both as lecturing done for incoming participants to our campus in Denmark, as well as outgoing lecturers doing classes, seminars and on-farm training locally.

My job at the Academy is to develop and maintain all aspects of our international activities. Coming from primary agriculture before transferring to the educational world 4 years ago, it has always been a pleasure for me to watch young people grow as humans as well as in their mindset, by introducing them to knowledge, training their skills and handing over responsibility – especially the mind-openings that happens internationally, on all sides, when working cross-country and culture.

The JAEC and Dalum first met around the year 2000, and have collaborated several times since then. As the request for this program appeared, we saw it as an opportunity to bring in agricultural and general knowledge, twisted with a totally different angle – *female empowerment in agriculture* – as well as strengthening and emphasizing the already existing partnership with the JAEC. The number of female agricultural students throughout Denmark amounts ≈25% - the number of actual female farmers is lower, but bringing in experience from these, and having been expanding our international activities in Japan's neighboring countries for the last 5-7 years, our Academy has gained massive local Asian knowledge, both in agriculture as well as cultural. All this different knowledge in combination, served as background, and was built into the context as a part of all lecturer's mindset during the presentations of Danish agriculture.

I sincerely hope, on behalf of all involved from our Academy, that we have been able to inspire and encourage the 19 participants to not only follow their own dreams, but also to become role models in their networks and surrounding society – to show that *gender does not matter, but skills, interest and determination do!*

Best regards

Carsten Friis Poulsen
Head of International Division




DALUM LANDBRUGSSKOLE
Academy of Agricultural Business • Denmark
Dept. Dalum • Landbrugsvej 65 • DK-5260 Odense S
Dept. Korinth • Spangvej 7 • DK-5600 Farsborg
Tel. +45 66 13 21 30 • dalum@dalum.dk • www.dalumlandbrugsskole.dk



受入学校

Dalum 農業学校
国際事業部 部長
Caarsten Friis Poulsen

Dalum 農業学校は、デンマークの近代的な農業寄宿学校で、伝統的な民俗高校を母体としています。ここでは、若い農業従事者たちが、作物や畜産、農業経済に関する技術的な授業を受けるだけでなく、自分たちが所属する社会にとって積極的な参加者になるための知識を得ることや、人間的な成長を目指しています。Dalum 農業学校は現在、デンマーク教育省の支援を受けた教育機関であり、デンマークの他の職業訓練機関と同じ法律に則っています。

Dalum 農業学校は、1886年にデンマークの教育機関として設立され、30年以上に亘って国際関係に取り組んできました。デンマークの農業で成果を上げている若者たちを中心に、デンマークのキャンパスにやってくる参加者への講義として、また、現地での授業やセミナー、農場でのトレーニングなどの講義として、世界中のさまざまな国や関係者に実践的な知識を伝えています。

Dalum 農業学校での私の仕事は、国際的な活動のすべての側面を開発し、維持することです。私は初等農業出身で、4年前に教育界に転身しましたが、知識を紹介し、技術を訓練し、責任感（特に心）を引き出すことで、若者が人間として、また考え方として成長していくのを見るのは、私にとって常に喜びです。

JAEC と Dalum は 2000 年頃に初めて連絡を取り合い、その後も協力関係を築いてきました。今回のプログラムの依頼を受けて、JAEC との既存のパートナーシップを強化し、農業における女性のエンパワーメントという全く異なる角度から、農業や一般的な知識を取り

入れる機会だと考えました。デンマークの農業系女子学生数は約 25% で、実際の女性農家の数はそれよりも少ないのですが、そこから得た経験を活かし、また、この 5～7 年、日本の近隣諸国で国際的な活動を展開してきたことで、私たち Dalum 農業学校は、農業と文化の両面で、アジア地域の膨大な知識を得ることができました。これらの知識が背景となり、デンマークの農業を紹介する際に、すべての講義の考え方の一部として組み込まれています。

19 名のプロジェクト参加者が、自分の夢を追うだけでなく、各地域の農業リーダーとなり刺激を与え、励ますような存在になってくださることを、Dalum 農業学校を代表して心から願っています。

性別は問題ではなく、スキル、関心、そして決意することが重要なのです。

皆さんのご活躍を応援しています。

訳・プロジェクト事務局





6 未来の畜産業に対するアイデア

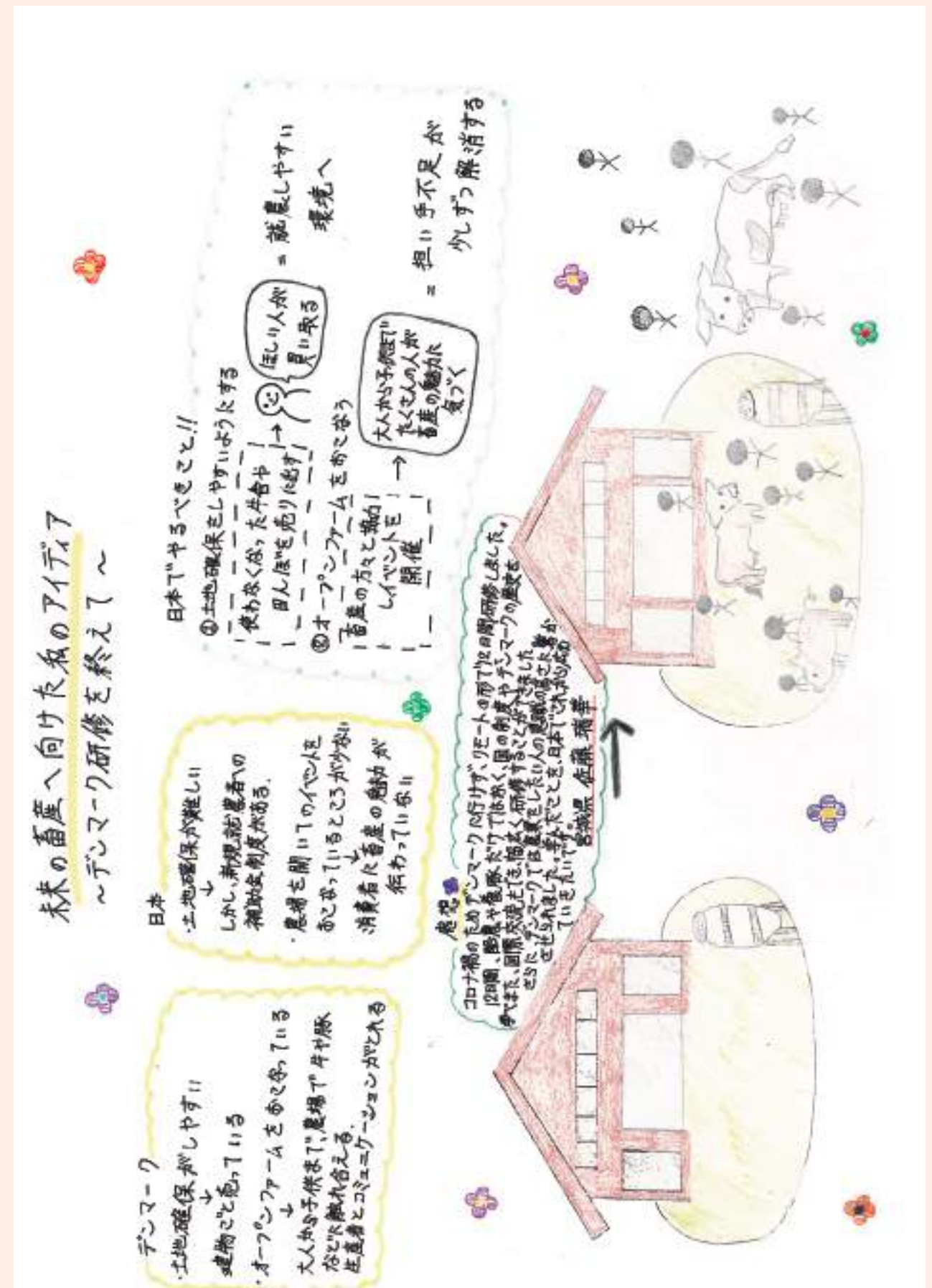
19人の畜産アンバサダーが、このプロジェクトを通じて学び考えたことを、一枚の紙と、動画にまとめました。
外国のやり方が素晴らしいから日本に取り入れるというのではなく、畜産が素晴らしいから、どうしたらもっと魅力的になるのか、フレッシュで心温まるアイデアをご覧ください。



動画はYouTubeの
アグトレチャンネルから
ご視聴いただけます



宮城県加美農業高等学校 佐藤 瑞華



DENMARK研修



女性の活躍できる畜産

高城 瑠菜

🇯🇵 畜産は力仕事だから
女性には向いてないよね

🇩🇰 女性もスキルを生かせば
か、こよく働けるよ!!

① スキルセットで判断

✳️ 女性→力のいらない仕事
男性→力仕事

📌 女性の男性化ではなく
その人は何ができるのか、が大切

🇯🇵 女性は家事や育児があるから
面立が大変だよ...

🇩🇰 家事や育児は女性だけの
仕事じゃないよ!!

② 協力

✳️ 女性は家庭、男性は仕事

📌 家事や育児の分担は当然
常にコミュニケーションを取って
モチベーションUP

作業は性別ではなく、スキルセットで判断することで、より力を発揮することかでき、やりがいを感じることもかできると思います。
また、協力し合うことで、お互いのスキルアップにもつながると思います。
女性、男性だから得意なこと、女性、男性でも不得意なことをしっかり考えることか日本の畜産の発展につながると思います。

これからの日本の畜産

現代の日本の農業は担い手不足や、働き方の問題などがあげられます。今回のデンマーク研修で日本とどこが違うのか比較しアイデアを考えてみました。

1. 土地の有効活用
2. 畜産業のイメージ
3. アニマルウェルフェアに基づいた畜産
4. 女性の活躍できる働き方

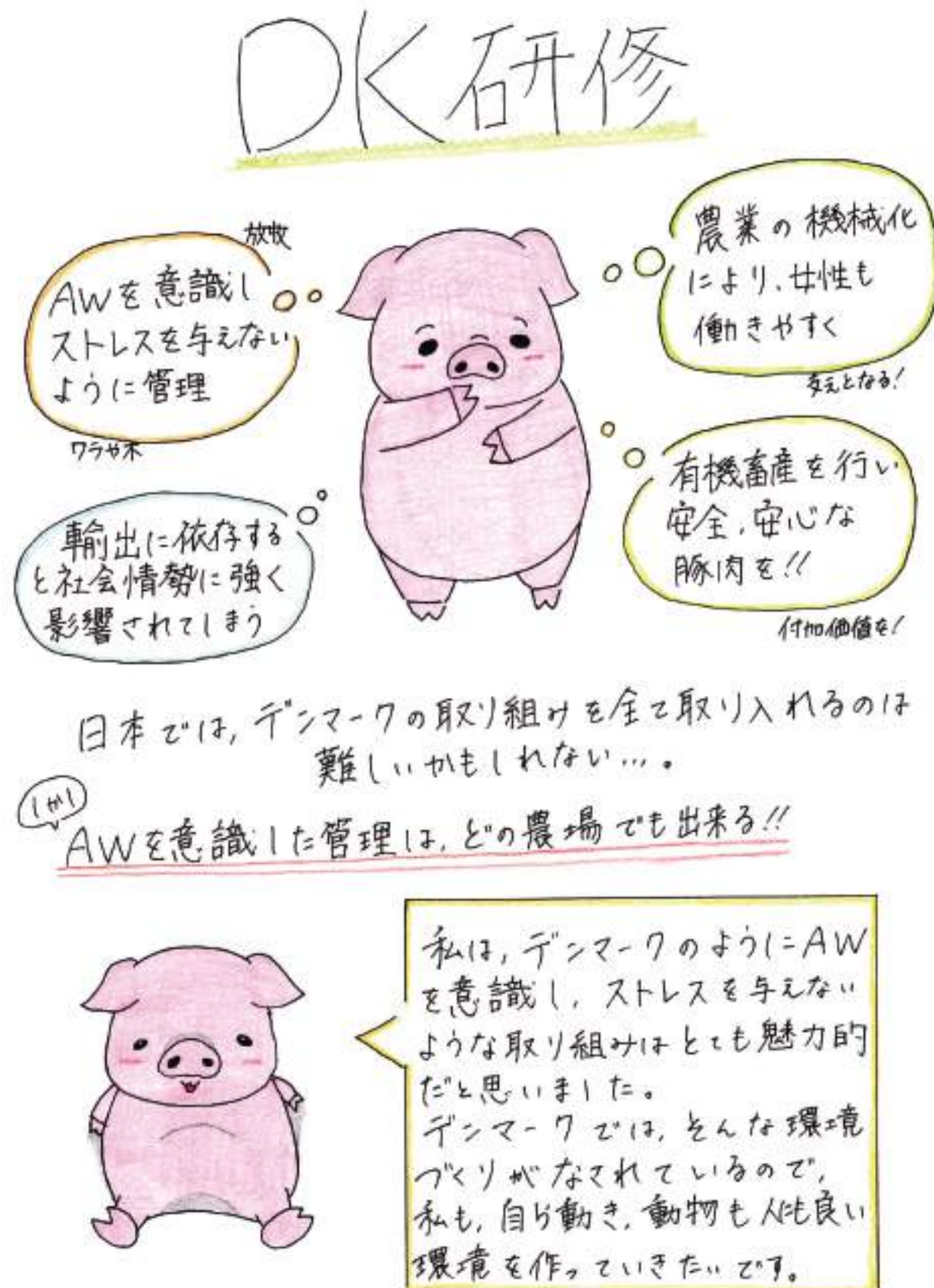
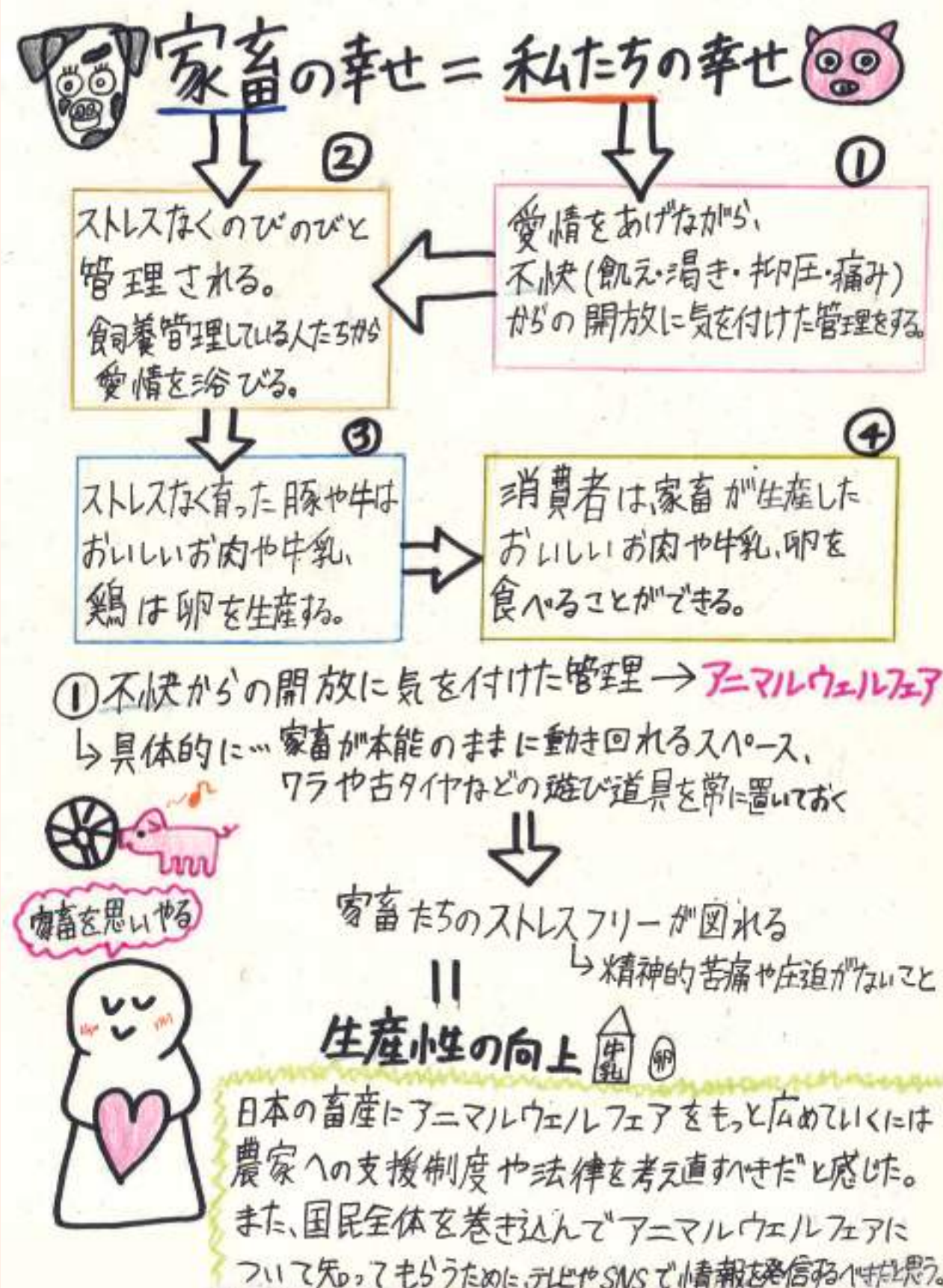
この四つの比較から日本の畜産を活性化させるには？

- お肉重視の畜産から家畜ファーストを目指し、空いている土地を放牧地にしたり飼料の自給率を高めるために有効活用し女性が活躍できる場所を作ります。また畜産業に興味を持ってもらうために農業に関するイベントを増やし農業高校をもっとアピールすることです。



日本の畜産はまだまだ活性化できる力があります。
そのためには海外からの知識をうまく活用できるように海外から農業の指導者を招き一緒に意見を出し合いお互いの国の畜産業が活性化できればいいと思います。そして男女で協力し日本の畜産業が発展してほしいです。私も畜産業に貢献できる人工授精師+農業科教師になって畜産業を盛り上げたいです!







女性でも働きやすい畜産

農業の考え方

- 日本

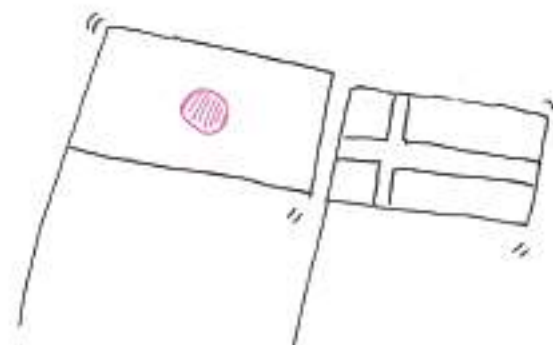
 - 3K(きつい・汚い・危険)
 - 働いている人 男性 99
 - 女性 少

デンマーク

 - その人の能力を大事にしている。
 - 男女問わず自分に合った得意なことをしている。

↓
男女の差がある

↓
男女の差がなく
好きなことに自信をもっている



デンマーク研修で、これからの畜産について改めて考えることができました。学んだことを次につなげていきたい。



DENMARK



＜DKの農業＞

- ・スマート機器導入（飼料の機械、温度管理など）
→重労働という負担の軽減から誰もが畜産を職業の選択肢に選べる！
- ・アニマルウェルフェア
→飼育方法をより本能に近い飼育方に近づけることで、ストレス軽減、良質な肉や生乳生産へとつながる



デンマークでは、より多くの女性が畜産業に携わっていました！日本人の中には畜産業は重労働で女性ではなく男性が適する職業という先入観が先行している人は少なくありません。しかし、DKでは性別関係なくそれぞれが持つ能力や技術を重視！

＜女性畜産業に向いている＞

- ・出産を経験した女性は、動物の分娩時に即座にサポートできる
- ・子供を育てることと動物を育てる共通部分がある
- ・細かなことや小さな変化にもすぐ気づくことができる
- ・マルチタスク
- ・手先が器用



これらの女性
が持つ能力は
畜産業で十分

＜DK研修に参加して＞

私の理想とする畜産は、家畜と生産者双方が利益を得ることができる経営です。

それは、家畜にとって守られる尊厳だけでなく、快適な環境を作ることによって結果的に上質な肉生産へとつながり、また乳牛の生乳の増産にも繋がるため、「福祉」と「経営」は別のものとは考えず、

生産性に関係するものと意識していくことが必要だと考えました。また、デンマークの農業のようにスマート機器を導入することで重労働の先入観を断ち、女性を始め、次世代の若者たちに畜産を

職業の選択肢に選んでもらえると思います！



Denmark

日本

- 多くの農家で飼料が輸入されていて、飼料自給率が25%と低い
- 消費者が豚肉を買うときには値段・原産地・ブランド
- 舎飼いか多く放牧はほとんどない

デンマーク

- オーガニックの豚肉が日本よりも浸透していて、多くの農家が自らの畑で飼料を生産している
- 消費者が豚肉を買うときにオーガニックもチェックしている
- 放牧をしている農家が日本よりも多い

畜産の方法の差

消費者の意識の違い

日本

- 農家は男性に多いイメージ
- 農業の経験がない人が多い
- 高校生で畜産に対してしっかりした意見を持っている人が多くはない
- 仕事だから農業をしている人もいる

デンマーク

- 男女関係なく農業をしている
- 農業の経験がない人が多い
- 高校生の畜産に対してしっかりと意見を持っている
- 好きなことを仕事にしている

ランドレース種

女性の畜産への関わり方差

文化・社会制度の違い

～女性が活躍できる畜産～

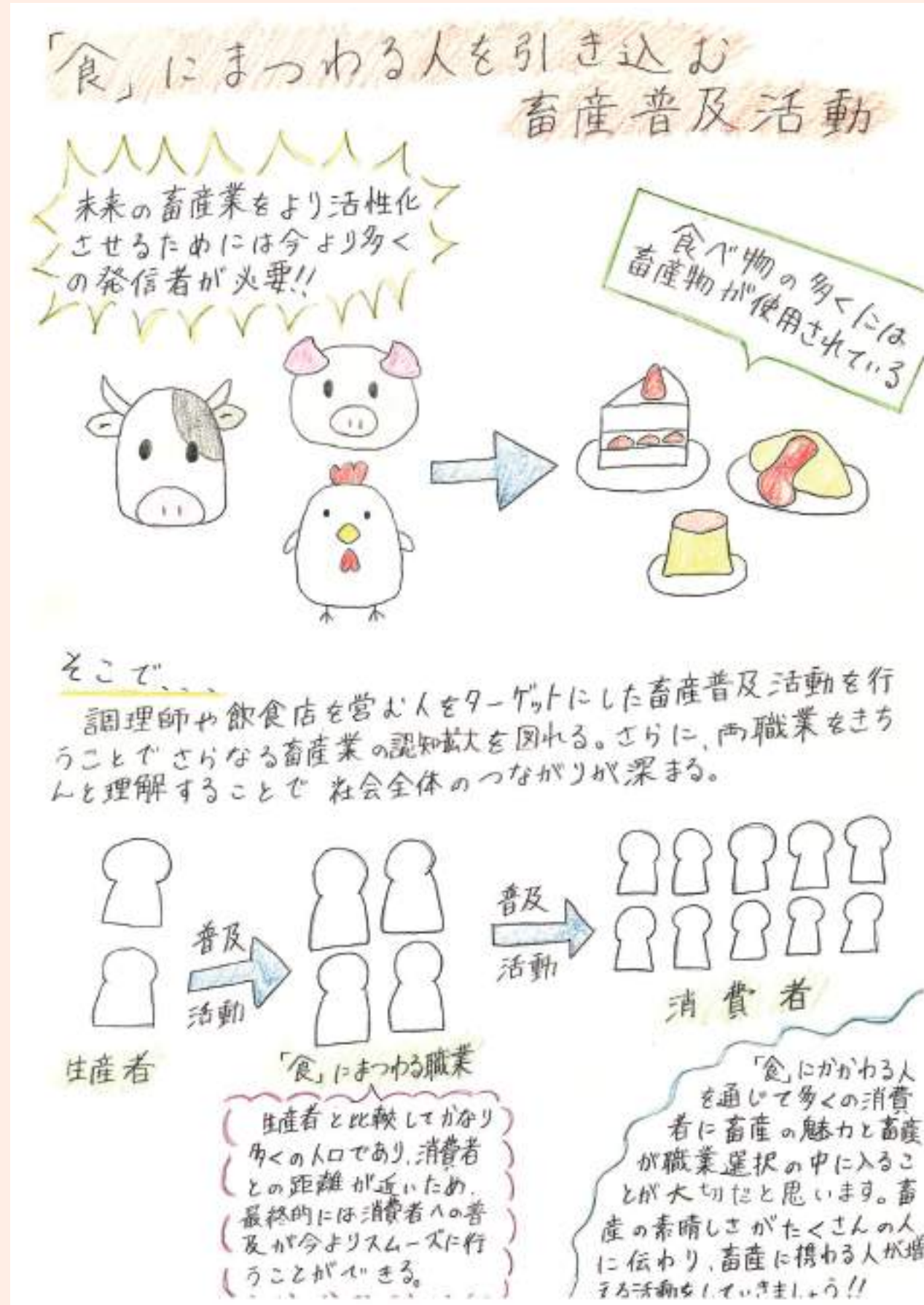
私がこの研修で学んだこと

日本 男女で仕事を区別している... 女性が活躍できていない...
しかし...! デンマークでは...
女性が活躍できる環境ができていた!!
男性だから、女性だからと性別で仕事をわけるのはなく、その人個人の能力に応じて、仕事に就き、ベストを尽くしていました!!
子どもがいる家族経営の農家では、子どもを預けられる、保育施設が充実しており、育兒と農業とよく両立していました!

牛や豚など家畜に優しい環境を整えることも大切!!
女性は畜産に向いている!!
動物が好きだからか、女性ならではの感性や母性本能が活かせる!!
性別を気にせず...

自分の好きなことにベストを尽くしてほしい!!

スマート機械の普及
機械の導入
そのためには 女性が働きやすい!!
今回オンライン開催のため、デンマークへ訪れたいです!!
今回学んだことを自分の人に伝えたい!!



未来の畜産女子 育成プロジェクト

私が一番伝えたい

テーマ

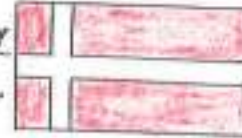
担い手について

未来に繋ぐために欠かせない担い手について特に学びました。畜産の魅力が伝わると嬉しいです。



デンマークについて

今回のプロジェクトでは、リモートでデンマークとつながりました。デンマークは特に養豚業が盛んに行われています。気候日本の北海道に近いです。



トップクラスデンマークは住みやすい都市ランキングや幸福度ランキングで上位を維持しています。

日本との違い

デンマーク	国	日本
約43km ²	国土	約378km ²
約600万人	人口	約1.258億人
25%	税金	10%
70-80%	通貨	円
子供と尊重	教育	後と続く

結果こんな違いが生まれた

税金は高いが、その分補償がしっかりしている。学費を免除してくれる所もある。親も貯金しやすくなり、自身で使える。女子の気持ち親に意見を尊重して貰えるので自分からしたいことを言えると思う。日本の考えも新しくなっていると思う。

私が考える畜産について

私は最も身近なスーパーで買う精肉や卵、乳製品が畜産に関わったことだ。私と同じ立場の人にも畜産に興味を持って貰うために、2つのアイデアを考えました。修学旅行での体験家族で行くには少し距離があるという人でも、行事としてなら参加しやすいと思うから。テレビを活用し、よりなおる好きな芸能人が番組に出ていたら必ず見る!という人が多いと思うから。

プロジェクトに参加して感じたこと

様々な人に出会える日本の高校生やデンマークの同年代の人、畜産農家の人、先生方などたくさんの人と出会うことが出来た。将来の夢を持っている人達と会話することによって、私も頑張ろうと思うことが出来ました。また、出会った人達全員から、こころ、かわいさ、素敵でした。



For Happiness

世界トップレベル!

~女性もバリバリ デンマーク畜産の在り方~

I can do anything!



Be free!



ビジネス

- 機械化→重労働! 女性も働きやすく
- 有機×Animal Welfare→上質・付加価値・安全
- 生産過程の“story”を届ける
- 世界を相手に独自性を持って

ブランド化

強み

女性の活躍

- 男女関係なく個性とスキルを活かし働く
- 仕事や家庭内での男女の協働
- 充実した支援制度が支える
- “Farming makes women smart and men strong.”

好きなこと

自信

Animal Welfare(家畜福祉)

- 広いスペース+本能尊重→自然体でのびのび
- 厳しい規則で高水準に
- 家畜の生産性向上=元気で長生き
- 家畜の幸せ=巡り巡って自分たちの幸せ

トレーサビリティ

ストレス軽減

放牧

畜産の担い手

- イベント・体験活動→畜産に触れる機会
- 個人の意思や目標を尊重→支援制度が整う
- 子どもや若者に畜産への興味を早くから自立心を

夢・目標

環境・サポート体制



人・家畜・環境の特質を最大限に…→効率よく高品質、循環型農業

個性と行動力、それを支える充実した支援制度



限られた土地でも質とこだわりの追求を!

畜産への理解を広め、広い視野で躍進を!



家畜にだって、ココロがある。
どんなことだって、やればできる。

畜産は、ワクワクがいっぱい!

デンマーク畜産を学んで...



畜産の仕事
搾乳 給餌
除糞 哺乳
除角 去勢
草刈り
分娩介助
など

畜産の魅力
命の連鎖
一生懸命 生きる動物
から学ぶことは多い!!

3K 危険
暑い 寒い 重い 暑い 寒い 大変
汗が 出ない?

厳しい現状
少子高齢化 過疎化
食料自給率低下
耕作放棄地 増加
飼料費 高騰 など

性別役割意識
男にやる... も 厳しい!

デンマークでは...
1. 性別ではなく、個人の **スキル** 希望 能力を重視
⇒ 女性農業経営者も 多い
2. **アニマルウェルフェア** への関心も高い
⇒ 新しい価値観・柔軟な
発想を持った人が活躍
できる
3. **スモール農業化** も可能
⇒ 体か自信のない人・力の弱い
人も 創意工夫できる

黒木 樹里

畜産の 魅力発信 + 意識・環境改善!

DANMARK

放牧養豚のメリット
その1 有機農業が環境に優しい
その2 動物に対してストレスを最小限に抑えるアニマルウェルフェア

～デンマークの言い伝え～
農業をすることで
女性はおかしくなると言われており
男性は強くなると言われています。



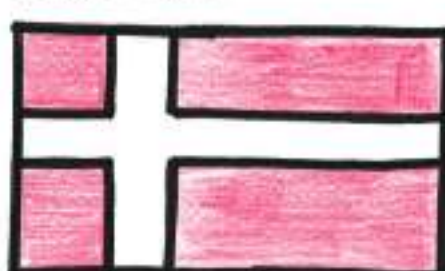
Svin(豚)

Q&A
Q 有機農業はもうかるのか?
A. ルールにしたがっていればそれなりに
収入はあるようです。
有機農業は10人の事をしているので
高額で販売できるようです。



ko(牛)

Point!
デンマークでは有機農業にかま入っています!
そのせいか農業系の学校では学費が
免除になっている所もあるようです。
寮完備の学校もあり、利用する場合
家賃がかかりますが、自宅に通う場合
は無料です。





7 むすび

このプロジェクトの醍醐味は、高校生たちに海外の畜産業を直に見せることにあります。実際にデンマークに行って学ぶことを前提としたプログラムを構築していく中で、2年目のコロナ禍がまだまだ大きな障壁であることを知りました。そこで、プロジェクトの内容を見直し、オンラインでできることを前提としてプログラムを再考することとなりました。

令和3年度は、テレワーク、リモートワークが日常化してきたことで、オンラインでのプログラムを作ることはさほど大きな問題ではありませんでしたが、現場に行かずにそれと同等の学びを得る方法を何度も考え直していきました。プロジェクトスタートが直前に迫る中、推進委員やメンター、プログラムを引き受けていただいた Dalum 農業学校の先生たちと議論し、オンラインで行うと決めました。人と人とのつながりを大切に思うからこそ、実際に会えないこ

とを大切に考え、参加者の満足につながる、そして大きな学びと、畜産を目指している人のモチベーションアップとなるプログラムにするべく、アイデアをかたちにしようと努力しました。

成果のほどは、この報告書をお読みいただければご理解いただけたかと思いますが、海外農業研修の新しいかたち、可能性を示唆するに足る挑戦ができたのではないかと思います。

畜産現場のバーチャルリアリティー動画教材、動画での予習とデンマークの農業学校での授業を組み合わせたオンラインライブ学習、デンマークと日本の畜産物の食味比較実験、デンマーク同年代の生徒たちとのオンライン交流会、演出にこだわったオンライン発表会など、参加者がワクワクするような仕組みを用意できたのではないかと思います。

参加した高校生たちはいつも前向きで、難しい講義の内容も吸収しようと真剣に取り組んでいました。英語での質疑応答にチャレンジしたり、限られた講義時間を無駄にしないようどんどん発言したり、その積極性に感動するとともに、どんなに制限ある環境であっても楽しめる心を持った生徒たちの姿勢に強く勇気づけられました。

令和4年になりコロナの問題のみならず、ウクライナ情勢など国際的に難しい局面が続いています。しかし、海外とのつながりを持った若者たちが日本の畜産業を大切にし、そして、外国にも敬意を示していくことができたなら、日本の畜産はきっと明るく素敵なものになると信じ、私たちも努力を続けてまいりたいと思います。

最後に本プロジェクト事業実施にあたり、多大なご支援を賜った皆様を感謝の気持ちを含めてここにご紹介し、むすびといたします。(順不同)

日本中央競馬会、公益財団法人全国競馬・畜産振興会、農林水産省経営局就農・女性課、農林水産省生産局畜産部食肉鶏卵課、駐日デンマーク王国大使館、全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場協会、日本学校農業クラブ連盟、Dalum Landbrugsskole、通訳 Jerry Jewett さん、株式会社 Magic Plus、中日本フード株式会社、左草ブラウンスイス牧場、曾我の屋農興株式会社、株式会社マイナビ農業活性事業部、株式会社メディアオ ch FILES、事業推進委員の納口るり子先生、高橋ゆかり先生、鈴木憲治先生、メンターの藤田春恵さん、野上遥さん、現地調査員の大城 Jebson 直子さん、スペシャルサポーターの岸田隆志先生、事業に応募してくださった高校生の皆さん、畜産アンバサダーの皆さん

令和4年3月
未来の畜産女子育成プロジェクト 事務局



担い手のための畜産



森岡亜希

デンマークの農業従事者は全人口の約3%しかおらず、担い手不足は日本と変わらないことが分かりました。一方で、消費者が農業や畜産業に対して高い関心を持っています。農業従事者の割合は少ないものの、農業や畜産業に関心の薄い国民は少なく、全体の意識が高いと感じました。



この研修に参加し私が一番衝撃を受けたのは、デンマークの農業学校に通う生徒がしっかりと自分の夢や目標を持っていることです。彼らは「酪農家になりたい!」「農家になりたい!」という想いをとても強く持っていました。



清水七星

デンマークには「女性が農業をやると賢くなる、男性は強くなる」という言い伝えがあります。その言い伝えを日本でも広めていき、体験イベントなどを通じて子供たちに農業や畜産について興味を持ってもらい、普段食べている食べ物がどのようにしてできるのか、命の大切さをより理解してもらいたいです。若い世代には農業への道もあることを知ってほしいです。



大久保冴華

女性が畜産をするのは難しいというイメージがありますが、女性でもできるという考えを広げていきたいです。私が畜産をしている姿をたくさんの人に見てもらい、畜産業は女性でもできるということを広めていくことで、これからの畜産の担い手自体も増えると思います。



佐藤瑞華

畜産業は、食べることで得られる幸せを生み出すことができる希望にあふれた職業だと思います。美味しいものを食べることで、生きるのに必要な幸福を作り出すことができます。「人が生きていくための意味」を生むことができます、とても素晴らしい職業です。



江口歩那

女性の活躍できる畜産



黒木樹里

大変な養豚業において、親豚を見守り、子豚を無事に育てようとする女性畜産農家の熱意に心を動かされました。これは、「女性だから」できることではないと思います。性別で役割を変えるのではなく、一人ひとりが自分の持っているスキルを活かして好きな仕事ができていることが、本当の「男女平等」なのだと感じました。



デンマークでは、一人一人の能力をお互いに尊重し合い、仕事をしていることが分かりました。人にはそれぞれ得意、不得意があるので、それをみんなで補っていくこと、性別に囚われない考え方をしており、女性が働きやすい環境作りや男女の比率などを気にしておらず、それが当たり前だというのが日本との違いだと実感しました。



内藤佳澄

研修に参加し、日本の畜産にはもっと女性が必要だと思います。女性ならではのアイデアや感性が生まれること、母性本能が働くことなどがあり、畜産に向いていると感じました。デンマークでは、様々な種類のスマート機器や機械の普及率が高いため、女性が男性との力の差を気にせずに仕事ができている。女性が働きやすいように、スマート機器や機械をもっと日本でも普及させるべきだと思います。



前田瑛美佳

女性畜産従事者を増やすにはまず環境を整えることが大事です。デンマークでは保育施設が充実していて、育児に関する政策が豊富で、子育てと仕事を両立できる環境が整っています。日本でも男性が当たり前のように育児休暇が取れるような環境が必要で、育児の仕事が家族で分担して行うことにより、女性の負担が減り、女性が更に活躍できる社会につながると考えます。



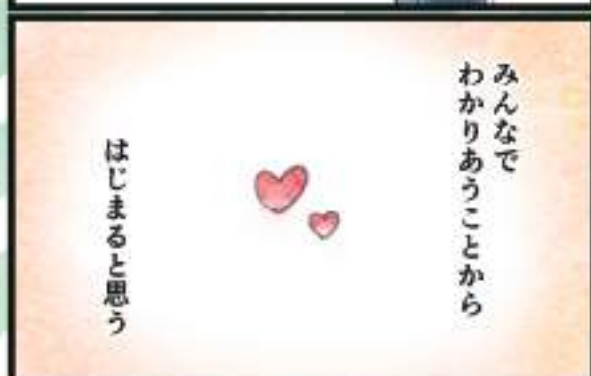
岩倉綾野

デンマークには、やりたいことが明確で意思をしっかり持っている女性が多いですが、女性が活躍している理由はそれだけではないと感じました。男性に限らず、社会全体で性別ではなくその人の能力で評価するという考え方が浸透している結果だと思いました。



高城瑠菜

家畜や自然のための畜産



デンマークでは、山のない広い平地を利用し、家畜たちが畜舎と放牧場を自由に出入りできるようになっていた。畜舎が適温でないとアラームが鳴ることや、好奇心旺盛なブタのために木、藁、縄などの噛んで遊べるものが置いてあるなど、とにかく家畜にストレスを感じさせないような飼養管理をしていました。家畜を何よりも1番に考える「家畜ファースト」です。



伊澤七星

動物を「感受性のある存在」と捉え、家畜にとってストレスや苦痛の少ない飼育環境を目指すアニマルウェルフェアの考えが広がっていて、すごいなと思いました。動物が出来るだけストレスを少なく健康な生活を送れる方法、そして対策を考えること、日本の畜産にアニマルウェルフェアを広めていく必要があると思います。



石嶺心菜

「家畜の本能を重視した農業方法」を主体にしていて、家畜(動物)にとって守られるべき尊厳だけではなく、快適な環境を作ることによって結果的に上質な肉の生産へとつながり、乳牛のミルクの増産にもつながっています。「福祉」と「経営」は別のもと考えず、生産性にも関係するものと意識していくことが、今後の日本の畜産にとって大切なことだと痛感しました。



川島希望

デンマークと日本のアニマルウェルフェアに関する飼養管理の違いは、社会全体の家畜への考え方だと感じました。ストレスフリーで育った畜産物の質が良く、家畜の幸せが巡り巡って自分たちの幸せにもつながっていることの認識が国全体にあるからだと考えます。オーガニックが多いことや農家への支援制度が整っていることは、家畜に動物本来の自然な生き方をさせながら効率よく高品質な畜産物を生産することにつながっています。



林 真那

ビジネスとしての畜産



A.M.

デンマークが輸出に強くなった理由として、友好国との貿易がうまくいった、市場のシフト転換が早かったことが分かりました。市場シフト転換や貿易のうまさ、デンマークが輸出に強くなった理由だと思っています。また、アニマルウェルフェアの考えを取り入れることで、得られる付加価値や消費者の声をしっかり商品に反映できる力が大きいと言えます。

デンマークでは、上手に機械を導入していて、大規模で効率のいい畜産経営を行っています。日本では、少子高齢化や産業の担い手不足といった課題に直面しています。畜産を持続的に開発していくためには、やはり機械化が必要であると感じました。機械化を日本の畜産に導入していくことが大切であり、そのためには日本の農業に関する法規基盤が拡充することが急務であると考えます。



庭ひまわり

デンマークでは、消費者の有機農産物認知度が日本より高いと感じ、その理由は有機農業で作られたものが一般的なことにあります。「有機農業」という言葉と、「どのように生産しているか」を消費者に知ってもらうことが大切だと思います。有機農業農家が儲ければ有機農業をしている人が増え、環境にも動物にも優しい農業が日本でも実現できると思います。



瀧井麻菜

消費者はどうしても安さを重視になりがちで、その安さには何らかの理由があることを考えようとせず、家畜がどう育ったのかのストーリーを知らないと思います。生産者は消費者の要望に応えるべくコスト削減に懸命に取り組んでいます。消費者が畜産物に安全性や家畜の健康・幸福を求めれば、生産者はそのニーズに応えようとしています。



松浦日依梨

デンマークでは、アニマルウェルフェアの考えが法になっていて、動物にストレスを与えないようにする政策がしっかりしています。手間やコストはかかりますが、アニマルウェルフェアの考えをしっかりと取り入れた管理方法を行うことで、肉質が良い肉を生産でき、結果的に高い値段が付き、収入につながります。



木暮千尋



日本中央競馬会 令和3年度 畜産振興事業
未来の畜産女子育成プロジェクト事業報告書

発行	令和4年3月
発行者	公益社団法人 国際農業者交流協会
住所	東京都大田区西蒲田5丁目27番14号 日研アラインビル8階
電話	03-5703-0252
E-mail	mirai@jaec.org
URL	https://www.jaec.org
校正・デザイン	Ami Muraguchi
印刷	株式会社 エーヴィスシステムズ



無断転載禁止

予告 令和4年度事業

未来の畜産女子育成プロジェクトは、
畜産ティーン育成プロジェクトに変わります！

- プロジェクト参加者募集
高等学校生徒20名
- 研修日程（予定）
 - ・事前研修（オンライン）
令和4年6月中の5日間
 - ・海外研修（デンマーク）
令和4年8月中の12日間
 - ・研修成果報告会（オンライン）
令和4年9月下旬 YouTube Live 配信

海外の畜産を学んでこれからの日本農業を考えよう！

畜産の素晴らしさやその魅力を
プロジェクト参加者と一緒に発信しよう！

